
オンナオトコの乱

明治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オンナオトコの乱

【Nコード】

N4747M

【作者名】

明治

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣オマージュ（？）（二次創作ではありません。せん）。「お前たち、女子に勝ちたいか？」氷川矢琴の親友、有村要也は、クラスの全員に向けて問うたのだった。ここは、地獄だ。女子が自らの圧倒的多数を理由に、男子を蹂躪し続ける学校。女子達に校内での権利を全て握られ、少数の男子は校舎の隅にくすぶり続けるしか無かった。……だが、このままで俺達が終わってたまるものか。男子たちは立ち上がった。今回の生徒会総選挙から、必ずや男子の生徒会長を輩出してみせる！ どんな熾烈な戦いも乗

り越えてみせる！　そして目指すのだ、我が校における男子の復権を！　……いや勝てる気はしないけど！

【ブローグ】勝てる気しないけど！（前書き）

二作目です！

更新速度は二日に一度ほどになると思われますっ！

「プロローグ」勝てる気しないけど！

タイミングとして、現在は授業の開始前。

教師が到着するまでの僅かな間を縫って、教壇に立った一人の長身。ありむらじょうぜ有村要也。

教卓の両端を掴み体重をかけている。席に座る全員を軽く見渡し、彼は発言した。

「お前たち、モテたいだろう」

第一声が、ソレである。

「俺はずっと、嘆いていたんだ。女子が男子に蔑まれ続ける現状をな」

奴の話に聞き入るクラスの全員は、漏れなく全てが男であった。

「男子の復権、目指したいだろう？ だから俺は、今期の生徒会長に立候補した」

僕は、転化性の無い日常に対してだけ、構えていた。

だから彼の申し出は、そんな僕にとって唐突すぎる事実だった。何を言い出すんだ奴は、と。選挙をするつもりなのか。あれだけの女子達を相手にして。

「多少勝手に無茶な真似をしてるのは重々承知だ」

手を振りかざしながら語る有村に対し、教室中から挙手も無く、

雑に質問が飛んでいく。

『男子のお前が選挙で勝てる見込みはあるのか？』

質問の声に、しっかりとした意志は感じられなかった。

「勝てるかどうかじゃない。勝たなければならぬんだ。ここで勝たなければ俺達男子は延々と寂しく辛い日々を過ごすことになる」

木々がさざめくようにして、教室に声が湧き立つ。皆、戸惑うのは当然の事だ。

「お前ら、どうする？」

時間に比例して、当惑のざわめきは沈静化していった。一人、また一人。

その内全てが、楽しげで自信めいた決意の声へと入れ替わっていく。

「……女子棟の澤田^{さわだ}ソラ、玉垣^{たまがき}奈乃沙^{なのさ}。どちらを生徒会長にしてやるわけにもいかない」

有村は視線を尖らせながら、横眼でチラリと僕を見やってくる。僕にも参戦の意思表示を求めているのだろう。だから視線で意志を返した、やってやる、という言葉を含めて。

即決だが、それでも身に付けた覚悟は十分に高まっている。しかし有村の奴、選挙に対して、勝利の算段があるのだろうか。無鉄砲な奴だよなあ……こんな様子で、勝てるのか？

「お前たちも知っているだろう？ 特に……矢琴^{やこと}を狙っている勢力

もある。矢琴は俺達の仲間だぞ、当たり前のことだな。だからこそ、命をかけて守ってみせる！」

驚いた。

『ほお、なかなか男を見せたじゃないか、有村』

矢琴とはつまり、いや、つまらなくても、僕の事である。だから、素直に気持ちを言葉にするならば、嬉しかった。クラスメイト達がそれぞれ自由に騒ぎ始める。連中の言葉はどれもこれも、ぎこちなく、そして楽しげに、有村の心意気を称賛するものだった。

「男子の復権は欠かせない目標だ。ならばと、俺は自ら立候補する他に道が無かった」

『ああ、俺はお前を支持するさ』

『ソラさんに勝利を譲ったら、貴重な女子が一人……この教室からいなくなるのか』

僕は女子ではないのだが。

「ここで今一度、問わせてもらっぞ」

有村は大げさに腕を開き、僕を含めた全員を見渡す。クラスメイトたちもまた、有村を見つめ返す。眼には、気概しか宿っていなかった。

「女子に、勝ちたいか？」

一時の、精寂。そして

『うおおおおおおお！』

瞬間、耳の奥が痒くなるような雄叫びが、教室を震わせる。腕を振り上げる男子たちがいた。心臓の中に暖かい、綿毛でも咲いたのかと思った。びっくりするような心地だ。

戦って、そして勝つんだ。絶対に勝つんだ。そう、決めた。

【第一話】超音速で残像を残し発せられる「死ね」

現在の僕たちは、絶賛戦争中である？

うん、である。

学園は、女尊男卑。女子の圧倒的多数によって敷かれた、男子に対する支配である。

男女という生き物は、どちらかが片方が多数なれば、少数は、肩身を狭く過ごさねばならないんだ。そんな事実を僕は、この学校生活で、噛み締め味わってしまうほどに知った。

状況は深刻だ。大半の女子は、男子を目の敵として認識している始末。

もちろん男子は、のうのうとこのような支配を受け入れるはずもなく反旗を翻した訳で。

だから、絶賛戦争中。

休み時間という休み時間、学園内なら、ところ構わず繰り広げられる死闘。他校の安穩とした精神健常者に、あの死闘こそが我が校にとつての生徒会総選挙だと説明したところで誰が理解するであろうか。

「……」

今日も疲れたということだ溜息をつきつつ、ようやく安息の地つまりはマイハウスに辿り着いた僕。ノブに手を掛けて、懷から鍵を取り

……鍵が、開いている？

疑問を感じるが早くドアを引き開く。中に見えた景色は、見慣れた自宅アパートの玄関。

ただ一人、ちっこい何者かが……見通せる廊下に立ちつくし、こちらを見つめているという違和。

僕はこの何者かに、帰宅を待ちつけられていたのか？

「死ね」

え。

重厚な造りの玄関扉を開けば僕を包み癒してくれたであろう憩いの時間は、開始するまでもなく崩壊したらしい。

まさか、家に帰って早々に死ねなどと言われるなんて。バイオレンス。

「……？」

まじまじと、非日常の原因たる人物を見つめてみる。

誰だ。

女の子だ。

僕の欲求不満が生み出した幻覚の類だろうかいや違う。

確かに彼女はそこに居た。

後ろ手に手を組んだ、小柄な少女。背中にはリュックを背負っている。

読んで字の如く一人暮らしであるはずの僕に、こんな可愛い同居人がいるはずもないし。

見た目だけなら、小学生の高学年に差し掛かった年頃だろうか。
ふわりと結んだポニーテールを揺らしながら

「死ねー」

ちよ、また言われた。

「思い出した？ 私のこと」

思い出すも何も、思い出したら何なんだと言わざるを得ない。

どう考えてもこの子は、玄関で僕の帰りを待ち受けているべき人間ではない。

「何で僕の家には？」

靴を脱ぎ揃えつつ、呼びかける。正面に向き合った。

身長之差からして必然的に彼女の体軀を見下ろす形だ。

相手はこんな小さな子供だ、湧くべき危機感だって、湧くはずもない。

「と、当然でしょ！ 私がここに居て何が悪いの？」

「まあ、全体的に」

少女は依然、強気の態度を崩しはしないらしい。毅然というべきか。

可愛らしい顔をした子供だけに、生意気なのが残念だ。

自分にロリータ的な趣向が無いことに後悔すら覚える。

見るもの全てを愛苦しさのままに魅惑しそうな、大きな瞳。

小さな手、体、鼻。

「……何か文句あるの？」

「あるよ普通」

「むー……！！！」

じつと、見つめられる。さあどうしたものか、この子供。

こんな状況に騒いだり慌てたりしないだけ、僕の順応性に感謝してほしいものだが……。

ひとまずは

「警察か親に電話するか、どっちがいい」

僕が携帯を取り出すと

「ごめんなさい！」

なかなか従順な子供じゃないか。

肩に掛かるか、掛からないか程度の後ろ髪に指を通した。無論、自分の髪だ。

妙にさらさらしてて、女っぽくて、触れるたびに複雑な気分が起くる。

僕も男子の端くれ。

無論、短髪を望んでいるのだが、これがまた、僕に短めの髪型は悲惨なぐらいに似合わない。

そんな理由もあり仕方なしに髪を伸ばしているわけだが……。やはり女子に見間違われることは多々。

女子の癖に、何故男子用の制服を着ているのだと問われ問われ、指導室に連行された経験だって少なくない。声も高いし、体格にも角が無く丸っこいし、顔つきだって……残念ながら、自分でも女そのものとしか感じられない。

「ええと」

女の子を目前に座らせて、状況を頭に整理する。

「キミは玄関横の傘置きに隠してた鍵を使い、僕の部屋に侵入した。そうだろ？」

「てへ」

「警察か親に電話するかどっちがいい？」

「ごめんなさい！ てへとか言ってごめんなさい！」

なかなか従順な子供じゃないか。

ここはリビング六畳一間。僕の一人暮らしにあたって、両親が与えてくれた部屋だ。

片隅には、彼女が持ち込んできたらしい複数のカバンが押し固めた状態で置かれていた。

比較的綺麗に片付いた部屋だろうと、自分でも思う。それもあくまで、健全な男子の感覚としてはだけど。

「お兄ちゃん、やさしくないね」

「もちろん」

「でもね、本当はお兄ちゃんが優しいってこと、初葉はつはは知ってるよ？」

「それは大きな間違いだと思うから、今のうちに考えを改めるんだ」
「でも、お兄ちゃんはいつも優しくったでしょ？」

「……ん？」

意識が沈降する気がした。何言ってるんだ、この子。
だんまりと、ポーズだけでも考え込んでみせるが、思考が停止した頭に閃きなど都合のよい物が走るわけでもない。

部屋が静かになった。

窓から差し込む夕日に、宙を舞うホコリが反射する。
聞こえる音は衣擦れと、壁掛け時計の秒針が時を刻む音。

「ちょっと待て、僕はいつからお前のお兄ちゃんになった！」

お姉ちゃんと呼ばなかった点だけは褒めてやろう。

「ほ、ほんとに覚えて無いの！？ お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ！」

この子供は一体、何を言っているんだ。

瞳を見つめることで感じられる真摯さは、本物だ。

「僕がお前の、オニーチャン？」

「そう。残念だけど……覚えてないんだね。お兄ちゃん」
「うん」

顔面をどつかれた。

痛みにうずくまっている間、彼女は湿っぽい表情を取り返した。
窓の外を見つめて、しみりと呟く。

「……お兄ちゃんは、きつと、記憶がないんだよ」

何その衝撃の事実。

「だから初葉の事を思い出せないの」

「いや、一昨日の晩飯も思い出せ」顔をどつかれた。

「お兄ちゃん、初葉の事……忘れちゃったの？ 駄目だよ！ 忘れたとは言わせないから！」

「忘れた」

「死ね」

なんで僕がこんなにも理不尽な目に。

「……お兄ちゃん、そんな人じゃなかったよ」

初葉と名乗る少女は諦めたように息をついた。途端に、訴えを繰り返していた視線を厳しく伏せる。

不機嫌、と言ったところか。

僕は散々痛めた顔面をさすりつつ、彼女に話を持ちかける。

「……冗談だ。忘れたなんて、嘘だよ」

出任せだ。

「思い出したの！？」

「あ、あー……。うん」

彼女が妹であることを、信じたふりをしてみよう。

正直、『優しい』などと言われる筋合いはまだ分からないが、彼

女の顔にはまだ見覚えがあった。
そうでなければ僕がこれほど落ち着いて彼女に対処できるはずもない。

彼女は確か、女子棟における生徒会長立候補者の一人、玉垣奈乃沙先輩の妹だ。

先輩と一緒にいたシーンを、一瞬だけ目撃したことがある。
その時に聞いた話によれば、僕の一つ年下、中学三年生か。中学生の制服を着てくるせにやたらチビツ子だったもんだから、ここに来て思い出せる程度に、記憶には残っていた。

まあ僕も、人のことを言えるほど立派な背丈は持ち合わせちゃいないし、むしろチビだけど。

とにかくもって彼女は、僕の妹なんかとは違うのは確かな事実。
DNAの構造から出直してこい。

「そう、私、昔引つ越した初葉だよ！ 信じて！」

生き別れ設定らしい。思惑はよく掴めないが、やはりのっておいても損はないだろう。

しかしまあ、ここまで真剣に訴えられると、あからさまな嘘にも妙な信憑性を感じられるのは何故だろうか。彼女は恐らく、自分が僕の血縁者であると言いくるめて、取り入ろうとする魂胆なのだろう。なんて無理な思考の持ち主なんだ。

生徒会長総選挙に関する活動は学校外じゃ禁止されているはずだ。
奈乃沙先輩が妹にそんな指示をするとも思えない。

恐らく初葉の行動は、姉に内緒。独断なのだろう。

「……信じてよ」

僕の袖をギュッとつかむ初葉。モジモジと体を動かしつつ、僕の顔を見上げてくる。

「そしてお兄ちゃん……今日……泊まっていっからね？」

「何で」

「言えない」

困った。

「お兄ちゃんと暮らしてみたいの」

「理由は」

「言えない」

困った。

この子を奈乃沙先輩の家に突き返すにしても、家の場所を知らないし……。

先輩に対する連絡手段も無いし……。

さて、この娘、一体どうしてくれようか。

【第二話】俺と私は握手もできない（前書き）

展開は、かなりゆっくりめです。

【第二話】俺と私は握手もできない

本日ラストである、休み時間終了のチャイム。選挙活動禁止時間の合図でもある。

休み時間以外の選挙活動は禁止であるから、今日の抗争はひとまず終了だ。

「もう小競り合いも終了じゃないのか？ そろそろ何か行動が必要だと思うんだけど」

男子の仲間数名を背後に引き連れて、僕は教室に帰還した。喋り掛けながら歩み向かう先は、我が男子棟唯一の立候補者、有村要也の隣。

有村は窓の淵に手を掛け、身を任せている。どうも女子棟の校舎を眺めているらしい。

迷わず、僕は有村の隣に並んでみた。

……彼の肩までにも、僕の身長は届かない。

彼がいくら長身と言えど、それが世間の物差しで測りきれぬ範疇を大きく飛び越えているのとは決して違う。認めたくはない事実だが、つまり、僕が低い。すごく低い。

「矢琴か……？ ご苦労だったな」

有村に、見下ろされる形で尋ねられた。

僕は足首の筋を精いっぱい伸ばして、彼の肩程度にまで視線を高めている。

「教室に帰って早々、何やってんだお前は」

背伸びしてみたのが、バレた。同時に、身長についての悩みも感付かれたようだ。

「可哀そうなチビめ」

「……はあ」

背が低いのは、昔から自分にあるコンプレックス。

人が僕を女と見紛う原因の一つでもあるし、何より、チビじゃ女性にも人気は出ない。

僕も人並み外れぬ価値観を持つ男子であるゆえに、それなり……いや結構、女子との交遊は持っておきたいのだが……モテようと入学した先がこんな学校だったのがまず間違いであつたし、それを差し引いてもチビだからモテないと。

まあそんな僕ではあるが、愛の告白として、好きの一言を伝えてくれた人は、ありがたい事にたくさん現れてくれた。実はモテモテナ僕だ。

悲しいことに相手は全員が男子だったけど。

女子は女子で、好意的な人も、僕を女子の仲間としてしか認識してくれない。

現時点、男子棟の中で僕を男として扱ってくれる人間は、今、遠い目で窓の外を眺めている彼。

有村一人だけ。

「有村。そろそろ選挙も大詰め、というより本番だろ？ 敵がいつ、本格的に行動するか分からないし」

参謀的立場として有村を補佐するらしい役割に抜擢されたのが、僕だ。

我が校の生徒会選挙には少々特殊なルールが設けられている。学校側の、粋な計らいと言ったところだろうか。今年男子棟が建築され、共学制となった我が校。男子生徒の僕は、当然一年生。選挙に参加するのも初めてである。

まあこれが珍しい制度で、とかくユーモアというか、遊び心があると言うか。

簡単に言えば……ゲームだ。

まず、生徒会長の立候補者がゲーム上、各チームのリーダーになる。

その投票者は立候補者の兵隊となり、自らが投票した人物を勝利に導くため、応援する。

ゲームの内容はその年に酔って多種多様。

かくれんぼやら、鬼ごっこやら。まあ人数が多い方が有利になるということには毎年間違いない。

当然、票の多い立候補者は、ゲームに対して有利だ。

つまりはこのゲーム、『多くの票を手に入れたら勝ち』という多数決制度と、内実大した変わりはない。

我が校は妙なルールがもりたくさん、だそうだ。

入学し一つの春を超えて、この破天荒さに僕もようやく慣れてきたところ。

「そついえば有村。先生がさ、明日転校生が来るって言ってただろ？」

教室の喧噪を背景にして、確認がてらに訪ねた。窓の外を見る。
一人でも仲間が増えるのはありがたい事だ。是非とも、生徒会総選挙に参戦して欲しい。

「言うな。どんなむさくるしい男が来ることが……。俺はおっぱいが欲しいんだ」

なにいつてんだコイツ。

有村の顔をマジマジと見つめてみた。

高身長、顔立ちも鋭利な感じで綺麗に整っている。

無造作に分けた前髪。矢尻のように全てを射抜きそうな眼差し。
世に言うイケメンだ。死んでほしい。

勉強も人並みにはできるし、運動に関しては常軌を逸した能力を持つ有村。

頭の回転だって良いし、不真面目なりに友達思いなところもある。
そんな完全無欠らしいコイツにも、決定的な欠点が一つ。

「……ほお」

これほど神妙な顔で女子棟の更衣室を覗く人間、僕は彼以外に知らない。

「先生が言ってなかった？」「委員長は、転校生の為に足りない机を教室にまで運んで来い」って。次の授業は歴口先生だから、どうせ遅れてくるだろうし……。今の内に持つてこいよ。授業中の今なら取りに行っても途中で女子に見つかることも無いだろ？」

「なかなか立派な胸をしてるな。いいおっぱいだ」

「おい聞け」

「おっぱい？」

「違う」

その委員長というのが、目前の変態だとは……ましてや生徒会長候補だとは認め難い。

「ああ分かってる分かってる。机と教室をここまで運んでくればいいんだろおっぱい」

「絶対分かってないよお前は！」

「そもそも覗きとは何なのだろうな……」

なんか語りだした。

「女が裸であろうとなかろうと、それは服を一枚隔てているか隔てていないかの違いだ、女のおっぱいがそこにあるという事実は何も変わらない、そこにおっぱいの存在を感じるだけで世界はエロい。なのに覗きはやめられない、そして裸の女を見ることがやめられない。これは何故か？ 俺は考えた。分かり切った常識を打ち壊してくれる甘美と呼び換えるにふさわしい背徳感が俺を「話を聞け」

建築されて間もない男子棟は、この教室以外の殆どがもぬけのから。

予備の机などが置いてあるはずもなく、新たに取りに向かうなら当然、女子棟にまで足を伸ばさなければ。

もちろん僕は、行きたくない。

男子を、蹂躪支配踏みにじろうとする女子の巣窟になど……！

「さあ行くぞ、矢琴。もちろんお前も一緒に来てくれるだろう？」

「やだよ」

「冗談は性別だけにしろ」

「はうあつ!？」

あれ、体に力が入らない。視界が意識の表層から離れるよ、殴られ……た？

体が、有村の力強く、躊躇の無い歩みに体を引きずられていく。

助け……誰か……!!

できるだけ人通りの少ない通路を選んだ。

盗むようにして机と椅子を持ち出し、それぞれに持ち抱える。殴られたお腹は痛かった。

やっぱり憂鬱だな。早くこんな場所からは脱出したい。

抱えた椅子を、ひたすら見つめながら歩いていた。

椅子の両端を支え持つのは、採寸ミスでダブダブに余らせた袖に埋まりつつある、僕の両手。

選挙に関する戦闘は、暗黙の了解により休み時間中にしか許されていない。

授業中である現在は女子に襲われたところで、選挙に敗北することとは無いのだ。

今年の生徒会総選挙に適用されたゲームは石とり合戦。

文字通り、相手の代表者が持つ石を奪い合うルールである。

石は失った時点で、候補者は当選権を失う。

最終的に石を自分の元に保持していた候補者が、晴れて次期生徒会長となるのだ。

僕が今現在心配なのは、選挙や石とりなどの関係ではなく、女子は男子を発見次第に襲うであろうという、男女間の現状。

ましてや女子棟内に男子がいるのを目撃されたとなれば……身も凍る思いだ。

「そういえば有村ってさ、女子相手には散々変態な癖に、僕には何もしないよな」

歩きながら、することもないわけだし、呼びかけた。

「それはつまり、お前はようやく自分を女だと認めるってことか？」

「そうじゃないけど……。でもほら、残念ながら僕が女みたいなのは確かだろ？」

「だから何だ。俺の性欲センサーもお前には機能しないんだ。理由など『俺に男色趣味が無いから』と言うに他に何がある。だってお前チンコ付いてるもん」

確かに付いてるけどもさ。否定のしようはないけどもさ。

「それはそうと、矢琴」

続けるようにして、奴が口にする。語るであろう話の内容は、選挙についての作戦会議だと察知していたから、僕は先に答えから切り出した。

「分かってるよ。今日は僕の家に来てくれ、会わせたいコがいるんだ」

「ほう……。一つ聞くんが、そのコとやらは、『コ』と読んで『娘』

と表記するのか？」

「……まあ、読むけ「よし、行くことにしよう」

なんて不純な動機で人の家を訪れようとしているんだコイツは。バカなのか。

彼の瞳を見つめてみるが、その光に冗談や含みは全く感じられない。ああ、バカだ。

有村は顔色一つ変えることなく、机を抱え直すと、しっかり進むべき道を見据え……。

と。

物音が聞こえた。

驚いた。頭から全ての穏やかさが吹き飛んだ。

開けた廊下で迂闊に話し声をあげすぎた。もしや、聞きつけられたのかもしれない。

もしかすると、女子棟の人間に僕達の存在を感付かれ

『男子です！ 男子が居ました！！』

女子の声だ！ 耳元で鐘を鳴らされるよりも驚いた。

急いで背後を向くと、こちらを指さし声を張り上げる女子が一人。

心臓に硬い毛が生えたかのように、胸がざわついた。
逃げなければ

『その子！』

発見者の女子は、改めて、真っ直ぐに僕を指してくる。

『何で男子の制服を着て男子と一緒に歩いているんですか!』

「い、いや僕は……」

『さては男子に脅されているんですね! 大丈夫です今助けます!』

……誤解されている? チャンス? これは……助かるのか!?
残念だったな有村! これでも、僕の安全は確保されたい!
い! フハハ悪役はお前一人というわけ

「矢琴、女子を見てにやけるなよ。変態」

黙れ変態。

『なつ……あ、あなたが噂の氷川矢琴さんですか……!』

身じろぐ女子。名前で僕の性別がばれた……?

僕も、向こうも、息を詰まらせている。

遙か向こうに見える廊下の突き当たりから、騒々しい地響き。
何度も、選挙中に聞いた覚えのある音だった。

紛れもない、命の危機が僕たちに迫っている。

「この音は! 有村!」

「ああ、来たようだな。……奴等が……!」

マズい、と思った時には遅かった。

突き当たりの死角から、各々の凶器を手に持ったわらわらと女子
が、我先にと言わんばかりの勢いで姿を現す。対するは、それぞれ
机と椅子を抱えた僕たち二人。

有村の表情に焦燥の色は見えない。悠然と、笑んですら見せてい

た。

恐らく状況を切り抜ける作戦があるのだろう。流石は生徒会長候補だ、今回は頼らせてもらおうとしよう。

有村は言った。

「矢琴、ここに残れ。俺は行く」

「分かった」

ちくしょう。

心中で涙ながらに悪態づいて、隣の有村を睨もつと

いない！？

「フハハハハハハ！！生きて帰れよ矢琴！！」

既に遥か背後を走っていた。迷いなく、僕を置き去りに。

『覚悟してください！』

その間もずっと、迫ってくる女子。

僕は動けなかった。

二度、三度、女子と有村を交互に見渡す。

有村、女子、有村……。女子……。僕は女子に追いつかれれば、半殺しにされる。

「エ……。？」

ようやく自分が為すべき事に気付く。

「ええ……！？」

迫る女子。僕があげるのは当惑の声。ちょ、殺され 背筋に逃
走本能が駆け巡る。

「有村あ！ 待って！ お願いだから！」

涙が浮かんで、視界が歪む。
死なないために、僕は走った。

【第三話】宴に一人は炒飯死（前書き）

矢琴くんのキャラ造形に少しばかりの不安が残ります。

たまーに女言葉になるところが違和感として残ったりする……かな？ うーん。

あと、ツツコミの言葉が少しキツすぎて、読者様を不快に思わせるようなことがあれば申し訳ないですっ！

ストーリー的にはここまでが序章になります。

では、雑談もここまで、よろしければ小説どうぞ！

【第三話】宴に一人は炒飯死

逃げきつてさえしまえば、学校で過ごす残りの時間は全て平和へと転化してくれた。

選挙活動をする必要もない。

休み時間以外の活動は全面的に禁止だ。

最後の休み時間を乗り切りさえすれば、その日の選挙活動は終了というわけである。

残りの時間、モテたいモテたいなあと、脱力気味に愚痴るクラスメイト達と同化して、時間を過ごした。

我が校の男子は、女子とお近づきになること目当てで入学した人間が大半だ。昨年まで女子高だったココに入学すれば、さぞ華やかなハーレム生活が待ち受けているであろうと、僕だって入学前には夢見て……いないこともない。

……しかしまあ、人に夢と書いて『儚い』とは、よく言ったものだ。我が校の真実を知った男子達は、結局、女に餓える日々を過ごす羽目に。

今は下校中。

僕は、自分の暮らすアパートにまで有村を連れ、二階の廊下を部屋まで突き進んでいる。

「今日は酷い目に遭った」

有村がぶつきらばうに目を流しながら、呟いていた。
角度のついた太陽。緋色の陽光に、万物の影は長く押し伸ばされている。

素直に、この町なりに、綺麗な景色だと思う。

触れる空気は常に新鮮で、清々しいが、日光に染められたような暖かさも感じられた。

「全くだ。女子も、あんなに男子を毛嫌いすること……無いじゃないか」

便乗するようにして呟いた。

僕に対して友好的な女子は多いが、それはあくまで、彼女達が僕を『女』と認識しての事だ。

ひたすらに男子になろうと努力する僕は、大半の女子から見ても敵に相違無い。

「俺が言ってるのは、女子に追われた件じゃない。俺を酷い目に遭わせたのは、お前だ矢琴」

何を言っているんだコイツは。バカじゃないのか。

ハッ、変なやつだなあ。昔からだけど。

「女子から逃げ遂せたあとだ。泣きながら『怖かった』なんて俺にずっと纏わり付きやがって」

!!

「言っな！」

そこを突かれるのは、正直、痛い。

「そうして纏わり付いてくるのが女なら良い。お前が女だったなら、間違いなく俺も胸を揉んでいた」

「僕が女だったら、間違いなくお前の頸椎ひねり潰してたよ」

「フン、やれるものならやってみる！」

「張り合うなよ！」

僕たちは歩いた。

「……しかし矢琴。自分を男だと称するようなら、まず、その弱い性根をどうにかしろ」

「……そうだな」

自宅の玄関先にまで辿り着いた。足を止める。

「お前はソラの奴にもよく泣かされてたなあ。確か、蛙を投げつけられたんだったか？」

「やめて」

「全く困ったもんだ、お前は昔からそうだよブふおッ!？」

有村の顎に向け、飛びあがる。推進するまま頭突きを浴びせた。

「ッ……この野郎」

大げさにのけ反った後、微妙な呂律で呟き、僕を睨む有村。

無視して、僕は部屋の施鍵を解いた。

ガチャリ、それらしい音を確認すると、ドアノブを捻る。スムーズな動きでドアを開いた。

開けた景色。

玄関。

すぐ目前に見えた、小さな何者かの姿。

彼女は満面の笑みで

「おかえり！ お兄ちゃ
」

ドアを閉めた。

静まりかえる空気。

冷える空気。

沈む空気。

「死ね」

ドアの向こうで何か怖いこと言ってる！

「矢琴……何だ今のバイオレンス・ロリータは」

「ああ……今のがさ、学校で僕が言ってた『会わせたい娘』だよ」
「そうだったのか。じゃあここまでだ、俺は帰る」

引き返そうとした有村の腕を引きとめる。

「ダメ。今日は選挙についての話し合いもするんだろ？」

有村は変態として高次元の存在である代わりに、許容ジャンルが
極端に狭いようだ。

幼女に興味が無い、熟女に興味が無い。

拳句の果てには、恋愛にも興味が無い、らしい（本人談）。

相手が幼女であるという事実を明かせば有村がやる気をなくすの
は分かりきっていたことだ。

だから僕は、有村の腕を無理に掴んで、ドアを再び開く。

「離せ矢琴オ！ 離しやがれえええ！！」

「初葉！ この男を部屋にまでひきずりこむのを手伝ってくれ！」

開けたドアの向こう、再び姿を僕の前に表した初葉は、面倒臭そうに眼を伏せて

「何やってんの、お兄ちゃん。バカじゃないの」

「バカじゃないに決まってるだろ！」

「フツ」

妹に鼻で笑われた！

「初葉知らないのか？ この男、男子棟の立候補者の有村だよ！」

「え？」

有村の情報を教えてやった途端に、初葉の表情が一変した。ばかり、と魂が空洞になったような面。

「……有村？ ホントに？ 嘘みたい」

呼び捨てだ！

ムズムズと、初葉は徐々に目や口の端々を歪めていく。

何かをふっ切ったようにして、彼女はついに有村の腕に飛びついた。

「お兄ちゃん！ 手伝うよ！」

「うああああ離せえやあああ！」

やはり。有村の名前が判明した途端に、彼女は有村を引き入れよ

うと協力し始めた。

ようやく確信が持てた。やはりだ、やはりこの子は。

カチャカチャと、食器同士が鳴り合う音を聞きつつだった。円卓を囲む僕と有村。

「ほお、あの子供が、敵側のスパイ？」

「ああ。それも……物凄いバカで、強引だ」

「だろうな」

「昨日からどうしても帰ってくれないもんだから、僕の家で一泊させてる。あの娘、自分の学校まで休んで……ご苦労なことだよ」

有村と顔を寄せ合っていた。横目で初葉の様子を確認しながら、話しあう僕達。

初葉は有村を家に引き込んだ途端から、張り切って『晩飯を作る』などと宣言していた。

現在は椅子を台座にして低い身長を補いながら、キッチンに立っている。

鼻歌が微かに聞こえてくるくらい、彼女の背中は活き活きとしていた。

「あの子、多分奈乃沙先輩の妹だ。選挙関連で姉の役に立ちたくて、

こんなことをしてるんじゃないかな」

「何！？ 玉垣奈乃沙の妹だと！？」

「うん」

「馬鹿な、何故あの姉にしてこの幼女。あの幼女に遺伝されるべき胸と上品さと淑やかさはどこへ！？」

「……このスパイ活動は、恐らく初葉の独断だろうな」

「おっぱいはどこへ！」

「食いつくところが違うだろ有村！」

もちろん初葉がスパイであるということは僕の予想という範疇をでないが……。

まあ戦略つてのは実際そんなもんだ。勘が八割、あらゆるパターンを予測できる勘の良さがあってこそ、初めて上手く行くこともある。

「大方、初葉の奴……家族に対しては『友達の家に泊まる』とでも言い訳してあるんだろ。奈乃沙先輩がこんなに馬鹿な作戦を立てるとは思えないしさ……」

そもそも学校外での選挙活動が公に露呈すれば、反則行為として該当の立候補者は当選の資格を失ってしまう。その点でも、奈乃沙先輩が僕に彼女をけしかけてきたとは考えにくいだろう。

「はい！ おまたせ！」

キッチンから僕たちに向き返った彼女の手には、二つの平たい皿。簡単な炒飯が盛りつけられていた。

これ以上無いくらいの、ニコリニコリとした笑み。よほど嬉しいこともあるのか。

スパイとしては、確かにそうだろうな。
無防備な敵の総大将と会談できる機会など、そうそうない。

円卓に置かれた二つのチャーハンを前に、俺と有村は目を見合わせた。

この飯、毒とか入ってるんじゃないかな、と。

「な、なかなか美味しそうじゃなか。な、なあ、有村」
「……ああ」

有村が通夜みたいな雰囲気してるよ。可視の暗いオーラが漂ってるよ。

「……矢琴」
「何？」

もぞり、有村が体をこちらに寄せてくる。あやしい動きだ。何だこれ。

迫ってくる、何これ、来るな！ 来るな有村！

「実はずっと、隠してたんだがな……」
「え？」

迫ってくる。正座の足を小刻みに動かし、接近してくる。

「俺はお前のことを！」
「ひゃうっ！？」

有村が覆いかぶさってきた！ 唐突過ぎる！ チャーハンを前にして……！

体は為す術も無く横倒しにされ、のしかかられる。密着した状態。伝わってくる息遣いがエロい！ 助けて！ 助けて変態だ！ 知ってたけど！ 変な事をされる！

「矢琴……」

「！？」

血の巡りが盛って、胸が鳴る。

鳴る間隔が加速度的に狭まる。

初葉の前でこんなことをされるなんて……！

「や、やだ……。て、てか、ちょ、ちょっと有村…… 本当に何してんだよ！」

「落ち着け矢琴。俺は…… お前に、恐らく性的な興味など持ち合わせていない。」

小声で話しかけられた。

安心するとともに、強張っていた体から、力が抜けていく。

そうか。

恐らく、目前の初葉に悟られぬよう会話するには、これ以外の手段は思い当たらなかったのだろう。変態だから。

まあ…… わざわざ二人して席を立ち、会話に向かうよりは、怪しまれずに済むのかもしれない。

…… 僕にとつて、この体勢は…… あまり好ましくないけど……。

「そもそも何故俺をこの家に呼んだ」

色を殺したような声で、押し掛かる有村が問いかけてきた。

「作戦会議に決まってるだろ」

「スパイが居る家で作戦会議をするだと？ あのロリの前でか？
馬鹿げている」

「騒ぐな有村……！ 僕たちは、初葉の存在を逆手に利用できるか
もしれない」

「利用するだと？」

「ああ。幸いあの子は、バカだ」

「……ほお、まあこの場合は、お前に任せてみるが……」

会話を終わると、有村は僕にかぶせていた体を、のりくらりと
起こしてみせた。

僕もそれに続いて、体を起こす。円卓越しに、初葉に向けてぎこ
ちなくも笑みを向けてみた。

彼女は、ぼおっと、僕と有村を交互に見つめている。
空気の流れに従うようにして、視線を揺らしていた。

中学生には、さぞ衝撃的な光景であっただろう。僕だって衝撃的
なんだから。

「な、何、今の」

顔を上気させつつ、初葉が訪ねてきた。

君に気づかれず会話するための行動だったんだ。そんなの、口が
裂けても言えるはずもない。

ほうほうと熱気を立てるチャーハンに目を逸らす。

「今の……何だったって言うの!？」

一方、有村が音を立ててスプーンを手にとりつつ、彼女の疑問に

答えた。

イヤらしく頬を釣り上げ、ゆっくり、含みのある口調で。

「愛の営みだ」

違う。

「ま、俺と矢琴ほどの仲になれば、愛の一つや二つも芽生えるものだ」

そのまま座ってる床が抜けてああとか叫びながら階下に落ちて死ぬ。

視線で怒りを訴えると、有村は『仕方がないだろう』と言つ風に、余裕ぶつた顔を見せた。

「死ねばいいのに」

上気した顔のまま呟く初葉。奇しくも同感だ。

ああ、敵のスパイに同調する僕もアレだが……全くその通りだと思つよ。

有村は気にした様子の一つも見せなかった。

彼はそのまま、盛られたチャーハンの中腹にスプーンを差し込んで、ほぐり取った。

「まあそう言うな。晩飯はありがたく頂くことにするさ」

そぞろ笑んで、有村は口を開く。

僕は制服を正しつつ、その一部始終を眺めた。

「いただきます」

チャーハンを口に運ぶ。時間をかけて、咀嚼する。しっかりと口を閉じて、噛み続ける。

「……む？」

有村が喉を鳴らしながら口内の飯を飲み込んだ。首を、傾げている。

「……有村？」

様子が変わった。

「……」

彼の顔が、過ぎゆく一秒一秒の度、みるみる顔が青ざめていくのが、確認できた。

スプーンを支え持つ手が、震えに震えている。

震えるってレベルじゃない、揺れている。やばいってこれ。

「は……ハアッ………ハアッ」

奴の息遣いが、死ぬ直前のそれにしか感じられない！

「……グハアっ！？」

円卓に頭をなだれ込ませる有村。

「おい!？」

とつさに状態をうかがった。虫の息だ。

本当に死にかけている!? いいぞ! このまま死ね!

有村は全身をガチガチと痙攣させたようにしながら、焦点の合わない眼で俺を見つめてきた。

「こ……この料理二八……毒……どくグフぁッ!？」

「ああ、ありむらー。しんじゃやだー」

「矢琴……お、オレはまだ……シニタク……っぴよう!」

っぴようって何だ……!

言葉を終えるころには、もう、有村は動かなくなっていた。

何故死んだ。

死因と思しきチャーハンに目をやるが、目立つような危険性は、至って感じられない。

有村の遺言通り、やはり毒が? まさか選挙で姉を勝たせるために、初葉は有村を……!

「は、初葉。お前がやったのか?」

覚えた戦慄。

もしかして、僕も殺されてしまうのだろうか。全身が引きつる思
いだった。

「私は何もやってないよお兄ちゃん！ 有村が勝手に死んだの！
自分で死んだの！」

何だその言い訳！ 人はこれほど自由自在に自殺はできないだろ！
……しかし考えれば、彼女が犯人である可能性も、当然薄い。
僕の前で殺しを決行するなどは考えづらい。自分が犯人だと述
べているようなものじゃないか。

「……故意の犯行じゃないってのか？」
「当然でしょ！？」

円卓に乗り出し、小さな顔を僕にめいっぱい近づけて、ムムムと
表情に力を込めて。

怒っている、本気で怒っている。どうやら本当に、殺しの犯人は
彼女ではないようだ。

では一体誰が……。

「くっ……」

一つ、僕の声でも初葉の声でもない、誰かの声。

「酷い目に……遭った」

残念ながら有村は死を免れたようだ。

奴は崩れ込んだ頭を、のそりと起こしてみせる。

なんとも苦しそうに、片手で頭の側面を押さえていた。

「ここは……そうか」

記憶が薄れているのだろう、周囲を見回して、状況の確認を取っている。

「冥土か」

「違う」

一つ溜息で、落ち着いた。

苦々しい表情で再びスプーンの先端で、チャーハンをいじりたおす。

「この料理、まあ毒は入っていないかもしれんが……。凄まじく……その、なんだ。……マズイ」

「マズい？」

「わざと作ったとは思えないような……っう」

そこまで語ると、一度えずいて、言葉を止めた。
人を瀕死に追いやるほどの料理……。なるほど、マズイだけなら毒は検出されないからな。

これほどの料理を、故意に作ったというのか。

初葉の奴、僕と有村を、再起不能にするつもりだったのか……。

「……わ、悪いけど、僕も食べるのは遠慮しておく」

「な、初葉の料理が食べられないっていうの!？」

円卓を叩きながらわめく彼女に、辛辣な視線を投げかける有村。
視線は彼女の胸。

「まあ残念だが、そういうわけだ。性徴して出直してこい」
「そ、そんなあ。せつかく会えたから頑張って作ったのに……」

どれだけ僕達を瀕死の重体に追い込みたいのだ彼女は。いちいち手段が強引すぎる。

相当な天然なのか、それともやはり、言葉は悪いがバカという人種なのだろうか。

まだ僕達に対して、『自分が妹である』と騙し切っているつもりなのかもしれない。

「なあ、初葉」

「何？ お兄ちゃん」

彼女を利用するのは簡単だ。簡単にも程がある。人類史上稀に見るようなバカだ。

確認の為に有村に一つ目配せをする。

同じく目配せが帰って来たのを確認して僕は、初葉に訪ねた。

「奈乃沙先輩が居る本当の家に、帰らなくてもいいのか？」

「へ？」

思い切って、彼女の実姉、奈乃沙先輩の名前を出した。静寂は降り積もった。

時が刻まれ、刻まれ、刻まれ、彼女だけは静かに止まっている。

バレた、とでも、焦りを頭に渦巻かせているのだろう。

「か、」

言葉に詰まりつつ、それでも彼女の威勢は強かった。

「帰らない！ 家なんか帰らない！」

ポニーテールをなびかせて、初葉は大きく頭を振った。

言葉の一つ一つが、涙色を帯びているのは、何となくわかった。

例え我が校の生徒でなくても、中学生でも、学園外での選挙に関する活動は禁止行為だ。

この件が学園に露呈すれば、彼女の姉、奈乃沙先輩は当選の資格を失う。

敵である有村に、チャーハンとはいえ暗殺を仕掛けたのだから当然の仕打ちだろう。

「初葉は帰らないの！」

何故帰宅をこれほどに拒んでいるのかは、僕の知るところではない。

今帰宅したら、何か彼女に不都合でもあるのだろうか。

推測するのは結構な楽しみだが、まずは言うべきことがあった。

「残念だけど、このまま僕たちは……お前を黙って見過ごすことはできないんだ。だから、お前の事を奈乃沙先輩に報告させてもらう」

嘘だ。流石に、そんな方法は卑怯だ、絶対に実行するわけがない。

「ヤダ！ 絶対に嫌なの！ お兄ちゃん！」

内股に座ったまま前傾姿勢になって、僕に必死そうな表情を寄せてくる彼女。

まるで赤ん坊だった。目が大きい。
少し圧されて、言葉を失った。

「嫌なら俺達に協力しろ。そうすれば黙っててやる」

有村が横から口を挟んでくる。僕が言いたいことは察してくれていたようだった。

さあ、彼女に行つてやつてく

「この事を黙っていてほしかったら、俺達に玉垣奈乃沙の下着を持つてこい」

察してくれていなかったようだ。

「下着の写真でも可」

地平線の果てまで打ち飛ばされてくれ。

僕はスプーンを手にとって、有村の口にチャーハンを突っ込む。

「ふぐつじょぐあぴうあいレルぞあふんツ!？」

奴がちやぶ台に頭を伏したのを見届けた。

綺麗な顔で昇天してやがる。できることなら、このまま目覚めな
いでほしい。

僕は一人、嘆息と共に初葉へと向き返った。

「とにかく……初葉？ 僕たちの選挙活動に協力してほしいんだ」
「選挙に？」

「ああ。本来相手側の仲間であるお前が味方になると、少々心強い」

言ってみたが、黙りこまれた。

ピクリと痙攣する有村の口に、次々とチャーハンを詰め込みつつ、僕は返事を待つ。

彼女に対しては少し、可哀そうだと思う気持ちだって、当然持ち合わせていた。

姉の役に立ちたくて、こんな無理をして、しかし逆に利用されようとしている。

しかも姉を守るため、僕の意見に従わざるを得ない状況に置かれているのだ。

自分が非道だとは思っ。

しかしそれほどに、僕はここで彼女に暗殺されるわけにはいかない、理由がある。

初葉を利用してでも、勝たなければならないんだ。

「きよ、協力すれば……お姉ちゃんには何も言わないでくれる？

今は、絶対お姉ちゃんにバレたくないの！」

「約束する」

彼女は不思議と、そこまで嫌そうな顔を見せない。

とにかく、安心に次ぐような安心、そんな顔をしていた。

「それにしても大丈夫なのか？ 家に帰らなくても」

「決めたんだもん、しばらくは……帰らないんだって」

僕としてもありがたいことだ。

初葉を選挙に利用するなら、様々な形をとれるだろう。

奈乃沙先輩の陣営に潜り込ませることだった可能かもしれない。

その間くらいは、僕の家泊めてやれる。

別段生活費に困っているわけでもないし、家事でもこなしてくれるなら、こちらとしても大助かりだ。

「協力すれば……いいんだね！　よし！　喜んで協力するからね！」

こうして僕たちの間に、脅し脅されの関係が……ふわふわしたまま築かれた。

【第四話】赤い空と鈴のネコネコ（前書き）

今回にてヒロインがどばーっと増えますっ！

ヒロイン各人に関しては、最悪から少しずつ良い印象に〜という考えの元に進めております。読者様に少しでも萌えを感じさせることができれば……と、努力させていただきます！

萌えに関してはただ今勉強中でありまして、もし少しでも『こうしたほうがいいよ』等のご意見などがあるかたは、何かしら伝えてくださると幸いです。指摘でも感想でも構いません、心臓と体を踊らせて喜びます！

……しかし、今回投稿するにあたって全文を読み返してみたのですが。

ここらへんの話は即興感がバリバリ全面に出てしまっていますor

z

【第四話】赤い空と鈴のネコネコ

さあ朝だ。殺人的に爽やかな日差しは、寝ぼけ眼を刺しやがる。

ひとまずは、登校せねば話は始まらない。

僕達がどれほどの佳境に立たされたとしても、学校は平常運転である。

初葉が自分の学校に行っている様子は無かった。テスト休みか何かだろうか。

今頃、僕の布団を強奪して、今頃すやすやと寝息をたてていることだろう。

昨日の晩はとても寒かった。……風邪とか、（僕が）ひかないといいけど。

というのもだ、初葉の奴、布団を占領しやがって……。まったくもって羨ましい。

心中で呟きつつ、ひと気のない生徒玄関にまで足を踏み入れた。

遅刻気味だから、周囲には、既に誰の姿も見えない。

自分の下駄箱を、開く。

「……!？」

ラブレターと思しき何かが封入されていた。

「う、こここれ！ これって!？」

目にした途端、心は短絡的な驚きと喜びに心臓が跳ねあがった。

だって、ラブレターだ。

純白の便箋だ。

これでもかってくらいの、ピュアな色だ。

神秘的な光景。僕は音をたてて生唾を飲みこんだ。

迷わずに、尚且つ、恐る恐る便箋を取り上げ、両手に持った。
喉と手が震える。静まらない胸に手を置きつつ、一先ず便箋を裏に返した。

どうも差出人の名前が記されてい

『沢井 大五郎』

ああ死のう。

男子にラブレターを貰うのは何回目だ。毎度、学習もせずに喜んでる僕はバカなのか。

いい加減、一回くらい女子が来てくれてもバチは当たらないと思うのに。

生徒玄関の寂しい空気に身をゆだね、しばらく諦めに近い絶望を味わっていた。

目を細め、ふう、息を吐く。

「矢琴か」

また心臓が跳ねあがった。強めの声に対し反射的にびくつく。

とつさにラブレターを下駄箱に突き戻して、隠すように体を振り返らせた。

背後に、そびえるようにして立っていたその男は……有村だった。

「お、おはよう、有村」

「ラブレターか。モテるな、美少女は」

「だ、黙ってくれ！」

こんな風景が、僕の日常だ。

「沢井……手紙返すよ。悪いけど僕は男で、その……やっぱり、絶対に付き合えないと思うんだよ」

『矢琴、何言つてんだ。お前は女だろうが』

「女じゃないよ。ナチュラルにそんな事言つのやめてくれよ」

教室の喧噪を背景音楽としつつのやり取りだった。僕は沢井君にラブレターを突き返す。

「それじゃ」

逃げるようにして自分の席に着いた。沢井の告白を断るのはこれで……何度目だ。

それじゃ、とはいうものの、彼と僕は同じクラスであるからして、

顔合わせを避けるは不可能。
なかなか、難しい問題だ。

教室の戸が開く。

乗り込んできた担任は教壇に立つが早く、ホームルームを始めた。
昨日のうちに運び入れた新たな机は、最高列中央である僕の席から、すぐ左隣に配置されていた。

誰がこの席に座るのか、楽しみではある。

教室は全員が着席した状態だった。

このホームルームにて、いよいよ転校生の紹介となるであろう。

「転校生、入りなさい」

カタブツ美形で有名な我がクラスの担任が軽く目配せをすると、
教室の戸が開いた。

教室中が固まり、え？ は？ 疑問の声がチラホラ。 僕も、「あれ？」と思った。

入ってきたのは、女子だから。

思考が付いていかない。

静かに、静かに状況を見つめることしか、出来なかった。

「女子だな。……おっぱいが大きい」

有村が小さく、淫靡に呟く。

……彼の発言に遅れて、僕もようやく、目の前に存在する非常識を実感した。

やっぱり、確実に女の子がそこにいる。

第一印象は、か弱そう、だった。セミロングほどの髪を左右にとりと垂らした、肌の白い女の子。

綺麗で大きい、小動物に通じるものがあるような、目をしていた。……彼女は、緊張気味なのか、上目遣いで、教室中を見回している。

「彼女は本人たつての希望で男子棟への入学となった。これは特別な措置だ」

担任が語る間に、転校生は教壇の隣にまで歩いた。

彼女はクラスの全員に向けて向き直り、まるで不思議な物を見つめるような呆けた表情をしながら、口を開く。

「……三ノ宮、鈴音子です。さんのみやすずねこどうか、よろしく願います」

礼儀正しい口調に、どこかしらフワフワとした声音。

彼女は深々と頭を下げてきた。

おおっとざわめく普通科生徒の男子諸君。

彼らの気持ちは凄く、気持ちは分かる、彼女は可愛い。

しかもどうだ、本物の女子がこのクラスに加わるとなれば、流石に、僕ばかりを恋愛対象に見る男子も少なくなるのではないか。彼女のこれからを思うと少しばかり不憫だとは思うが、僕のような『男』より、本物の女子を好きになる方が……クラスメイト達にとっても、ずっと良いことに違いない。

何だかんだで、胸には世界まで溢れ出しそうな感謝がわき上がった。

「他に何か、自己紹介があれば言っておきなさい」

担任が黒板に、三ノ宮鈴音子の漢字を刻みながら語りかける。

彼女は慌てた様子で頷き、制服の裾を握った。そのまま、早口で言葉を並べ始めた。

度々、静かな歓声があがる。

「えっと、趣味は料理とか、絵とか、買い物とか、読書とか……えっと、色々です」

語る口調はなめらかではなく……。

「他にも趣味はあつて、他には……あれ？ えっと他には……」

気まずさに静まった教室。

『鈴音子ちゃんカワイー！』

彼女を応援したいのか。男子らしいセリフが、可愛げない野太い声で叫ばれた。

「え？」

褒め言葉に身をこわばらせる彼女。

しばらく黙りこんで、思考がマイナス方向へ傾くには十分思索には十分な、沈黙。

誰もが彼女を見つめ、ただ中黒の点を頭上に浮かべる。

怯えているのかと思われた、彼女の表情は、よく見れば照れでも喜びでもない。

キョトン、だった。

静かに大きな瞳で発言者の男子を見つめつつ、鈴音子さんは、不思議そうに口を開いた。

「カワイイだなんて……当然のこと、ですよ？ 私が一番可愛いんだもん」

何を言っているんだこの女子は。

想像の斜め上どころか正反対を直進しやがった。

『え？』と聞き返す間すらも与えられず、彼女は続ける。

「知らないなら知ってください！ 私は、何もかもに於いても、一番の人間なんです！」

告げて、満足そうな笑みを浮かべる鈴音子さん。

ピキリと、彼女の笑顔と同時に何かが壊れた気がした。

彼女の表情が明るくなるのにつれて比例し、凍りついていく教室の空気。

彼女が教室に姿を現した瞬間と同じ、いやそれ以上の静寂が、再び場には訪れた。

流石に一時限目開始前の休み時間に選挙活動として石とり合戦を繰り広げるのは、酷だ。

基本的に、一時限目開始前の時間帯は選挙活動は禁止の扱いとなっている。

選挙期間中の、唯一休み時間らしい休み時間というわけだ。

転校生、三ノ宮鈴音子さんの席は、予定通り僕の左隣と決まった。ドキドキだ。

担任が補足として彼女の簡単に不幸な家庭事情や転入の理由を、語っていた。

その時点で彼女が、金持ちの家に生まれた箱入り娘だと言う事は、簡単に理解する。

世情を何も知らずにチャホヤと育てられればなるほど、男子棟に入学するなどのワガママや、あんな自己紹介も吐けるようになるだろう。唯我独尊の少女、良いか悪いかはともかく、かなり個性的に思える。

『っしやああ！！　うちのクラスに二人目の女子がやって来たぞお！』

授業前の休み時間。教師が教室から姿を消した途端にあがった声だ。

教室は男子達の狂喜乱舞一色に狂った。

男たちは、土砂崩れも真っ青な勢いで鈴音子さんに詰め寄っている。

「ようこそ鈴音子さん！　歓迎だ！」

「……は、はひ、よろしくおねがいします！」

彼女が身を引くのも無理はない。

この状況には命の危機を感じる方が正常な思考の持ち主というものだ。

望まずとも経験者となっていた僕には、彼女の気持ちがよく分かる。

だからこそ、僕が彼女を助けよう。

決めると同時に机を強く叩いて、席から立ち上がった。

「僕に、ちょっと彼女と話をさせてくれ」

彼女に取りついた男子共を、半ば強引に追い払った。

下心が無いと言えば嘘になるが、これが、彼女を男子達のテンションから守るための行動だというのは、嘘じゃない。男子達は教室の端にまで逃げおおせた。こちらを見つめつつ、怯えた幼児の如き眼差しで僕を見つめている死ね。

ひとまずは、ようやく落ち着いた状況に、肩を下げて息をつく。

「ごめん転校生。こんなクラスだから……まあ、頑張って慣れて、頑張って」

自分でも思えるくらいの綺麗な笑顔を彼女に向けてやった。多分歯とか光ってる。

「あの……ありがとう」

上目遣い気味に、オドオドと礼を述べる鈴音子さんは、とても愛らしい物があった。

どうして、彼女は男子棟への通学を望んだんだろう、こんなに、男を怖がっているのに。

胸がざわつかないと言えば嘘になる。僕も餓えた男子の一人なのだ。目の前で僕を見つめているのは可憐な女子。これを機に何とか『素敵です！ 私と付き合ってください！』なんて言われたい願望は、心の奥底から表層までの全てに浮かんではいる。言ってくれ！ さあ言え！

だけど

「キミ……女の子ですか？」

彼女が口にしたのは、僕がもっとも望まぬ質問だった。

「……」

彼女に悪気はないんだ。

「どうしたんです？」

「いや……僕は女じゃないんだ。……こんな格好はしてるけどな」

どうも居心地が悪い。

僕はそっぽを向き、切り揃えた前髪に触れつつ、答えていた。

「そ、そっか。何だか、凄いですね」

何が凄いなんだよ何が。彼女に心の中で指摘しつつ、呆れ気味に笑った。

ふと、教室の角に集った男子群が視界の端に入る。僕達を見て百合だレズだと騒いでいるらしい腐れ。

「私、教科書忘れちゃったから……良かったら、キミのを見せてもらってもいいですか？」

「ああ、うん。隣の席としちゃ当然だよ」

あんな自己紹介で場を賑わせた彼女であるが、良かった。僕は安堵する。

結構、良い子じゃないか。

「ところでさ、鈴音さんは……どうしてわざわざ男子棟なんかに入学してきたんだ？」

沈黙を避けるため、無理に話をつなげてみた。

「それは……」

「矢琴」

彼女の声を遮るように突如、遠くから声。有村だ。

自分の机で教科書を揃えつつ、コチラを真っ直ぐ過ぎる瞳で見つめている。

奴は席から立ち上がり、歩み寄ってくると、僕の耳元にまで口を寄せてきた。

「そのまま三ノ宮鈴音子のバストサイズを小数点第二位まで調べあげろ」

えええ……。

言うまでも無い、有村は変態だ。

恋愛にも興味がない、ただの変態だ。

奴は性欲で生きている。奴の精神は97%が性欲。残りの3%は性欲で構成されている。

困ったものだ。

「この方は誰でしょうか？」

自身を囲んだドス黒い性欲に気付く由もなく、彼女は穏やかな笑顔で尋ねてきた。

「僕の友達だよ。有村要也。変態と認識して構わな」
殴られた。

「有村は聖人君子のような人間です……」

涙目で、偽の笑顔が引き攣っていたかもしれない。

「有村君は最高です！」

自棄気味に叫びつつ、心の中で「死ねばいいのに」と付け足した。

「有村君……？　へえ……、とても、頭が良さそうな人ですね」
「……いや」

せつかくの褒め言葉を、有村は自ら否定して見せる。

近くの席から椅子を引き出し、足を組みつつ座る。面白くなさそうな顔だ。

「残念ながら、俺の頭脳は人並みの出来でしかないな。俺より、このオンナオトコの方が随分立派なもんだろう。少々抜けたところはあるが、成績や閃きの良さだけなら、断トツの一番と認識して間違いはないんじゃないか」

僕を解説する声に対し、「へえ」と素直な感心を滲ませた相槌を打つ鈴音子さん。

「すごいですね矢琴君！」

「い、いやまあ、それほどでも」

「じゃあ、これからは私が一番で、矢琴君は二番になるんですね！」

唯我独尊。

手を打つと同時に爆発的な発言に対し、とつさに彼女の顔を見ると、笑顔を向けられた。

返す言葉は彼女の笑顔にせき止められて、喉元より上にも込み上げない。

「……どうしたんですか？」

「ほお、謎のお嬢様転校生が矢琴を超えるだと？　なんだその、意味が分かん自信は」

有村の眉が、珍しく動いた。感情を示さない彼にとっては珍しいことである。

「言っておくが矢琴は凄いぞ？　そう簡単に負けるとは思えないな。矢琴は凄いんだぞ」

僕を使ってでしか彼女に対抗できない有村が可哀そうだ。

「そんなことないですよ、きっと私の方が勝ちます！」

急に語気を強め、有村に反論する彼女。対し有村は感心したように息をつく。

「……なるほど、お前が矢琴に勝つ自信があるのなら、勝負して証明してもらおう」

「勝負？」

僕と彼女が声を揃えて訪ねたが、有村は軽く素通りして席を立った。

教室の尻に設置されたロッカーから、生徒ご用達のオセロ板を取

り出して、僕たちに向けて掲げる。

自由な学校だ。ボードゲームやトランプの類の持ち込みは全面的に許容されている。

生徒が学校に寄付するという形で、それらの類を常備する教室だ
って珍しくない。

「矢琴君が私とオセロで？ いいですけど、絶対私が勝ちますからね！」

「フ、お嬢様だか何だか知らんが、その自信を粉々に打ち砕いてやる！ 矢琴がな！」

有村はとても可哀そうな奴だ。

僕が勝った。

一面真っ黒に染められたオセロ盤を前にして、彼女はまごついて
いる。

有村相手よりはいくらか苦戦したけれど……それだけ。彼女にそ
れ以上は無かった。

「あ、あれ？ んと、家の使用人とオセロやったときは、私一回も
負けたこと無かったんですよ？ 本当ですよ！？ ……偶然に決ま
ってるよね、ね？ もう一回やってください！」

まだだ。

二度目の勝利。教室の端からこちらを伺う男子の群れが、ざわついていた。

「お、おかしいなあ、矢琴君強いんですね……。でも負けるのは今回まで。絶対次に勝つのは私ですからね！　だって私が一番だもん。だから、もう一回やりましょう？」

彼女の笑みには、隠したくても隠しきれないような焦りがに染みだしていた。

「ね、お願いだから……。もう一回！」

三度目、勝ってしまった。

静かに彼女の瞳がうるみ始めたのに気付いて、しばらく何も言えなくなった。

さすがに、可哀そうじゃないかと、単純に、思わされたからだ。

「ま、負けたんじゃないやありません！　今日は調子が悪かったんです、わ、私が一番だもん！」

溢れた涙を目尻に溜めたまま、拭うこともせずに彼女は言い寄ってきた。必死の形相だ。

僕はどうすれば。考えは巡り巡ったが、結局バツが悪そうに縮こまるしか出来なかった。

男子の群れが僕達を指さして、静かに騒ぎたてる。
聞き耳を立てれば一言一句を逃さずに聞きとれるレベルだ。

『おい鈴音子さん、泣きそうじゃないか？ やっぱ泣いても可愛いな！』

『いやあ、僕はやっぱ、矢琴のが可愛いと思うよ？ 矢琴は性別を超越してるんだ』

『あのナルシストぶりも鈴音子さんの魅力なことに気づいた俺は、断然鈴音子さん派だ』

『何だと！？ 矢琴に決まってるんだろ！』

『落ち着けよ……。まあまあ前ら、どっちも可愛いってことでいいじゃねえか』

『じゃあ俺も可愛いかな』

『うっん』

勝手な事ばかり言いやがって、僕は女子ではない。男だ！ 正真正銘の男だ！

女子と呼ばれることに慣れてしまっただけは、人間としての何かが終わってしまう気がする……！

『よし、じゃあせーのっ』

最終的にはクラスの総意として『鈴音子さん頑張れー！』との斉唱であった。

僕に苛立つ暇は無かった。

斉唱の効果は、裏目にしか出なかった。

彼女はひくついたようにしてオセ口盤を見つめ、口元を歪める。
しきりに涙をすすする。

うつ、と唸る。

……ついに。

「私が……わたしがいちばんなんです……」

泣いてしまった。

彼女のすすり泣きに締めつけられたようにして、動けなくなる僕、
そしてクラスメイト達。

彼女は袖で目元を拭い続けるが、涙はとめどない。誰も、何も出
来なかった。

そんな中、ただ一つ、足音。悠然と。有村が彼女の隣に立ち、そ
の泣き顔を見下ろした。

彼女も不思議そうに、有村を見つめる、見つめ合う。有村はポケ
ットに片手を差し込んだ。

溜息。表情に差し込んだ暗い影……。ぴたと泣きやんだ彼女を前
に、口を開く。

「……敗北者には罰を……受けてもらおう」

風姿には、確かな力強さと、威厳があった。

不敵な、見る者の心を凍えさせるような、片笑み。
最後に決めたのは、静かな、一言。

「揉ませろ」

有村は男子連中に連行された。

「うおおおああアッー！ 何しやがる！ 痛いだろうが！」

集団暴行を受ける有村に冷やかな視線を送りつつ、うんと伸びをした。席に座る。

鈴音子さんの机前には長蛇の列。オセロ対局の順番待ちらしい。

……意外に鈴音子さんは、健気だった。

負けてからもずっと、男子相手に練習を繰り返し、繰り返す。

そうする理由は勿論、僕にリベンジを挑むためなのだろう。

時折彼女に決意の眼差しで睨まれるが……どうすればよいのか分からない。

僕らしくないと思いつつ、苦く笑い、手を振ることしか出来なかった。

もうすぐ休み時間も終わりそうだ。

次の授業を超えた休み時間からは、選挙活動が開始されることになる。

「……氷川、おい氷川矢琴」

文庫本でも開こうかと思った矢先、オセロの順番待ち最後尾の男

が、僕に向けて真剣な面持ち。

何だよ黙ってオセロして遊んでろよ。

どうしたんだと尋ねる前に、彼は教室の出入り口を差して

「……女子が来た」

意外な情報だった。

彼が指さした方向は確からしい。外に人影。

明らかに、見覚えのある女子が居た。見ないふりをした。

彼女は、澤田ソラは……今の僕たちには危険だ。女子棟一年大將格の女子である。

澤田ソラは女子なのに、女子にモテる。そんな女子。でもやっぱり女子だ。

モテの理由は恐らく、彼女が持ち前ているリーダーシップや、気の強さから来るものなのだろう。

素直に羨ましい。それ以上に何よりも彼女は学園長の娘。権力者だ。

生まれ持ったの地位すら持ち合わせている。

更に更に、僕や有村とは小中高を全て同じくする……いわば、幼馴染、という奴で。

昔からよく遊んだものだ。思い出は語るに数えきれないだけ存在している。

しかし……現在の彼女に対し、僕が会いたいか会いたくないかと言えば……。

「矢琴！」

名指しで呼ばれて、反射的に肩が跳ねた。明らかに怒りを孕んだ声音である。

やっぱりソラの奴、僕に用があるらしい。

無視を決め込みつつ横目で確認したが、彼女、眉間にしわを寄せ
て、明らかに怒ってる。

誰か、助けてほしい。

「話があるの」

ソラは自ら、一步一步を大きく、ズカズカと教室の中にまで乗り
込んできた。

入室の際に足を止め、「失礼します」お辞儀するソラ。やたら律
儀である。

有村周辺を除いた全員の視線を一手に寄せ、纏い、顔を赤くしな
がらも気丈らしく胸を張って。

「どうということなの！」

僕の席に押し寄せてきた。

正面から、机に身を乗り出すようにして問い詰めてくる。

前髪をピンで留めた、ショート気味の髪。生徒として模範的な髪
型だ。

訝しげな表情と共に、軽く首を傾け、髪をしたつと揺らすソラ。
彼女の顔は、僕の目前。

「どうということ、と言われてもだな」

「有村はどこ？」

目尻に若干角度のついた、キツ過ぎずに気の強そうな目。
でも彼女は僕より体が小さいから、凄味が無い。

「呼ぶにしても、有村あんな状態だぞ？」

僕が指さした先では、背を丸め、男子達の蹴撃を一身に受け続ける有村の姿。

体勢の割には偉そうに

「ふはは！ その程度の攻撃で俺を止められると思っているのか！……。」

「何やってるの……？ 有村の奴」

「新しい性癖だろうな」

「そう」

「それで、話は？」

「う、うん。……有村があんな状態なら、矢琴に聞くから……絶対正直に答えて！」

何を聞くんだろうか。気になりつつも、僕は座ったまま、目を伏せるばかりだった。

不機嫌を気取る。だって恥ずかしい。教室中の注目を買ってるじゃないか。

ソラ自身だって、顔が赤い。

しばらくは覚悟を決めるための沈黙、だった。

聞こえてくる音は、鈴音子さんがオセロをパチパチと打ち合う音。そして、有村周辺の騒ぎ声だけ。

長いまつげで縁取られたソラの猫目が、近い。髪の毛の香りも近い。どんどん近づいて……。

近っ。

「質問は一つだけだから」

彼女はやはり、焼けた鉄みたいな頬をしながら、首を傾げ気味に僕を見つめていた。

ソラは、女子棟から生徒会長に立候補した人物の、一人だ。選挙の立候補者は今期、三人のみ。内、二人が一年生であるという珍妙な年である。

まず、男子棟からは有村一人。

女子棟からは、初葉の姉である奈乃沙先輩。最後の一人が彼女、澤田ソラだ。

「矢琴」

バシリ、と名前を呼ばれて身が硬直する。

「矢琴は本当に、有村に投票することが正しいと思ってるの!？」
意味が理解できなかった。

「……」

彼女は何を言っているんだ、と、まず最初に思った。

「どういうことだよ。正しに決まってるだろ、少なくとも僕には他の選択肢を選ぶ余地は無かった」

「……信じられない。やっぱり男子って、そういう人たちだったの……?」

謂われの無い、軽蔑。何が悪いって言うんだ。
僕は、お前のせいで負けられなくなったんだ。有村に投票して何が悪い。

「少なくとも僕は、お前にだけは投票出来ない！　そしてお前を勝たせる訳にはいかない」

「な、何よ」

自制心から少しだけ感情がはみだして、声を張り上げてしまった。少し周囲の目が気になって、見渡した。

鈴音子さんでさえオセロの手を止めて、コチラを見ていた。ふつりと糸が切れる。

視線なんか、気にしないことにした。

「おかしいだろ！　何でお前の選挙公約に、『僕を女子棟に編入する』なんて項目があるんだ」

強めに言いつけてやるだけで、彼女は頬をぴくりとひくつかせた。視線を逸らしている。

まごついている。

身じろいでいる。

「そ、それは……言っただでしょ！　女子の間でも結構賛成は多いんだし、矢琴が女子棟に来てくれても……問題、ないんだけど？」

「知るか、僕は僕が女子棟に行かねばならない理由を聞いているんだ！」

「う……」

ソラが当選した暁には、僕は生徒会長の権限で女子棟に強制編入。恐ろしいことだ。

女子棟で待ち受けているのはハーレムとは思えない。僕自身が女子と同化した生活。

自分を女の子と認めるなんて、たまったもんじゃない。何の嫌が

らせだこれは。

「だって……それくらい許しても良いじゃない！」

良くない！

「矢琴が女子棟に来てくれたら、私が嬉しいとか嬉しくないとか、そういうコトじゃないんだからね。勘違いしないでよ！好きだから近くに居て欲しいとかそんなんじゃない……！」

クラス中の男子達が、くわっ、と一斉にソラを見たのは、気のせいだろうか。

あまり視線を気にしている余裕はなかった。僕だって反論することに必死だ。

「当然だろ！お前が僕のことをそんな風に思ってるわけが無い！」

今度は僕が全員から一斉に見つめられた気がした。

何故だ、そしてなんて痛い視線だ。

「お前はいつも怒りやすいし、融通利かせてくれないし……仮にソラが僕を好きだったとしても、そんな理由で僕を女子棟に入れるんだとしたら、公私混同も甚だしい最悪の理由でしかないよな」

ついには席から立ち上がって、僕は訴えた。

強く、強く反論すれば勝てるだろうと思っていたから。

「……」

「……な、何だよ？ 何で黙ってるんだ？」

ソラが、静かだ。

……何で？　もしかして……酷いこと言っちゃったの、か？

ソラは、静かに視線を下げ、俯いたまま、黙っている。

何だってんだ。怒りやすい、なんて貶し言葉を言ってしまったせいか？

ソラって、こんなに繊細だったのか……？　やっぱり、女の子ってことなのか。

彼女を女性として見たことなんか無かった。発言が少し無神経だったかもしれない。

「悪い、ソラ。言い過ぎたよ」

謝っても尚、やっぱり静かだ。

「……うるさい」

ポツリと、ソラの声。洞窟に垂れる水音程度の、本当に微かな声だった。

いきなり、何を言い出すんだコイツは、やっぱり怒ってるのか？　急いで彼女の顔を覗き込む。

「お、おいソラ」

「うるさいうるさいうるさい！　矢琴うるさいの！」

「は、え？」

「男子の癖に、何で私に口答えしてるの！？　ふざけないで！　矢琴は私の言う事だけ聞いてればいいの！」

「……は、はあ！？　ふざけん」

「黙りなさい！　とにかく、有村に覚悟しておけて伝えておいて！」

ソラは、泣き声紛れのような声で俺達に伝えたと、最後にフンと鼻を鳴らす。

来た時と同じ力強い歩み、しかし逃げるようにして、去っていった。

教室を後にする際、泣きそうな声で「失礼しました」律儀に頭を下げて、戸を閉める。

僕は立ち尽くした。

考える。

沸々、心の中に置かれた鍋が煮えてくる。お湯がこぼれる。体が、熱くなった。

「……何っだよ！ あいつ！」

床を蹴飛ばして、彼女のいなくなった教室の出入り口を、頑張つて睨みつけた。

昔はあんなこと言う奴じゃなかったのに……。

『男子の癖に』、だと？ ふざけるな。やはりソラも、この学校の風潮に毒されてしまったんだ。

「……ちくしょー」

少なくとも澤田ソラには、僕は僕の敗北を許すわけにはいかない。意地と利害が一致して、僕の中で固く固く、その気持ちが結ばれた。

【第四話】赤い空と鈴のネコネコ（後書き）

鈴音子さんは、この話について完璧にネーミングミスになってしまいました……。

すず・おとこ、という風に読めてしまいますが、彼女は正真正銘の女性です！

すずねこさんです！ もし紛らわしい思いをさせてしまった場合は、本当にごめんなさい！

【第五話】急いては情事も仕損じる（前書き）

うーん（背伸び）。ようやく五話まで到達することができました！
キャラもようやく出揃ってきたということで、いよいよ本筋もスタートです！

ストーリーも無いに等しい作品ですが、少しでもお楽しみいただければ幸いです！

【第五話】急いては情事も仕損じる

もうすぐ、もうすぐだ。

あと少しの時を待てば、今日の選挙が開始される。

気持は高まっていた。落着きのない足を机の下でソワソワと動かして、今にも動き出したくて、僕は教師の授業をまるで聞いている。

選挙に関係のない鈴音子さんを除いた全員が、僕と同じ様子だった。例外として、有村だけはいつも通り、意味の分からない余裕に身を任せている様子だったが。

「それでは、今日の授業はここまでだ」

教科担当の教師が、片手に持った教科書を閉じる。

「待ち遠しかっただろ？ 各自、勝手に終了してくれて構わんぞ」

言葉を締め、教師が教壇を降りた瞬間、学校に染み込むようなチャイムが鳴り響く。

一時限目終了。飛び上がるようにして席を立つ人間すら居た。騒ぎ出す仲間。

その中で、教師に続き、ただ一人だけ、そそくさと部屋を退出する人物がいる、一体誰だろうか。

「矢琴、何をしている。さっさと逃げるぞ。早くしないと女子が来る」

出口の方に気を取られていると、有村が意識に介入してきた。

「あ、ああ」

教室内は慌ただしい。全員が共通して赤の腕章を腕に巻き始め、僕もそれに倣う。

腕章の装着は、色によって立候補者のチームを見分けるためのルールだ。有村の支持者は赤の腕章、ソラの支持者は黄色の腕章と言ったように分別される。

まともに争いが展開されるまで、まだ時間はありそうだ。授業が終わってまだ間もない、女子達が渡り廊下を伝ってここまで攻め来るには、随分なラグがあるはずである。

「メンバー分けは話した通りだ！ 全員、各自の持ち場で奮闘しろ！」

有村が声を張り上げると、威勢の良い返事と共にクラスメイト達が動き出す。

有村率いる男子、当面の目標は……専守防衛。どうにか時を待って、女子チームの候補者同士で、漁夫の利でも起こらないかなあと浅ましく狙い続けているわけだ。

実際、物量的に考えて、正面から敵にぶつかることは不可能である。……圧倒的多数の女子を相手には、逃げるだけでも精一杯。その中であれば敵の偵察もこなそうという魂胆ではあるが、今のところ、あまり有力な情報は入る気配が無い。

細かな人員配置などについては、昨日、家で有村と論議を重ねた。女子棟と男子棟を繋ぐ渡り廊下に五名。ここにバリケードを張って、女子を食い止める。

棟の入口という入口全てには、同じく目的で、防備を三名ずつの配置。

屋上と巡回に、物見を一名ずつ。偵察専門には、運動能力に優れた二名。

残りのメンバーは、教室前廊下の防衛と、僕たちの近衛に二分されている。

敵を教室にまで寄せ付けてはならない。

恐らく敵は、僕達がこの教室に潜んでいるであろうと妄信し、死に物狂いでこの教室を狙ってくるだろう。その裏をかき、僕と有村の二人は人通りの少ない女子棟裏庭で、草にでも隠れながら休み時間終了まで待つつもりだ。

「あの……こ、これは何なんですか？」

慌ただしい教室の様子に、うろたえるのは鈴音子さんだった。血気盛んな男子共に、怯えている。

状況説明に近寄ろうと、彼女の机に歩み寄った。ちらりと視界の端にノートの中身が見えてしまう、授業内容ではなく、オセロ盤の絵が書き込まれていた。

「鈴音子さんも話程度には知ってるだろ？　これが我が校の選挙だ」「な……なるほどこれが……」

僕が話して聞かせると、彼女の怯えた目つきに、興味の力がこもった。

胸元に固く握った拳を作って、僕に訴えてくる。

「あの！　これって生徒会長さんを決めるイベントなんですよね！」

「まあそりゃ。選挙だから」

「そうですか……」

彼女と会話しながら腕章の安全ピン留めようと奮闘したが、四苦八苦。ようやく取り付けたと同時に、彼女の顔をチラリと見やると……決意の眼差しがあった。

鈴音子さんめっちゃこっち見てる。なにその眼差し。やめて。

「矢琴さん……！」

「何？」

「生徒会長に一番ふさわしいのはきつと私だと思っんです！ 今からでも立候「駄目だ」

机に顔を打ち付ける勢いでは落ち込んだ鈴音子さん。

彼女に容赦のカケラもない言葉を浴びせたのは、僕ではない。いつの間にやら彼女の背後に立っていた、有村だ。

「早く行くぞ矢琴。急ぐに越したことは無い」

「待ってくれ有村。その前に……一つ確認したいことがある」

ここまで会話したところで、いよいよ、教室にも人が減り始めた。できるだけ拳動が穏やかになるよう心がけながら、僕は鈴音子さんの肩に手を置く。

「転校早々に聞くのは申し訳ないけど、鈴音子さんは誰に投票するつもりなんだ？ もちろん無支持でも構わないけど」

まあ、鈴音子さん自身が立候補するのは無理として。と頬を掻き、笑いながら付け足した。

「……私、ですか？」

彼女はふわりと顔を上げ、唇を尖らせた。

「皆さん良い人ですし……。投票するなら……。有村君にしようかなって」

意外だ。

「いいのか？ 鈴音子さんは女なんだし、女子棟には奈乃沙先輩みたいな人もいるから、そっちにしとくのも」

「え？ な……。奈乃沙！？ あの人、立候補してるんですか！？」

急に、声音が荒くなった。急に机を叩いて、立ち上がる。

教室中の空気が一瞬で、その勢いに圧されてしまった。

もしかして、もしかしなくてもだ、奈乃沙先輩と彼女は知り合いだったのか。

「あの人には絶対投票しません！ 死んでもしません！ 有村君に票を投じます！ 私が有村君に投票すれば勝ったも同然じゃないですか、投票してもいいですよね？」

「それは……。一向に構わないけど」

相当奈乃沙先輩と仲が悪いらしい。

彼女の名前を出しただけで、鈴音子さんはツンと、僕に目も合わせてくれなかった。

状況を認めた有村が予備の赤の腕章をポケットから取り出して、鈴音子さんに手渡す。

「俺に投票するからにはコキ使っぞ。性的な意味でだぶふおあつやめて矢琴助ぐおああ」

「よろしくな、鈴音子さん」

「は、はいっ！」

「そんな緊張しなくても」

「は、はい……」

「……」

「……あの、矢琴さん？ 良かったですね」

「ん？」

肩を上げてクスリと笑う彼女。

「私みたいな、心強い味方を手に入れて、良かったですねって言うてるんです」

彼女の笑顔は冗談なのか本気なのか。

とにかく何にしても、意地らしいというのにかわりはなかった。

石とり合戦はつまり、単純な目標物の争奪戦だ。

有村の持つビードロ玉状の石が女子に奪われれば、僕たちの敗北。

石は基本、候補者しか所持が許されない。これに違反した候補者

は即、ゲーム参加資格をはく奪されるという厳粛さ。

しかし、例外も一つ。

選挙の参加者が身につける腕章には、種類があるのだが……その内一つはチーム色の布地に黒ラインが横に二本走った、候補者用の

腕章。そして次に、黒ライン無しの一般投票者用。

ここにもう一種類……黒ラインが一本だけ入った、通称『特別腕章』が一本だけ。

特別腕章を着けた人物は、候補者と同じく石の所持を許される。
有村の候補者群の中では、それが僕であった。

この腕章の存在は、少しは石とり遊びに頭脳戦を用意してやろうとの、学校側からの配慮だろう。

敵は、僕と有村のどちらが石を所持しているかは分かるはずもない。これを利用して敵を惑わすことが、石とり合戦の肝となるのかもしれない。もちろん、敵にも特別腕章は用意されている為に、相手も僕たちと同じことを考えているだろうが……。

「暇なもんだな……空からエロいものでも降ってきたらいいんだが」
「具体的に何が降って来るんだよ怖いよ。変態として露骨すぎるんだよお前は」

「フン、男が変態であることに何の問題がある？ 考えてみる、問題など「黙れ変態」

女子棟校舎裏の置き草に、身を伏せて会話する僕と有村。

置き草周辺の芝生以外は、黄土が露出している。

少しだけ距離を置いた周囲には、近衛役のクラスメイト達と同じく伏せて、辺りを見張っていた。

現在石の所持は有村が担当している。いざという時、僕のように石を手渡せる相手が近くに居るのは心強いだろう。

鈴音子さんの使い方については困ったが、ひとまずは女子棟に潜り込みやすかるう点から、彼女には偵察のチームに加わってもらった。今回、僕たちとは全くの別行動である。

「しかしいいのか矢琴参謀よ。守ってばかりじゃ勝てるものも勝てないだろう?」

「……別に、今までは機を伺ってただけだ。明日からは初葉を上手く立ち回らせて、攻めに転じる。腕が鳴るな」

「お前に鳴るほどの腕も無いだろ。それとも、敵に腕の骨でも折られるのか? 痛そうだ」

「お前は僕に喧嘩でも売ってんのか!」

昨日のチャーハン事件を根に持つてるのかコイツ……!

有村は草陰でうつ伏せに伏せたまま、指先で琥珀色の石を転がしていた。綺麗な曲線の玉である。

「石で遊ぶなよ……。ホントに、何でよりもよってお前が生徒会長に立候補したんだ……」

「バカが。答えは決まっているだろう? 理由は特にない」

「無いのかよ……!」

「フン、しかし見くびるなよ? 俺は……まあ勉強はできないとしてもだ、俺は運動が得意だしな。他にも得意分野は多い。スポーツが得意だろう。体育も得意だろう。あと走るのも速いな。加えて、運動全般が得意でもある」

「全部運動じゃないか!」

「いちいち声を張り上げるな鬱陶しい……ん?」

有村が何かを見つけた。ほぼ同時に僕も見つけた。

点々とした草の隙間から、何やら男子らしい姿が見える。メガネをかけた人物だろうか。

我が校の男子となれば……それは例外なく僕のクラスメイトであるはずだ。誰だ。

「通人ゆくとじゃないか?」

有村の声に事実はモヤを消した。ハツとした。あの細いフレームのメガネは間違いない。

通人だ。

読書が趣味の、我がクラスでは数少ない常識人。すました感じの、スマートな文科系らしい男である。

まだ入学して、そう何カ月も日が経っていない僕達だ、それでも通人に対しては、クールな人間、という印象を持っている。額の半面にだけ垂らした前髪、今にも理屈責めしてきそうな目つきの男。

草陰から、迂闊に姿を現すわけにはいかなかった。

監視するつもりで、通人の動向にしばらく目を見張ってみる。

彼は何やら手持ちのメモ紙をぶつぶつと音読したり、胸を押さえて天を仰いだりしているようで、何やら拳動に落ち着きが無い。

そして、そんな彼を追いかけるように、一人の女子がぼつぼつと歩いてきた。

「お、おいアレは……！」

珍しく、有村がうろたえている。

彼女の姿を見つけた瞬間から、明らかに有村の呼吸が変わった。瞳孔が開いてやがる。

「んん……？」

目を凝らしてみ初めて、有村がこれほどにうろたえる理由が理解できた。

静かに、驚きを胸で流す僕がいた。彼女は有村の求める究極の女性……。

立候補者の一人、初葉の姉、玉垣奈乃沙先輩だ。

絹のような質感の、長い長い黒髪。血が通っているのかと疑いたくなるほど、白い肌。小さな顔、すらりと伸びた体、綺麗な姿勢。豊満な胸。貞淑に前で重ねた両手。美しい、という言葉の他には無い。我が校の男子で、彼女の美貌に見惚れ無い人物は居ない。

僕だって美人は好きだ。特に有村は、入学当時から彼女をやたらと特別視している。

「通人の奴……何故、玉垣奈乃沙と！ あとで殺す。奴め早く自分の持ち場に戻って腹を切れ」

「……何で通人は奈乃沙先輩と二人で会ってるんだろっな」

「知ったことか！ ちくしょう……早く通人の奴め、玉垣奈乃沙から離れやがれ！ 離れて腹を切れ！」

駄目だコイツは手遅れだ。

諦めて、二人の状況を見守った、

通人はどうも彼女の持つ石を奪おうと　　というわけではないらしい。

奈乃沙先輩と向かい合い、ポツポツと何か言葉を交わしている。時折顔を掻きながら、周囲に目を逸らしながら、居心地が随分と悪そうだ。

耳を澄ますと、微かに会話内容が聞こえてきた。

『……昔から、貴女の実在は知っていました。そして、気に掛けていました』

通人が放ったこの言葉に返されたであろう奈乃沙先輩の声は小さく、音程度にしか聞きとることができない。それでも、このシチュエーションだ。想像がつかないでもない。

愛の告白、とやらか。

有村の嫉妬が、目に見えて凄まじい。

手近な草を握りしめ、握りしめ。通人を指さしながら一言。

「あの男は最悪だ」

お前は通人の何を知ってるんだよ！

しかし哀れな有村を時間にとり残したまま、愛の告白は滞りつつも進行中。

どう考えても奈乃沙先輩が通人の告白を承服するとは思えない。彼女は、男子からの人気を掻き集めた存在であるとともに、最も男子を嫌う女子、という話なのだから。

『じ、じじじ実は僕、昔から貴女の事を見ていました！』

「メガネ割れる」

有村が芝生を握りしめながら、視線で焼き殺す勢いで通人を見つめる見つめる。

非力な僕には、とても今の有村を抑えられそうにない。飛び出して行かないだけマシか。

『もし良かったら……その……その……！』

「爆発しろ」

『付き合ってください！』

「」

有村が完全にノックアウトされた。

力なく地面に崩れ込み、呼吸に肩を上下させるのみ。

哀れだな。恋愛に興味はないという有村だが……。どうも変だ、強がってるだけじゃないか、有村は奈乃沙先輩のことが、好きなのではないか。

男子嫌いの奈乃沙先輩を想ってしまうのも、悲しいと話だとは思うが。

「ああ、俺はもう駄目だ。生きていけない。矢琴、俺に癒しをくれ。癒せ」

「……有村、気持ちは分かるけど、元気出してく」

「そんな言葉で俺が元気づけられると思ったら大間違いだ！」

ちくしょう。

「まあ、落ち込むにはまだ早いだろう？ 奈乃沙先輩がまだ何て返すかは分からないしな」

「……ああ」

有村が、のそりと顔をあげる。真摯に、真摯に遠くの奈乃沙先輩を見つめていた。

僕はその横顔に、嘆息のような、安堵のような息をつく。

一緒に、奈乃沙先輩を見つめた。

ただ静かに、向かい合う通人と奈乃沙先輩。

『……ごめんなさい』

「ざまあああ」

『そ、そうですか……しかし僕は！』

『近寄らないで。……私は……どうしても駄目なの、ごめんなさい』

今度はちゃんと、先輩の声が聞きとれた。頭を下げていた。直後にくしゃみをしていた。

通人の奴、近寄ることさえ許されないとは……随分嫌われたものだ。

「フハハハハ」

有村が邪悪な笑い声をあげていた。顔が笑ってないけど。しばし間を置いて、答えにくそうにしながら奈乃沙先輩が言葉を紡ぐ。

「……ごめんなさい。私は好きな人が、いるから」

「俺だな」

「違うと思うよ」

「そんなことはない」

「先輩が人を恋愛対象として見るってんなら、それは十中八九女子だろ」

「ハッ、何を言ってるんだか」

有り得ない有り得ない、というように地面に肘から立てた腕を振る有村。

どこか、喋り方や手の振り方が力無く、グロッキー気味に感じられるのは何故だろうか。

しかし

「……その人にはもう、私も告白するつもりで……渡すプレゼントも用意してて……」

「俺にプレゼントだと？ 聞いたか？ 今の。一体何を渡されるのだろうな」

「変態の称号じゃないかな」

「何だお前も彼女のプレゼントが欲しいのか？　だがな、やるわけがない……これは……俺のだ」

今にも安らかに死んでいきそうな顔だ。

ひたすら彼女のお相手が自分であると、妄信しているらしい。

「有村、正気を取り戻せよ」

「んん……？」

「妄想から脱して、この状況を見つめ直せ！」

小声で怒鳴り、肩を揺する。何度も何度も。

奴は元気を取り戻さないにしても、半開きにしていた瞼を冴えた様子に。

「何のつもりだ矢琴」

「冷静に考えろ、目の前にいるのは、護衛の居ない敵の大將だぞ？」

「……ほお……？　まさかお前、やるつもりだとも？」

顎から頭に力を込めるつもりで頷いた。

奈乃沙先輩がここに石を持ってきている可能性だって、なきにしもあらずだ。ここは何としても彼女を抑えたい。

未だ通人と先輩は向かい合ったまま、照れくさそうに、喋りにくそうにポツポツ、言葉を交わしている。

通人と奈乃沙さんの周囲には多数の置き草があった。僕たち二人の護衛として、複数の男子がここに配置されている置き草だ。ここから見える限りの仲間に目配せで合図をすると、皆はしっかりと頷いてくれた。

「よし、行くぞ！」

バレてもいい、そんな覚悟で声を張り上げる。

前方にのめり出す形で身を起こし、草をつきつた。

奈乃沙先輩に向けて、駆け出す。周囲から一斉に湧きたつ怒号。

皆、付いてきてくれた。

「!? お前たち何故ここに!？」

対し、動揺を隠さずに目を見張る通人。ああ、皆でお前の告白を見てたんだよ!

猛る獣の勢いで、駆けるクラスメイト達。

あとは彼らに任せるつもりで、僕は立ち止まった。

走りゆくクラスメイト達は、着実に、それも猛烈な勢いで奈乃沙先輩への距離を詰めていく。

「ふざけるな! こんな理不尽な負けが彼女にあつてたまるか!」

彼女をかばいだてするように前へ出てきたのは、通人だった。両手を大きく広げ、立ちはだかる。

背後に置かれた奈乃沙先輩は無表情のまま、うつむくばかりだ。動揺があるのかどうかすら、計り知れない。

「果たしてこのまま、上手くいくと思うか？」

有村がゆらり、と今になって僕に追いついてきた。横に並んで来る

「ってことは有村、逃げる準備くらいはしたほうが良いと思うのか?」

「俺はそう思う。そう焦るな、急いてはチヨメチヨメを仕損じると

も言っただろう？」

言わないけど。

一理ある。

僕たちは今まで、ひたすらに身を隠していた。

それと同じことだ、敵だつてどこに姿を隠しているか分からない。例えば今、校舎に隠れた死角から彼女の護衛が姿を現すかもしれないし、油断は

『奈乃沙さん助けに来ましたあ！！』

うわホントに来た。

校舎の角から姿を現し、押し寄せてくる女子達。総数は僕たちの何倍だろうか。

奈乃沙先輩の手前でまごついた男子たちを、数の暴力によって次々と駆逐していった。

男子たちは皆、女子にボコボコと殴られて、僕の方に逃げてくる。こっち来るな。

『あの腕章……！ あれが男子棟の立候補者、有村要也ね……！』

『あ、矢琴ちゃんもいるよ！ ほら！』

『氷川矢琴は男子でしょ！ あんなのただのオカマじゃない！』

オカマ……？ オカマって何だ！ 僕は男だ！ 何で僕を指さすんだよ！

ぽつんと、胸に黒い穴を空けられた気分撃たれた。目の前が半ば的な怒りに、虚ろとなる。

「おい僕は女じゃないしオカマでもないんだ」
「おい矢琴！ 逃げるぞ！」

有村に腕を引かれて、否応なしに走らされる。
押し寄せてくる女子達の姿が、徐々に遠くなっていた。

女子達の隙間から、奈乃沙先輩の姿が見える。

僕の事を、ただひたすら、見ているだけのようだった。

その視線に何か、心へと引っ掛かるものを感じる。

なんだろうな、とは思った。

それだけだ。

【第六話】浮き浮き気持ち。（前書き）

ギャグかバトルかでどっちつかずの中途半端な展開……になってるやもです。

見直せば見直すほど反省すべき点が見えてきます。そして反省を終えた暁には、どんどんどんどん成長しなければ！

というわけで第六話です！

今までの登場人物が全員並び立ちますのですすっ！

【第六話】浮き浮き気持ち。

「僕は……反省をするつもりはない！」

「ほお、覚悟はできているんだろ？ なメガネ」

毅然と構えた通人、そしてもう一人、どこから取り出したともしれない鞭を手に慣らす有村。

教室中のざわめきを身にとめて、二人は真つ向から対立している。

「……といっても、制裁は十分に受けたようだがな」

一人逃げ遅れていた通人の顔は、女子達にタコ殴りにされた痣でいっぱいになっている。

とにかく、意外、と呟く声は多いようだ。真面目一辺倒のイメージがあつた通人が、色恋沙汰に自分の役割をすっぱかすとは。

過ぎていく休み時間、戦いは終わったし、辛うじて犠牲もなく女子の猛攻を防ぎ切った。しかし収まらない険悪なムード。内部分裂を起こしては、勝てるものも勝てない。

授業も、休み時間も、いくつもいくつも過ぎていく。選挙戦は多々行われた。

謎のオーラでも纏って空中戦でもしそうな勢いで、毎度毎度の喧嘩を繰り返す有村と通人。

まあ喧嘩するほど何とやら、なのだろうか。

終いにはツンと、お互い不機嫌をまるで隠さない状態だ。一言も言葉を交さずにいるらしい。

「矢琴君？ ちょっといいですか？」

休み時間終了の直前、席に座って机脇のカバンに手を伸ばす。
偵察から教室に帰ってきた鈴音子さんらしい声。

直後小さな手が、僕の肩を叩いてきた。

振り返ると、頬を指で突かれてしまった。悪戯っぽく笑う彼女、
ええい。

「……どうした？ 鈴音子さん。次の授業で分からないことでも？」
「聞いてほしい事があるんです。……実は、さっき女子棟に忍び込んで、見つけたものがあるんです。さすが私です！」

肩を竦めて笑う彼女。

薄ら気に、話の内容からして重要な何かがあるかもと、感じさせられた。

彼女に集中した。

周囲の喧噪など置き去りにして、彼女の声だけを聞こうと、体が反応した。

「何を見つけたって？」

「実は……合戦のとき、私は与えられた偵察の役割をずっとこなして……それで」

「それで？」

それはそれは。

「奈乃沙が選挙中に身を隠しているであろう部屋を発見しました！」
驚くべきことだ。

「奈乃沙先輩の……隠れ家？」

「はい！」

沈黙考の構え、僕は。顎に手を置いて顔を伏せた。

「す、すごいな！」

驚くべきを実感した。

彼女をちらりと見やれば、これ以上ないくらいのニコやかな笑みだった。純粹にも、両手を振り上げて喜んでいる。

大急ぎで走って、有村にも同じ要件を伝えているようだった。どうしたどうした、と人も集まってくる。彼女は、騒ぎの中心になってみせた。

……まさか彼女が、一日でこれだけの成果を出してくれるとは思ってもいないことだ。

情報が確かなものなら、これはチャンスである。

彼女がハッキリと『発見した』というのだから、それなりの根拠はあるのだろう。

今日の休み時間は全て使い果たしたが、明日朝一番の休み時間に奇襲を仕掛ければ……。

初葉の協力といい、彼女といい、風向きは完全に僕達を後押ししている。

次第に口の端がつり上がった。

これなら、負けない。目指すは男子生徒会長擁立！ 男子の復権だ！

「よし、やろう！」

椅子を鳴らしながら立ち上がり、皆の顔を見回しながら宣言した。

「明日の選挙で、玉垣奈乃沙先輩を仕留める！」

自分でも思う、声が結構、活き活きしてるなど。

ようやく、昨日が言う明日が、今日になった。

いよいよ戦の時は近い。

気分を引き締め覚悟を決めることに、一日という期間は十分に過ぎるものであった。

授業は滞りなく終了し、クラスメイトの全員は教室待機で臨戦態勢。中には、鍋を頭にかぶったバカまでいる。

女子が攻め寄せて来るまでに、作戦を開始せねばならない。

「急な決定だな矢琴。攻勢に出るところか、まさか全員で攻勢に回るとは」

「文句があるならお前が立案やってくれよ」

「……いやあ？ 特に俺から文句は無い」

僕たちは、普段と同じように窓際に体を預けつつ、語らい合うばかりだった。

当然、緊張は全身にこれでもかと、ほとばしっている。僕は時間を怠惰に過ごしているわけではない。せめてこの時間でもと、窓を通して女子棟の様子を見張るだけだ。

奈乃沙先輩は今回の選挙における、最大の勢力だ。彼女が当選すれば、これまでと変わらず男子が虐げられる日々が続くことになる。

どんな相手が敵であっても、負けられない。

「お、お兄ちゃん！」

廊下側の彼方から、響くような声が聞こえた。

間違いない、指定した時間ちょうどに、初葉が学校へと来てくれたのだ。

彼女の存在を使って、一時的に奈乃沙先輩の戦力を削る。

中学生の選挙参加が禁止されるルールは無いし、学校生徒以外には腕章を取り付ける義務は無い。その上彼女は、奈乃沙先輩の妹だ。後ろ暗くはあるが、ルールの側面を突けるなら突いた方が良好だろう。

つまり彼女は敵に正体をばらすこと無く、敵の陣地に潜り込むことができる。

「はあ、はあ」

教室の出入り口に駆け込んできた初葉は、肩で息を繰り返してい

た。

よほど走らせてしまったらしい。

『あの娘が、奈乃沙先輩の妹！？』

『まだ口リっ娘じゃないか！』

どよと声をあげるクラスメイト達を無視する形で、有村は彼女に歩み寄った。

「来たか口リっ娘」

疲れ果てたらしい彼女の頭に、有村は手を置いてみせる。
手を振り払われていた。蹴られていた。

「焼け死ね」

辛辣すぎる。恐らく初葉の中では、チャーハンの件が後を引いているのだろう。

シヨックか何かに片膝を突き伏した有村。初葉は奴を蹴り飛ばし、僕の元にまで駆け寄ってくる。

「お兄ちゃん、来たよ？」

「昨日の夜も聞いたけど、いいか？ お前は姉を負けに導くことに加担するんだぞ？」

「……それは、うん。お兄ちゃん次第で初葉も頑張るよ。手伝うくらいはしてあげる」

彼女が首をかしげて笑むと、こころなしかポニーテールの曲線も心なしか力強くなった気がした。クラスメイト達からも、歓声がある。鈴音子さんだけは静かに、自らの席でノートと睨めっこを続

けるだけだった。

今回、作戦は無いことも無い。我がクラスのメンバーは、数人単位のチームに分かれる。

出来る限り僕や有村は、敵をかく乱する役目を担うから、その隙に機を見たチームが、奈乃沙先輩に攻めいるという魂胆だ。

石の所有は、僕に任されていた。

「矢琴……」

蹴り飛ばされた有村が、静かに立ち上がりながら、僕の名前を呼ぶ。

僕だけじゃなくて、全員が呼応した。教室中が張った糸を切ったように音を失くした。

「時間が無い、行くぞ」

それだけ奴は言っで、女兒に蹴り飛ばされていたくせに、片頬を釣り上げてみせる。

そろそろ、女子達の奏でる騒音が渡り廊下の方角から聞こえてきた。

「ではお前ら。各々の役割を果たせ、解散だ！」

渡り廊下を通じて女子棟に向かうのは危険だと判断した。

裏口から仲間全員で雪崩出て、ひとまずは走る。

目標は青腕章リーダー、奈乃沙先輩。昨日、鈴音子が報告した通りの事実があるならば、奈乃沙先輩は三階家庭科室に潜伏場所としているはずだ。

通人を含め、細かい役割を与えた数人は途中で軍団から枝分かれするように離脱し、残りはまっすぐ女子棟へ。何らかのアクシデントが無い限り、女子棟までは少しずつバラけながらも、道を同じくする予定である。

「大丈夫か……？ 初葉」

僕たちの元に駆けつけてくるまでに、初葉はいくら疲れたであろうか。加えて、この場面でも走るとなっては、その小さな体が持たないのではないか。素直な心配だった。

「やっぱり優しいんだお兄ちゃん、でも、人の心配してる暇があるなら死ね」

「そんな危なっかしい言葉を口癖のように語尾に装着するのはやめてくれ」

まあ、こんな冗談を吐く余裕があるなら大丈夫か。

彼女の役割は、虚報の伝達だ。奈乃沙先輩の妹である彼女は、青腕章の女子達にも顔が知れているはず。偽情報で出来る限り彼女達を誘導し、僕達の経路から退ける作戦だ。

理想は、この誘導によって青腕章の女子達をソラの軍勢にぶつけること。

厄介な第三者、ソラの足止めも可能であるし、奈乃沙先輩の戦力

を割くこともできる。

『男子、男子がいた！』

遠くから僕達を刺し止めるようなソプラノが聞こえてきた。見つかったらしい。

『ちくしょう見つかった！ 作戦通り行くぞ！』

僕たちの中から数人が自律的に離れ、走りくる女子に立ち向かっていった。

もう女子棟の正面玄関は、目の前だ。

「矢琴、しばらくは仲間を任せた。俺はここで……やることがある」

先を走っていた有村が、肩越しに振り返り、何やらボソリと言葉を伝えてきた。

言葉の真意は、察しても理解できない。考量時間は無い。そして僕は、仲間を信じられない人間でもない。

「詳しい事は聞かない。行つて来いよ有村」
「すまん。お互い健闘を祈る」

僕達は正面玄関に足を踏み入れた。生徒達の下駄箱が、整然と並ぶ景色。

僕たちはそれぞれ、あらかじめ定めた数人ずつに分かれて走り出した。

中でも、有村はたった一人。

廊下には、人影の一つも見当たらない。

青色の腕章は奈乃沙先輩の、黄色の腕章はソラの支持者。気をつけないければ。

僕たち男子は、元より数の上で圧倒的な不利である。一番の強敵である奈乃沙先輩はもちろんとして、同学年の立候補者である、ソラの支持者数にも到底戦力は及ばない。

僕の立場から欲を言えば……ソラを先に仕留めたいところだった。彼女は、公約として僕を女子棟に引きずりこもうとしている、そんな未来が許せるはずもない。

しかし、ワガママも言っていていられないか。仕方無いだろう。

「誰もいないですね」

鈴音子さんが、廊下に面する教室群を見渡すも……。ただ静かな息が漏れるだけだった。

今この場で僕が行動を共にしているのは、初葉と、鈴音子さん。ひとまずは三人で、安全地帯と思しき廊下に立ち尽くしていた。

クラスメイトの多くは、鈴音子さんの情報に従って奈乃沙先輩の教室を攻めている。

「初葉、そろそろ行ってきてくれ」

そろそろ作戦を開始すべきだ。今頃仲間達は、奈乃沙先輩の潜む

三階家庭科室付近にまで接近しているはず。

「手当たり次第でいい、僕が教えた通りの偽情報を、青色腕章の女子に伝えるんだ」

「うん！」

一声かけるだけで、初葉は従順にポニーテールを揺らした。小さな子供みたいな、小刻みの足音を響かせ、走り遠ざかっていく。

初葉の考えは掴めないな。やたら素直だったり、奈乃沙先輩を簡単に裏切ったり。

「私たちは、どうします？」

遠ざかっていく初葉の背中を見つめていると、逆に僕の背後から声が掛かってきた。

彼女、鈴音子さんには今回、大きめの衣装カバンを持たせている。

「危険は避けたいけど、僕達としちゃ、出来るだけ敵の目を引くことが重要だしな。少し歩き回ってみようと思う。……あ、そうだ、鈴音子さん。そろそろカバン開けて」
「ん、分かりました」

床に置いたカバンを難なく開き、彼女が取り出したのは、赤い帽子、同色のマフラー。

僕は帽子を受け取り、深く被った。鈴音子さんはその間、柔らかな手つきで僕の首にマフラーを巻いてくれる。それも、僕の顔を出る限り覆うように。

梅雨の季節には、暑すぎる格好だった。

衣装カバンはその場に放置して、僕たちはゆっくりと歩き始める。

「今頃、皆さんどうしてるんでしょう」

寂しい廊下の空気に、鈴音子さんの声が混じった。

「さあ。誰か一人でも敵の防衛網を掻い潜って奈乃沙先輩に攻め込めればいいんだけど……。有村が一人で行動するって言ってた件も気になるな」

「きつと、皆さんなら大丈夫だと思います。奈乃沙なんて雑魚ですよ雑魚。あの人は、可愛い物が弱点なんです！」

「ずいぶん奈乃沙先輩を知ったような口だよな。先輩と知り合いなのか？」

「知り合いじゃありません、敵です。宿敵です。ライバルです！」

可愛らしいと同時に、穏やかでない話だ。

「奈乃沙は私と同じ中学でした。高校進学の際、こっちに引っ越してきたんです」

明かされた過去。しかし鈴音子さんはこれ以上、何も語ってはくれなかった。

軽く唇を突き出して、ムスツと重々しい無表情を決め込んでいる。

宿敵である理由は……。聞かずとも、彼女の性格を察すれば大体分かりそうなものだ。

恐らく中学時代から学園のマドンナ的存在であっただろう奈乃沙先輩を、勝手にライバル視している……。当たらずとも、その辺の理由だろう。

「まあ私も家の都合上、遺憾ながらこうして奈乃沙と同じ学校に来てしまったわけですが……」

まさかとは思うが。

「奈乃沙先輩と同じ棟に入るのが嫌で、だから無理に男子棟なんかに入学した、とか？」

「そうですそうです」

本当かよ。マフラーあっちい。話を聞きながら、手で自分の顔を仰ぐ。

ふと耳を澄ますと、何やらボリユームを少しずつ拡大するように、足音と喚き声が。

一直線の廊下では、反応する間もなかった。それはすっごい、突然で。

「し、しっこい！」

向こうに見える廊下の死角から、たった一人だけ、二本線の黄色腕章が飛び出してくる。

一心に、駆けているようだった。間違いない、ソラだ。

そして彼女の後を追うようにして、そろそろと飛び出してくる大量の青色腕章。

必死に手を伸ばす女子達から、あれほど必死に逃げまわっているようだった。

そこまでして逃げ惑う、ということは……ソラの奴、石を所持しているのだろう。

「矢琴！」

ソラがこっちに気づいた。

「助けて！」

断る。

「こっちに逃げるしか……！　ご、ごめんね矢琴！」

逃げ道という逃げ道から敵が現れたらしく、ソラはこちらにかけ込んで来る。

当然それを追う女子達も、こっちに来る。

彼女達が走る直線の延長線上に居る僕達が発見されるまでは、その時間はかからない。

『あ、あの赤腕章……もしかして……？』

『間違いありません！　氷川矢琴を確認しました！』

ソラを先頭に、迫りくるスカート着用者十数人余り。

どうすればいいのかも分からず、静かに、鈴音子さんと顔を見合わせるしかなかった。

「や、矢琴君！　こ、ここは私が食い止めます！」

「バカ無理だ！　一人で立ち向かったところで踏みつぶされるのがオチだぞ！」

「で、でも　「黙って来い！」「わあっ！？」」

彼女の腕を強くひいて、走る。

逃げてても逃げてても、状況は変わらなかった。絶え間ない呼吸への欲に苦しむ。

共に逃げていたソラの姿が、いつの間にやら消えていた。敵はソラから僕に標的を変更したらしく、しつこく追い回してくる。

肺が焼かれたようだった。とにかく走った。長期戦に敵も疲弊したようで、結構な距離を引き離すには成功した。

「鈴音子さん……走れるか？」

「まだ、まだまだまだ……大丈夫……です……！」

口呼吸の合間に挟まれる彼女の言葉は、とても『大丈夫』とは思えなかった。

足取りはふらふらだ。可哀そうだが、ここは耐えきってもらえない。

ちょうど目前、丁字路に差し掛かった。右手に曲がり、即座にしゃがみ込む。

この場所が敵の死角であろう内に、大急ぎでマフラーと帽子を彼女に着用させた。

「少しの間だけ、頼む。ホントに悪い！」

「大丈夫ですよ……！元々今回、これが私の役割なんですし……？というより、嘗めないでください。私がこの程度でへばるわけ……」

派手な色だ。敵は、このマフラーと帽子を僕に対する目印として認識していることだろう。

幸い、僕と鈴音子さんは背格好や髪型は似通った点が多い。だからこそ思い立った作戦だ。

とても……成功する確率が高いとは言えないか。

「じゃあ、行きます！」

鈴音子さんは振り絞ったような威勢を吐き出すと、丁字路のもう一方へと走り去って行った。敵からすれば、帽子マフラーの赤腕章が、目の前を一瞬だけ前を横切ったわけだ。

『待ちなさい氷川矢琴！』

敵は見事に、鈴音子さんを僕と勘違いしてくれたらしい。

丁字路にまで押し寄せるが早く、僕の方には目を暮れずに、鈴音子さんを追いかけて行った。だんだんと遠くなる彼女たちの姿、消えていく足音。

居なくなった。

心が、ずっと空洞になったような気分に陥る。

鈴音子さんが無事であれば良いが……。

「や、矢琴？」

振り向けば、小さな姿。遠くで、片手を胸に置いたソラを見つけた。

全く都合の良い時に現れたものだ、嘆息が漏れる。じとりと彼女を見つめた。

近寄って来る彼女に対して僕の眼差しは、自分でも陰湿な感じだと思う。姿勢はしゃがんだままだが、臨戦態勢だった。

「残念だったな。僕が捕まって無くて」

「なっ……そんな言い方無いでしょ？ 私だって矢琴に助かってほしいと思ってたのに」

「どうだかな。お前は敵だろ、敵」

「……」

疎ましいと言わんばかりにソラを扱う僕の内心は、そう濁った状態でもなかった。

彼女は気が強い、口も悪い、ドジだ。だけど優しいし、力強いし、律儀な奴だ。

律儀な性格のソラは、こんな状態の僕を絶対襲わない。彼女が単に直に純粹に、僕の体を心配しているんだってことも、本当は……感じていた。

十数年の人生なりに付き合いも長いから、僕は彼女を解っている、と思う。

「もう、知らないわよ」

手を伸ばせばすぐにも届きそうな位置で、彼女はくるりと僕に背を向ける。

彼女の声に元気と呼べる全てが失われていることに気づいた。何故だか、気を落としているらしい。……何故だ？ 付き合いが長いのに、全然分らない。もしかして教室で喧嘩した件を、ひきずっているのか。

「矢琴、捕まってれば良かったのにね。それで選挙には私が勝って、矢琴は女子棟に入学するの」

「絶対にお断りだな」

「……うーるーさい！とにかく何が何でも、矢琴達だけには勝たせないんだから！」

ソラの選挙公約は、僕を女子棟に入学させるという点以外では、全くマトモである。

僕たちの目指す学校政治とも、大した変わりはない。

男女平等の学校を作ろうという心意気、だそうだ。

「とと、ところでね、矢琴……？」

どうも言い方がせわしない。僕の格好に気になるところがあるのだろうとは、察していた。彼女は背を向けたままチリリ、チリリ、とこちらを見やってくる。そして疑念のこもったらしい一言。

「……なんで……矢琴、今日スカート穿いてるわけ？」

「！？」

必死に忘れていたのに……！絶対気にしないようにしていたのに！

「や、やっぱり矢琴そういう可愛い格好が好きなの？ ぜ、絶対駄目だからね！ そりゃ確かに矢琴は可愛いしスカートだって私より似合ってると思」

「違っつて！僕はそういう趣味じゃない！」

先ほどの鈴音子さんの入れ替わり作戦において、僕が女性生徒の制服を着ることは必需的な条件であるわけで……。もちろん逆に、

鈴音子さんに男子制服を着せても事は解決するのだが、彼女はそれだけは嫌だと言って聞いてくれなかった。

こんな格好は嫌だ、何故内股に布が無い、何故空気循環がこんなにもスムーズなんだ！！

少しだけスカートを意識して、両足を閉じてみた。そんな自分に更に嫌気がさす。

「……？」

再び迫りくる騒々しい音、思わず壁によりかけ座らせていた身を起こした。

ソラも僕に振り返って来た。敵がまた近づいてくる、と、視線を合わせ意識を共有する。

「矢琴、疲れてない？」

ソラは大股の足取りで僕の元にまで歩み寄り、手首を掴んできた。

「こっち！」

先ほど僕が鈴音子さんの腕を引いた時とまるで同じポーズだった。走らされた。

少し転びそうになったけれど、もちなおして彼女に問う。

「何で僕を助けてるんだよ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！？　ここで矢琴を置き去りにするなんて気分の悪いことできないの！　休戦よ休戦！」

律儀な奴だ。ちくしょう。心の底から思わされる。

逃げて、二人で逃げていた。

不可抗力的にはあるが、奈乃沙先輩が隠れているらしい三階にまで僕達は辿り着いた。

遠い場所で押し問答を繰り返したような怒号は聞こえるが、周囲に人影は見えない。

「……本当に、奈乃沙先輩が家庭科室にいるの？」

「ああ。多分間違いない、話を聞く限りじゃ、そこに潜伏してるはず」

計画を話してやれば、彼女は乗り気だった。敵の敵は味方、という奴だ。

「信じるからね。矢琴は先に行つて、私もできるだけ人連れてくるから」

ここまで走った疲れを微塵も感じさせない素早さで、彼女は俺の前から姿を消す。

彼女の体が丈夫なんじゃない、彼女は気丈な、頑張り屋である。

意地っ張りとも言い換えられる。

僕とて負けてはいられない。棒になった足をひきずりながら、繰り返される怒号のへと向かってみた。様子を確認せねばならない。変わり映えのない廊下を突き進み続けて、進み続けて、いくつの部屋や曲がり角を超えただろうか。

まだ家庭科室は遠いはずなのに、見えた。角から覗きこむ形で、確認した。

『ざまあないですねえ男子達』

一人の女子が足蹴にしているのは、僕の仲間だ。十数名が、無残にも転がされている。

フフフとサディスティックな笑みを浮かべる女子達に対し、男どもはひれ伏して、苦しそうに呻くばかり。

……なんて凶悪なやり口だ。数の暴力だろう、敵の女子は廊下に、数十名近くは見える。

『え？ ソラさんの居場所が分かったって？』

中でもリーダー格らしい女子が、わざとらしいくらいの発言をする。

ピンときた、初葉の虚報が今になって効いてきたのだろう。

『この時を待っていたわ……！ みんな行きましょう！』

指揮のままに動き、ドタドタと消えていく女子達。僕のすぐ近くを通ったが、身を隠した。

今、廊下には敵の姿は誰も見えない。倒れている男子達のみである。

廊下に出て一人一人の肩を揺すってみたが、効果は無いらしい。

動けそうな人間はいない。……僕一人でも家庭科室に行くべきか。
しかしそれでは、振り返りに

「矢琴！」

一瞬で分かった。聞き慣れた、ソラの声だった。
振り返ると、十名近くの女子を連れた彼女の姿。
闇に見えた光明だった。これだけの人数が居れば、行けるかもしれない……。

「感謝しなさい？ 私が手伝ってあげるんだから」

「……そ……そうだな、礼だけは言っておくよ」

珍しく、素直な感謝を試してみた。

「えへへ」

頬をほんわかと赤らめて、ソラがソラらしくない、笑い方をしていた。

気持ち悪かった。

駆け抜けていた。ソラとその支持者達と共に、家庭課室までの道のりをだ。

速く走れば走るほど、線のようになって流れていく廊下の景色。敵が味方になると言う物は頼もしくあり、そして同時に嬉しいものでもった。

心を躍らせ、今見えた家庭科室の扉。

初葉の虚報が効いたらしいとはいえ、不気味なくらい人が見当たらないのは、どうも怪しい。

「矢琴、行こうね」

ソラが走る勢いのまま、部屋に差し掛かった。乗り込む形で扉を一気に開け放ち……。

精寂だった。

「……え？」

とぼけた声をあげるソラ。僕も追い付いて中を確認すると、息がつまった。

誰も居ない。

ただの、休み時間らしい家庭科室が、そこに広がっているだけである。

「矢琴さん、これどういうことなんですか！」

『説明してください！』

ソラの引き連れた女子に悪態じみた質問を突き付けられたが、僕とて答えられない。

心の中にポツンと小さな穴が開いて、黒くて、孤独だった。

僕は、何もかもを信じ過ぎてしまったのだらうか。

鈴音子さんの情報を鵜呑みにしたのは僕だ。情報が間違っていた……？

「フン、かかったな？ まさか石の所持者全員を誘いこめるとは……これは上出来だ」

何者かの声。

同時に、ざざっと、とてつもない量の足音が聞こえてきて……背筋に寒い圧力を感じた。

「！？」

「……計画通りだ」

振り返れば、大量の女子。

先頭に現れたのは、メガネ。メガネを煌めかせながら気取っているらしい、メガネ男。

通人だ。

着目すべきは、彼の隣に奈乃沙先輩が立っていること、先輩と通人の背後には、大勢の女子が並び、立ち構えているということ。通人の二の腕に巻かれているのは、青色の腕章だ。もちろん、彼の引き連れた大勢の女子達も、同じ色である。

「通人……」

何故ここに大量の青腕章がいるのか。

理由は簡単だろう、僕たちの計画が敵に筒抜けになっていた。

「矢琴、僕は僕が有村を裏切ったことについて、弁解するつもりは無い」

メガネ。

「多少のルール違反であることも認めよう。しかし僕はぶふおあつ」
ソラに、顔面への飛び蹴りを浴びせられていた。
倒れたメガネをよそに軽快な着地を決め、今度は僕を睨みつけてくる。

「……私を騙したの？ 矢琴」

「え、それは……違う、誤解」

「うるさい！ 言い訳しても無駄なんだからね！」

口喧嘩をしても、状況は変わらなかった。

怒り狂って迫ってくるソラ、すぐ目前に彼女の顔がある。

冷や汗を感じつつ、彼女の怒りを受け止めつつだった、青色腕章の軍団をみやる。

「……氷川矢琴……」

先頭に一步飛び出た奈乃沙先輩がぼつりと、口にしていた。僕の名前を呟いたことまでは理解したが、それ以上は聞きとれなかった。次には彼女、僕達を小さく、指さしてくる。ヤバい、とは思った。

「……残念だけど」

ソラの肩を持って引き離し、逃げると叫んだ。形振りも構わず、僕も逃げ出した。

「……勝たせてもらっ、から」

青色腕章が突然わきたった、各々に叫びつつ、僕達を追いかけ
くる。

待ちなさい、やら、捕まえてやる、やら、ソラさん大好きです、
やら。

体を振るようにして僕は、ひたすら走るしかなかった。ソラ達も
逃げているだろうが……様子を確認する暇は無い。

迫ってくる女子を引き離そうと、走るのが精いっぱいだ。

何故、僕たちの計画が奈乃沙先輩に露呈していたのか。恐らくは
通人の奴が情報を漏らしたに違いない。全てを信じ過ぎたんだ。初
葉だっていつ裏切るか、いや、そもそも僕の味方なのかすら分から
ない。

人を疑うような真似はしたくない。だけど僕が疑心に至るのは仕
方無かった。あまりにも素直な初葉の態度。何より初葉は、選挙工
作のために、僕の家へと潜り込んできたんだ。

差し掛かった階段は、全段を省略するように飛び降りた。
とつさに上階の様子を見たが、まだ彼女達の姿は見えない。

ただ確かに、近づいてくる声ばかりがあった。

余裕に任せて見回してみたが、ソラ達の姿は影も形も見えない。
やはり逃亡に次ぐ逃亡の中で、はぐれてしまったのだろう。

僕はひたすらに廊下を走り抜けた、敵からは随分と距離を離れた

が、安心はできない。

ふと、何かに気付く。ふと隣を通りかかった、教室の中だ。……誰か……居る……？

不穏な気配に足を止めた、恐る恐ると視線を向けてみる。

「……矢琴か？」

向こうの人物も、僕に気付いているようだ。

教室後部のロッカーを手探りながら、奴はこちらを見つめていた。

有村だ。

酸素を欲しがる心臓が、ふわりと柔らかくなつた気がした。

僕は助かったのか？ ……助かったんだ！ 有村の頭に後光が差して見える！

「有村、助けてくれ、追われてるんだ」

「……ほお？」

「ところで、お前は？」

僕が言葉に込めたのは、こんなところで何をしていたんだ？ という旨の質問だ。

わざわざ一人で別行動をとると言っていたほどなのだ、有村にはよほど重要な用事があったのだろう。味方にも言えないような、もしかしたら選挙に勝利するための秘策があるのかもしれない。

「よく聞いてくれた。……フン、今日の俺は……良い仕事をしたと思っぞ？」

奴はロッカーを探る手を止め、片頬を釣り上げてのしたり顔。億

劫そうに膝を立てると、廊下の僕に面する形で歩み寄ってきた。
背中には、唐草模様の風呂敷を抱えていた。

「もったいつけるなよ。結局何してたんだ？ そんなことを堂々と
言うからにはさぞ立派な仕事を」

「ブルマ泥棒」

「ちくしょう」

脱力した。

「見られたからには仕方ない。お前には後で分け前をやる」

「何の？」

「ブルマの」

「バカじゃないの」

駄目だコイツは。有村はもう駄目だ。人じゃない、人として終わ
ってしまっている。

責めるような視線を向けても、有村は余裕そうに、且つ楽しそうに、
胸を張るばかり。

ふと、雑な足音が数多も数多も、僕の意識に介入してきた。
女子が追い付いてきたらしい。

「くっ……奴らもう僕に追い付いてきた……」

「うるたえるな矢琴。相手は女子だ、女子なりの対策法がある」

迫りくる足音に対する形で、有村が廊下に立った。

無駄に落ち着き払った奴の態度は、根拠のない安心を得るに易い。

僕は逃げることもせず、有村を見つめていた。

奴は強く廊下の真ん中を踏みしめ、仁王立ちしてみせる。

「ここは俺に任せろ。お前は先に行け」

「有村!？」

「心配するな。なあに。俺は生き延びて、すぐお前に追いついてみせるさ」

駄目だコイツ台詞的に絶対死ぬ……!

「フン、だから行け矢琴。次の授業が始まるまでに、奴等女子どもは俺の返り血で赤く染まっっているだろう」

「それじゃあお前が死んでるよ」

今まで感じていた根拠のない安心が、瓦解した。ガラガラと音を立てるでもなく、ふにやりと期待が折れる。

とたん、意識が逆立った。

廊下の突き当たりから青腕章の女子たちが姿を現したのだ。

堅牢な造りの校舎を震わせそうな足音を響かせつつ。雑兵どもがわらわらと。

『いた! 氷川矢琴よ!』

敵が指さしてくる。

有村は尚も動じなかった。

廊下のだ真ん中、つまり奴らの進行直線上から、動く気配が一切無い。

「矢琴行け」

「でも有村……」

「行けえええあッ!」

言葉に背中を押される形で、走らされる。

幾分か、何度も呼吸をするだけの時間、無心で走った。
ちくしょう……何が行けえええあだよ。

感謝は忘れない。

やはり背後が気になり、首だけを振り向かせる。

女子達が有村に襲いかかるうとしていた。

「フハハ！ 次期生徒会長候補有村要也を舐めるなよ女子ども」

勇んで敵の軍団に指をさし、口上。

「これが俺の覚悟だ……性剣解放ッ！」

有村は悠長にスラックスのベルトをかチャリカチャリと触っている。
腰元のズボンをわしづかみにして。

脱いだ。

『きゃっ……』

女子達が止まった。

顔を引きつらせる女子達。目を覆う者、硬直する者、凝視する者、
様々。

「俺に触れるだけの覚悟がある奴はかかってこい。ほら、どうした？」

『きゃああああああ！！』

それはもう、阿鼻叫喚。廊下の窓という窓を割りそうな程の金切り声が、荒ぶ。

僕は後ろを振り返ることをやめた。

ただ、前だけを見て生きて行こう。そう、心に決めたのだ。
あいつ色々酷すぎる。

男子棟に逃げ延びたと同時、鳴り響くチャイム。汗は幾千の滴、
髪さえも濡らしていた。

廊下の壁に手をつきながら、歩く。肺に焼けた鉄でも放り込まれ
たような苦しさだ。

とにかく……闘いは終わった。

僕達が罾に嵌められたという事実は確かだが、状況は一つも後退
しじゃない。

「……」

廊下の片隅に、一人の女子が居た。壁に寄り掛かるようにして、
座りこんでいる。

綺麗に揃って垂れた横髪。

鈴音子さんが、三角にした足に顔をうずめるようにして……そこに
居る。

「鈴音子さん、大丈夫だったか？」

「……………」

声をかけても、更に深く顔をうずめるだけだった。

「作戦自体は失敗だったけど、鈴音子さんは立派にやってくれたさ。あと一歩だった」

「……………逆です。あと一歩で、負けてしまふところでした」

膝にうずめた顔を半分だけ覗かせて、チロツとこちらを見上げてくる。

まだ、僕たち以外の誰も戻らない廊下は……………とても風通しが良い。そんな、スカスカとした空間だった。

突如、彼女は立ちあがった。まず目を伏せて。次に、僕に頭を下げて、言う。

「ごめんなさい」

含みの一切感じられない、澄んだ謝罪だった。

「鈴音子さんのせいじゃないだろ？」

「……………奈乃沙の居場所について妙な情報を流して、皆さんをあんな状況に追い込んでしまったのは、私です」

「だけどあれは」

「最初、やっぱり私はすごいなって、有頂天になっていました」

彼女は、少しだけ笑いながら。

「それも、とんだ間違いだったみたいです」

これほど簡単に、人は自分の間違いを認めることができるものな

のか。

変な人だ。妙に自信家だったり、やたら自分に厳しかったり。

「私、もつと頑張ります！ だから……」

うつむかせていた頭をふりあげて、真摯に僕の本を見つめてくる。

「だから……」

彼女は言葉に詰まっているようだった。ただ、僕を見つめてくる。彼女の瞳を介して、光を介して、見えるもの。

よく分からないけれど、言語化出来ないような気持ちだけは確かに伝わってきた。

「そうだな」

いつの間にか整っていた、僕の呼吸。

苦しさの後に、深く息を吸うのは、肺が大草原にでもなったような心地だった。

ちよつと口を結んで、笑ってみせる。

彼女の頭に、手を置いた。えへへ、みたいな声も漏れた。

僕の手で頭を支えられ、彼女の表情からも、戒めのような暗さが取り払われていく。

僕も、もうちよつと明るく笑ってみた。

「その顔、可愛いです矢琴君」

褒められるのは、嫌いじゃなかった。

なんか、戦いは終わったんだなって、実感できる。

彼女が僕を呼ぶ際の敬称が、『矢琴さん』から『矢琴君』に変わったのだと気付いたのは、まあ、次の時間に授業をボケボケと聞き流していた時の事だ。

【第六話】浮き浮き気持ち。（後書き）

鈴音子さんは他の小説にも出演させようかと思います（意味深）。
彼女のことは大好きです。もちろん作ったキャラみんな大好きです！
そんなキャラ達を見守ってくれている、読者様も大好きです！

【第七話】（若干）夏だ！ 水着だ！ 海と思ったら大間違いだ！（前書き）

馬鹿らしい話に突入できてニコニコしています作者です。

やっぱりこういう、どおおおでもいい話を書くのは大好きです！

シリアスもバトルもいいけれど、たまには息抜き息抜きです！

【第七話】（若干）夏だ！ 水着だ！ 海と思ったら大間違いだ！

過去など過ぎれば一瞬のもの、らしい。

日が暮れ、登れば今日は休日、昨日は一瞬だ。

我が家にて出掛けの装いに身を包み、僕は自分でも分かるくらい、
落ち着きない。

「お兄ちゃん牛乳飲み過ぎ！ 出掛けにまで飲まないでよ！」

傍らで、猫柄パジャマ姿の初葉が険しい顔をつくっていた。
彼女が指さすのは、流し台で折られ、積み上げられた牛乳パック
の群。

まあ簡単なピラミッドが作れるくらいの量だ。

「なんでそんなに飲むの？」

「……せ」

「せ？」

「背を伸ばしたいからだよ、悪いか！」

少々顔が熱くなった。初葉から目を逸らし、窓から差し込んだ日
を見やる。

また牛乳の入ったコップを、くいと傾けた。余さず飲みきり、簡
単にすすぐ。

「お兄ちゃん、本当に出かけちゃうの？」

何かと思えば、そんな言葉だった。後ろ手に手を組みながら、僕
を見上げてくる。

「お兄ちゃん出かけたら私、暇だもん。つまんなあーい！」

やたら今日は彼女、僕を引きとめようと躍起になっている。何故だろう。

「わ、悪かったよ」

「ね、ね！ 謝るくらいなら一緒にゲームしよ！」

幼く、純粋な願いを唱えるその視線に、心が揺がないでもなかった。

「駄目だ。さすがに皆としてきた約束は、破れないからな」

「死ねよ」

「!？」

僕は前回の選挙を踏まえ、再び初葉を疑う気持ちを覚えた。勿論、初葉の事が嫌いになったとか、そんなんじゃないけど。

彼女はやはり、上手いこと僕達に近づき、隙あらば殺害を目論んでいるのかもしれない。

この数日間に及ぶ共同生活の中で、思い当たる節はチャーハンの件を代表に、挙げてキリが無い。風呂場の床に石鹸が放置してあったり、人が寝ている間に冷房を全開に効かせていたり。僕は何度死にかけただろう。

これらが過失にしる故意にしる、初葉が危険人物であることに変わりはないさそうだ。

「じゃあ、行ってきます」

「……行つてらっしゃーい」

耳障りな音を立てて、水道のコックを捻り締める。

初葉が嫌々と、水着を詰めたバッグを手渡してくれた。

向かうは室内プール。随分前の話に、有村が面白い提案をしていたのが発端だ。

生徒会長候補と、特別腕章所持者が参加する……親睦会。選挙で戦いあう関係なのに、互いの代表が互いを深く知らないのはつまらない。とのこと。

僕も、有村の言う事には賛成だった。

これで少しは選挙の戦いも爽やかなものに変わってくれば、と思う。

まあ有村としては、奈乃沙先輩の水着姿が見られればそれで良いのだろうが……。

「今日の親睦会って、やっぱり、お姉ちゃんも来るんだよね？」

つま先で地を蹴り、靴を合わせていた最中の事だった。背中に飛んできた質問。

僕は肩越しに振り返る。

「どうした？」

「……ううん」

「あ、ああ」

玄関の扉を開けば、澄みきった広い世界だった。

出ていく直前、後頭部に牛乳パックを投げつけられた。何故。

市営プール。

そろり、そろり。

「……ん？ 矢琴か」

奴の背後に忍び寄る途中で、気づかれた。有村は怪訝そうな顔で振り返ってくる。

驚かせてやろうと思ったのに。

僕達が立つのは、市営のプールのロビー。

前回の選挙にて、下半身を露出した有村は当然……女子達に相応の制裁を受けたのだろう、一日経った今も顔にあざを残している。

有村と僕以外のメンバーは奈乃沙先輩とソラ、あとは特別腕章の持ち主達のはずだが。

「他の人たちはまだ来てないのか？」

「ああ。俺たちが一番乗りみたいだな……。まあ、気になる存在も居るには居るんだが」

有村は、缶ジュースを抱えた右手で簡単に、とある方向を示した。ロビーはリラックス用の円テーブルが置かれ、老若男女様々な人間がくつろぎまくっている楽しい空間だ。中でも、よく見ると一人テーブル付属のソファーに、見覚えのある人物がメガネを煌めかせていたっていうか。

通人だ。

うわあ。

「あいつはまだ俺達に気付いてないみたいなんだけどな」

有村が目を細め、遠くに見えるメガネ男を厳しく睨みながら、つぶやく。

「何故奴はこんな場所に居る、俺への嫌がらせか？　メガネのままプールに入って怒られてしまえ」

察するところ……。通人がプールに来ているのは、偶然とも思えない。

恐らく、奴が青の特別腕章を預かった人間だということだ。

通人も、この親睦会に参加する一人なのだろう。

「ハツ玉垣奈乃沙も奴の能力を買い被りすぎだ。奴の利用価値はメガネ以上メガネ以下だ」

「ただのメガネじゃないか」

「まあ、通人が青の特別腕章を担当するからには……青腕章の敗北も近いな。現状の青腕章を食べ物に例えて言うなら、そう、最高の食材に大量のワサビを練り込んだようなものだ」

端から聞いたら笑ってしまいそうな例えに、僕は怪訝ぶって

「へえ」

呆れたように目をぐるりと回しながら、軽く後ろ手を組んで、有

村の顔を見上げる。

「ちなみに聞くけど、僕達二人を同じように例えて言うなら？」

「ワサビだ」

「ワサビだけか！？」

「しかしこれではアレだな。通人と俺達が同類のワサビとして括られてしまう。望ましくない事態だ」

「じゃあ、通人はワサビじゃなくて別のものってこと？」

「ああ。もはやウンコだな」

「有村それ食材じゃない！何を基準に診断してるんだよ！」

「俺のインスピレーションがそう伝えている。もはやウンコだ。奴は抹殺するべきだな」

「落ち着け！」

猛る有村を片手で制しつつ、通人の様子を探る。

メガネの内側には、相も変わらずのクールフェイスだった。理知的で冷静な性格の通人なら、こうして見れば確かに……奈乃沙先輩とお似合いなのかもしれない。

奴は円テーブルに安置された缶ジュースをじっと見つめたまま、動かない。

通人、何をしているのだろう。

「……」

ひたすら見つめてみる。

通人の……口の……両端が……、厭らしく……ニタアアアッ！

！ 吊りあがった。

おぞましい、おぞましい！ 奴は存在してはいけないと思わせるほどの、冷たい衝撃。

見ただけで背中表面にざわざわ、針が駆け巡った。

「何だあいつ気持ち悪いぞ……!!」

目を丸く見開き、僕と同じように奴を凝視する有村の顔は……慄きに引きつっていた。

見れば微かに、缶ジュースを握る有村の右手が震えているようにも見える。

「有村、落ち着け！ 落ち着いて！」

通人はそろりと円卓の缶に顔を近づける。

……手首からしなやかに折り曲げた手を、丸っこく握る。猫の如し。……学校では常に参考書を片手に『フン、超能力？ UFO？ 非科学的だね』と嘯いていた通人が。猫の如し。

通人は嬉しそうに目を細めつつ、丸めた手を招く仕草。極めつけに、やはりメガネを煌めかせながら。

「にゃあーん」

こんな通人は見たくなかった……！

見つめる僕は、時間を忘れるばかりだ。人の恥ずかしい瞬間を見てしまった！

急いで有村に顔を振り向けた、奴は戦慄きに「あ……ああ……！」「声を漏らすばかり。

有村が缶ジュースを握る手が、震え、いや震えるどころか揺れると言った方が正しい勢い。中の飲料がどぶどぶとこぼれる。

「にゃんにゃん」

通人の奴まだやってる！

ただただ、楽しそうに、楽しそうに、ただ、にゃんにゃんにゃんにゃん

「にゃんにゃん　はッ！？」「こっちに気づいた！」

すごいこっち見てる！　すごい見てる！

みるみる赤みが差していく通人の頬。

咳払いしてメガネを中指でくいと持ち上げ目を泳がせ口笛を吹かせ。

「ふ、フン、にゃ……にゃ……そうだニャクラだ！　はっは、やっと思ひ出した。そうニャクラとは西アフリカに位置するギニアビサウ共和国オイオ州ニャクラ区だったな、思ひ出した！　スツキリした。僕は決して猫の物まねをしていたわけではなく単にこのニャクラという名称を思ひ出そうと必死になっていたんだ何も恥ずかしいことはないだろう」

誤魔化そうと必死らしいが、しまいには僕たちの足元にまでドタドタと駆け滑り込んで来た。

スライディングで土下座。

「見なかったことにしてくれないか！」

よほど恥ずかしいらしい。何やら、文科系男子の思わぬ一面を見てしまったようだ。

状況は過ぎれば穏やかな笑みを浮かべることもできた。

僕は優しく、有村と視線を合わせた。まあ、僕も有村も、人の恥ずかしい瞬間で弱みを握るほどには、非道な発想をする人間じゃない

い。有村の優しい瞳から感じられるものがあつて、僕は有村に発言を委ねた

「このウンコ野郎が」

僕は有村を殴り飛ばした。

ゆっくりと息をつき、通人の手をとって立たせてやる。

「通人、そもそも何で……あんなことしてたんだ？　その、にゃんにゃんって」

「……奈乃沙さんだ。僕は昨日の朝、見た」

「何を？」

「にゃんにゃんをだ！　知らないのか？　彼女は無類の猫好きだ！　普段無口な彼女が猫に対してのみ見せる聖母のような慈愛の表情！　そして聞くもの全てを蕩けた心地に導く甘い声で、にゃんにゃん、だぞ！　通学路途中に見かけた猫に向けて、彼女はにゃんにゃんしていたんだにゃあ！」

「なんだかエキサイトしてる。すごいエキサイトしている。語尾に『にゃあ』って。」

話自体には、興味深いものがあつた。萌えだ。

奈乃沙先輩は、普段口数も少なく、顔の筋肉が石化したのかとさえ思わせるほどの無表情。

鉄仮面が人知れず見せた慈愛の笑顔。それも、にゃんにゃん。

「奈乃沙さんの魅力はそれだけに留まらない、まず彼女に関する逸話の一つ目から順に話してやると」

適当に相槌をうちながら、肩を下げるしかなかった。
誰か早く、マトモな人よ来てくれ。

願わずにはられない……。

ソラと奈乃沙さんの二人が、同時にロビーの自動ドアを開いた。
ソラの黄色腕章は特別腕章を用意していないと聞くから、全員合
わせて五人。

僕。

有村。

通人。

ソラ。

奈乃沙先輩。

と、これで揃ったわけだ。

「……まさか、矢琴達に後れを取るとは思わなかったわ……」

じとりと、不機嫌げにソラは僕たちの顔を見回してきた。

僕たちよりも到着が遅れたのが、よほど腹立たしいようだ。

恐らく今日の彼女は、ずっとこの調子のままではないかという懸念が、僕にはあった。

彼女は、前回の選挙について愚図っているのだ。

以前の選挙、必死に頑張った結果がアレでは仕方無い。

僕の策略に嵌められたとも誤解しているようだし。今さら僕から弁解したところで信用されない。

例え信用されたとしても機嫌を直しはしないだろうから、僕には何も出来ない。

「せっかくの親睦会だ、そうゴネるな」

「……う、うるさい、うるさい！ よーくに言われたくないの！」

よーくんとは、幼稚園時代の有村に付けられたニックネームである。有村要也の要だ。

ソラは、他人の前でこそ有村を苗字で呼ぶが……実際に面と向かうと、未だに抜けきっていないこの名前を、使わずにはいられないらしい。

とにかくもって、ごねることをやめない彼女。僕たちから顔を逸らして、黙りこくる。

けれど、僕たちは分かっていた。

彼女はとても律儀で、とても素直な、一般的に言う良い子だということを。

ソラはごねた末に彼女はチラリチラリとこちらに視線を向けて。

「ごねた末に彼女は悔しそうに表情を歪めて。たまらなそうになつて。

ごねた末に

「……………ごめんなさい……………」

顔をそむけたまま、蚊の鳴くような謝ってきた。

「…………勝手に怒ったりして…………愚図ったりして、その……………」
「ごめんなさい……………」

ここで穏やかな笑顔でも向けてやれば彼女は怒りに頭を震わせてしまうから、黙って聞こえなかったふりをする事しか、僕にはできなかった。

「早く行きましょう」

横から奈乃沙先輩が話を挟んできた。

少し急くような挙動で、スタスタと通り過ぎていく。

梅雨の季節には少し早い、生地の薄いワンピース姿だった。キャペリン帽でもかぶっていきそうな風だが、彼女が手にもつのは帽子ではなくプールバッグ。

「待って下さい奈乃沙さん！ 僕がお荷物をお持ちしましょう！」

あたふたと奈乃沙先輩の背中に追いつがる通人。だが、彼女は振り返って

「お願いだから、近寄らないで」

なんとという辛辣な一言。

ひよろりと崩れ落ちた通人を置き去りに受付を済まし、スタスタと更衣室にまで歩んで行った。

これほどに通人を嫌っている彼女は、何故通人を特別腕章に命じたのだろうか。単純に能力を買ったの事か、どうか。

「惨めだな通人」

崩れ込んだ通人の隣に、フンと鼻を鳴らしながら立ちはだかったのは、有村だ。

彼が浮かべるのは、嗜虐の嘲笑。全てが、通人に向けるための表情である。

「何だと!？」

「……ま、見ている」

いきり立つたらしい通人の肩を落ち着いた手つきで抑え込み、有村は歩いた。

奈乃沙先輩の背中を、追いかけていた。

棒立ちで状況を見守り続ける僕とソラ。彼らのテンションにはついていけない。

有村は歩きながらニヤつかせた顔を半面だけこちらに向かせ、そして奈乃沙先輩の背中を追い寄った。

気持ちの悪いほど滑らかな手つきで、右手を、差し出しつつ

「おい玉垣奈乃沙、良かったら俺が荷物を持ってやっても」
「近寄らないで」

有村は死んだ。

奈乃沙先輩は歩みを止めて、背中で大きなため息をつく。
突如両手を顔辺りの高さに上げたかと思うと

「へつきち」

くしゃみだった。随分と可愛らしい、小さなくしゃみ。

「……玉垣奈乃沙、どうした、風邪か？ 俺に対する恋の病か？」

生き返ったらしい有村が彼女の背中に追いつがるも、彼女は右側面を振りかえらせ、手を突き出した。

近づくな、という旨の意思表示であるらしい。さすがに有村も、歩みを止めた。

何より目を引くのは、彼女のポーカーフェイスが、情けなく歪んでいたことだ。

こんな先輩、見たことがない。

「つくしゅ！」

「！？」

「は……はくちゅんっ！ ち、近寄らないで……！」

涙目で何度もくしゃみを繰り返す奈乃沙先輩。

なんだこの光景、なんなのだ貴女は。そう問いたくなる衝動にかられる。

目の前の光景には、現実味すら薄れて感じた。

さしもの有村も、事態の異常さに動きを止め、今にも後ずさりするような困惑っぷりだ。

「……は、はあ、ふう」

胸を押さえながら、必死に呼吸のリズムを取っている。苦しむ先輩を、僕は初めて見た。

「氷川矢琴つくちゅ」

前傾姿勢のくしゃみ混じりに彼女が指さしたのは、有村を通り越した延長線上、僕だ。

「早く行きましょう」

何故僕が。

更衣室に通じる通路、僕と奈乃沙先輩が並んで、その後ろを三人が歩く。

「矢琴死すべしだな。何故あいつだけが玉垣奈乃沙の隣にいる」
「僕も全く同感だ。矢琴は死ね」

背中に、受けきれないまでの殺気を感じるのだが気のせいかな。

二人分の小声で、しーね、しーね、と聞こえてくるのは気のせい
か。

「矢琴のバカ」

何故ソラまで!?

「……」

落ち着かない。表れた拳動として、プールバッグの持ち手を何度
も何度も、握り変えた。

「やっぱり、キミなら大丈夫みたい」

ボソリ、僕にしか聞こえないような音量が耳に届く。

「何がですか?」

くしゃみもすっかり落ち着いた様子の先輩が、僕を横目でチラリ
と見やってきた。

残念ながら高身長先輩に、僕のソレは追いつくことができない。
僕はひたすら先輩を見上げる形になった。

「私は男が嫌いなわけじゃないの」

「じゃあ、何で有村達にあんな仕打ちを? ものすごく怒ってます
よ奴ら」

「怒らせてしまったことは反省しているけれど。でも、だって」
「だって?」

「……私は、男性が苦手だから」

「……苦手なのは、有名な話ですね。どうしてなんですか?」

「男性アレルギー」

……。

……。

……。

「え？」

「勿論精神的な物なのは分かってるけれど、発症してしまう物は仕方ないの」

突飛した事実には思考はスカッと空振りした気分だが、目の前の実実は受け止める他には無かった。

何だか釈然としないなとは感じつつも、妙に納得してしまう僕がいる。

「キミなら、近くに居ても大丈夫だと思ってた。だって今、私はくしゃみをしてないもの」

「それは……僕がその、女みたいだからですか？」

「多分違う。きっと理由は、私がキミに一目ぼれしたから」
「……？」

淡々と。

「好きだから、大丈夫」

この瞬間を小説にして僕の心を表現するならば、見開きのページ全てを空白にしても良い。

背後からの殺気に対する感覚を遮断してまで、僕は衝撃の緩和に

頭の全てを使い続けた。

自分の表情が固まったまま動いていないことに気づいたのは、どれだけの秒数が経ってからだろう。足だけは着実に進み続け、通路は突き当たりで二手に分かれた。進む道で、更衣室の男女が決まる。

「……!？」

奈乃沙先輩に手を掴まれた。彼女の手は、未知の感触だった。

暖かい、柔らかい、細い、有村の手なんかとは、全然違う。

ドギマギに全てを忘れ、僕は手を引かれるままに歩く。

角を曲がり、歩く。歩き続け

「な、なな、や、矢琴……!」

後ろから何か聞こえる。

「矢琴!」

ソラの声だと気付いて、とっさに振り返った。怒られるのは嫌だ、と意志が働いたから。

同時に意識が明晰さを取り戻した。

僕は何をやっているんだ、周囲を改めてたしかめることで気付いた。

「こ、こっち女子更衣室じゃないですか!」

慌てて先輩の手を振り払って、ゴキブリの如く後ずさった。

「そうね」

そうねじゃねえッ！！

「や、矢琴のぶあか！ 何やってるの！？ 矢琴は男だよ！！」

僕と奈乃沙さんの間に踏み入ってきたソラが、強く、強く言葉で僕を揺らす。ソラの取り乱しように普通じゃない。手当たりしだい指をさして、わめきたてて、顔を赤くして。

「せ、せせせ先輩も！ というか先輩！ づあ、ただ駄目です！ 矢琴をこっちに引きずりこまないでください！」

「……だって」

「だってじゃありません！」

「……そんなあ」

ソラの威勢に完全な敗北を喫し、叱られるがままに叱られる奈乃沙先輩。

力なく、僕は状況を見つめるだけだった。

奈乃沙先輩のクールビューティなイメージは完全に崩壊した。

静かにうだりつつも、先輩はソラに腕を引かれて女子更衣室へと引きずられている。

こちらに振り向いた彼女は、涙目だった。意外に、先輩は表情豊かであることを知った。

「……ほあ。玉垣奈乃沙があそくまでお前に肩入れしているのは気に喰わんが、まあいい。また玉垣奈乃沙の新たな一面を知ることができた」

「やはり奈乃沙さんは素敵だ。僕はどこまでも奈乃沙さんを追い続ける」

目の前を二人の男が通り過ぎ、彼女たちの後を追う。この通路を通るのが、さも当然のような顔をしてるから困ったもん

「何でお前ら女子更衣室に行こうとしてるんだ！」

まともな人間が少なすぎる！ 僕一人じゃ回収しきれない！
有村は端正な顔立ちを厭らしく歪めて、僕に振り返る。

「バカかお前は。これとない覗きのチャンスを逃す手があると思っ
ているのか？ 女性の裸体、それは神秘、女性の裸体、それは魔法
！ どうだ矢琴。初日の出なんかよりはよっぽどありがたくて素晴
らしいものだぞ」

駄目だコイツは！

僕のエネルギーに彼らを止め切るだけの余剰は残されていない。
もう、どうにでもなれと意識を流した矢先だった。先輩をひきずり
続けていたソラが、声を張り上げる。

「よ、よくん！！ ふざけないで！ 覗いたら殺すから！ 絶対
見ないでよ！」

「いやお前は別にいいから引っこんでろ、見たくないし」

「……！！ そ、そんな私だって結構、あの、体つきとかは結構：

……！ 自信あるんだけど？」

「いや、別にいいから」

「！？ …… かわいい水着とか、この日のために買ってきたんだけ
ど」

「そっいうのいいから」

「！？」

ソラ、ちょっと傷ついたらしい。

「い、行きましよ、奈乃沙先輩」

足早に、更衣室へと去っていくソラ。

残された奈乃沙先輩は交互にソラの背中と僕とを見つめてくる。

何やら先輩、手持ちのプールバッグを探ったかと思うと、小走りでコチラに駆け寄ってきた。

「これ」

何やら形のハッキリしない物を取り出すと、僕に押しつけて小走りに去って行く。

何だろうコレ、と疑問に思ったのもつかの間だ。

胸の奥が闇に包まれたような絶望。

受け取ったコレにどのような意味がこもっているのか。考えたくも無かった。

『ちよ、ちよつと有村、通人。……僕、先輩にこんな渡されたんだけど……』

『……！？　これはお前……！！　流石の俺でも驚きは隠せないな』

『貴様……！　どういうことだ！』

『僕だつて分かるわけないだろ！　なんでこんなモノ……渡されたんだ。どうすればいいんだろ』

『そりゃあ、着るしかない？　玉垣奈乃沙がコレをお前に手渡す理由なぞ、それしか思い浮かばない』

『僕が……これを……？』

『矢琴。仕方ないが、これは奈乃沙先輩の意志だ。そつまり僕の意志でもある。大人しく』

『え？　……え？　ちよつとやだなあ二人とも、僕がこんなの着るわけ……ちよ、え！？　やめてくれ！　近寄るな！　触るな！　やだ！　やだつて！　やだああああ！』

【第七話】（若干）夏だ！ 水着だ！ 海と思ったら大間違いだ！（後書き）

基本的には日の変わり目、0時が更新日時になっています！

【第八話】 僕だけ変な水着だ！ 海と思ったら大間違いだ！（前書き）

想像以上に文量が少なくてびっくりしました。

少しばかり短く仕上っていますが、第八話、お楽しみいただけたら幸いです。

【第八話】僕だけ変な水着だ！ 海と思ったら大間違いだ！

擬音にすれば、ソワソワ。もし実際、擬音に音が鳴るとすれば……この広大な空間をソワソワという音だけで揺らしてみせる、ってくらいのソワソワ。

羞恥に対するせめてもの抵抗に、前屈みながら自分の胸に肩を寄せるばかりの、僕だ。若干キモイ。

自分の体を見返すと、卒倒しそうになる。鏡を見たときは、実際に卒倒した。

あれ？ 僕かわいいんじゃないか？ なんてことも、正直、ちょっと思った。

でも恥ずかしいものは恥ずかしいし、嫌なものは嫌なんだ！

僕が男であると、周囲にバレたりしてないよな……？

そういう意味で、遊泳客の視線に悪意を感じてしまっただけなら、嘲笑の幻聴すら聞こえる。

心配になって、改めて自分の格好を見回した。

ピンクのラインで花柄模様が描かれている、ビキニ。ボトム部分はショートパンツをスカートが囲むような構造になっているから、下半身で僕の性別が露呈されることは無いはず……だ。

「……ほおお？」

上半身裸の有村が、腕を組みつつ僕を凝視する。自分が無防備な気がして、怖かった。

広すぎて、嫌だ。50mプール、子供用のプール。ウォーターズライダーではしゃぐ子供の声に、自然と体がびくついた。

屈んだ姿勢のまま、有村の顔を見上げる。

「だ、大丈夫だと思うか有村……？ 僕、バレないかな、バレないかな男だつて！」

「んあ、大丈夫だ。俺の主観で言わせてもらっても、今のお前はただの可愛い貧乳女子だな。堂々としている。前屈みに自分の体を抱えながら、チマチマと歩行する女子は居ない」

そんなことは言ってもだ。無理だ。

お前も女装させてやろうか。女装して絶望して泡吹いて死ね。

「……」

有村の隣には、メガネを外した通人が、地に突き立った棒のようになっているわけだが……。

口を間抜けに開いたまま、筋肉の一つも動かすことなく僕を凝視しているのだった。

僕を見つめる奴の鼻から、血が一筋流れ落ちたのは、気のせいだと思いたい。

「そして……」

有村が腰に手を置いたまま、通人の方へ振り返る。

おど、と、鼻の下を拭いながら、通人が一步退いた。

有村の奴、威圧感だけは人一倍だ。

「なあ」

メガネの無い、新鮮な風貌の通人に、声をかける有村。

「先ほどから俺達のやりとりを傍から見つめているお前は、一体誰だ」

メガネが無いと通人に個人としての判別もつかないのかコイツは！？

「ふざけるな！ 僕だ！ 佐渡通人さわたり ゆくとの名前を忘れたとは言わせない

……！」

「……お前が通人だと……！？ バカな」
「何だその目は……！」

「今まで俺は、通人という名のメガネから人間が生えているものだ
と思っていたが、どうやら違っていたようだな。まさかメガネがお
前の本体でなかったとは……」

「貴様は僕を馬鹿にしているのか！！」

なんて馬鹿なやり取りだ……。

僕を置いてけぼりに、ぎゃーぎゃー、喧嘩を繰り返す二人。

「あ、よーくん」

有村の背後に、ソラだった。ようやく着替えが終わったようで、
布地が多いビキニ姿。

彼女は景気よく、軽く弾んだ調子で語りかけてくる。

「やっぱり男子は着替えも早くて羨まし」

走ってきた。

僕に走ってきた。

すごい迫ってきた。助けっ……

「矢琴！！　ばかあっ！！」

首根っこを掴まれた事は認識した、体が引きずられたことも認識した。

痛い、とても痛い。ただ何が起きているんだと脳が理解はできなかった。

僕の体は大きな音をたてながら、水に沈む。

「……う、あ、飛びこみしちゃった……」

水底に足を立てて立ち上がれば、既にそこにはうろたえたようすのソラが居た。

彼女も、髪がしなだれるほどに濡れている。

「……矢琴！　何やってるの！？　ま、まさか噂通り、本当に女装なんてしてるの！？」

なにその噂聞きのがせない。

「いやこれは……！」

「矢琴駄目だからね！？　絶対女装なんてしちゃダメだから！」

彼女が僕を水の中に突き落したのは、数多の視線から僕をかばうため、いや、隠すためらしかった。話を聞いてくれる様子は無い、うわーうわーと喚きながら僕の肩を大きく揺らしてくるソラ。

ふと、影が差し込んだ。

誰かがプールサイドから、僕達を覆うようにして覗きこんできたのだ。

「……着てくれた」

奈乃沙先輩だった。ほんの少しだけ口の両端を持ち上げた、穏やかな顔。

純白の水着に包まれた豊満な胸は、まるで羊毛が詰められたかのように、見たところからフワリと揺れている。

通人が後ろの方で鼻血を吹いていた。殺陣にて殺される雑魚その一のような動きで。

「……まさ、まさ、まさか、先輩が矢琴に水着を着せたんですか？」

全身で『あわわ』を体现しつつ、プールサイドの奈乃沙を見上げるソラ。

「そう。とても似合ってる。良かった」

プールの温水に、体が溶け込んだような心地だった。

顔の半分までを水に沈ませながら、自分の体をかばうようにしてただ、水底にふわりと足をついている。

時折ふと視界の端に、遠くからこちらを見つめている奈乃沙先輩

が見えた。恐ろしい。その度に急いで潜水し、逃げた。

先輩が僕に好意を持ってくれていたらしいことは、もちろん嬉し
いけれど。こんな水着を僕に着せたところを見る限り……先輩が、
僕の『男』を好いているとは考えにくいだろう。

「ずっと見てただけど、矢琴、泳がないの？」

プールサイドに腰かけたソラが、片手で口の半分を囲って、声を
掛けてくる。

膝の上には、ピンク色のビート版を抱えているらしかった。

「泳ぐわけないだろ。こ、こんな水着で……」

「まあ……それはそうだけど。大丈夫じゃない？ どっからどうみ
ても女の子にしか見えないから」

彼女はビート版を手に持ちながら、つつ、と水中に体を沈ませ、
歩みよって来る。

「その、一見すれば可愛い……けど？」

「やめてくれよ気持ち悪い」

「な、何それ。せっかく人が褒めてるのに！」

鈴音子さんに同じく『可愛い』を言われた時とは、大分感受の仕
方が違うなとは、自分でも思った。

何故だろう、ソラが幼馴染だからだろうか。僕が悪態の勢いを止
めないことは明らかな事実だ。

「お前も、いい加減泳げるようになったのか？」

ソラは典型的な金槌だ。このように、ギリギリ足がつく程度の水深ならともかく、少しでも水面が身長より高くなれば、まるで鉄塊のように沈み込む。

「そ、それは……」

「いい加減泳げるようになれよ？ ほら、あんな風に」

僕は言って、とある一点を指さす。指し示す方向は時間が進むにつれ、猛烈な勢いで移動していた。

凄まじい飛沫を上げながらコースを爆進し、『フハハハハ』高笑いを奏で、泳ぎ続ける有村である。

ああして遊樂に來た水着姿の女性達の姿を、見まわっているのだろう。

彼には二つ名がある。『泳ぐ変態有村』だ。

泳げなかったらただの変態である。『ただの変態有村』だ。

「私は別に泳げなくてもいいわよ！ もう、中学校の頃に泳ぐことなんて諦めたから」

「泳げたら、海とか、プールとか、もっと楽しくなると思うんだけどな」

「知らない、そんなの。別に私は泳げなくても……」

「試しにやってみるよ、ほら」

ちよつと強引にだけれど、促してみた。水着のせいでそう派手に泳げない僕としては、暇だから。

まあこいつに泳ぎの指導くらいはしてやってもいいかなと、それだけだった。

「……」

ソラは水面に浮かべたビート版に、じつと視線を落としている。
口を強く結んでいた。

恐る恐ると僕の顔を上目で覗きこんで来て……。

「ちよつとだけ、頑張ってみる」

また溺れた。

また溺れた。

また溺れた。

「……絶対わざとだろお前」
「た、助けて！ ……たす……っ」

みつともなく手足をばたつかせるソラの体を、ほんの少し支えて
持ち直してやった。

足の着く水深でも、一度溺れて錯乱してしまえば、ものの見事に

水没してしまうらしい。

今までよく風呂場とかで死ななかったなこいつ。洗面所でも死ぬんじゃないか？

「ありが……とう」

全力の呼吸の合間合間に、僕へのお礼を述べていた。

彼女、溺れていようが絶対に、僕の体を掴もうともしない。だから限界まで溺れる訳で……。

例え助けてやっても、そそくさと僕から離れていく。よほど呼吸が辛いのか、真っ赤な顔で。

「大丈夫か？」

「……も、もうやだ！ どうせ泳げないんだから、こんなことしても仕方無いし」

「分かんないだろ、次は泳げるかもしれないし」

「……うう」

簡単な一言をかけてやるだけで、彼女は再び努力した。

今度は僕が手渡したビート版を掴み、足を蹴りだす。水中を推進するには、できていた。

ソラの奴、このまんま息継ぎできるだろうか。懸念を頭に渦巻かせ、遠ざかる彼女を見つめる。

「彼女、泳げてる」

妙に澄んだ声音が、僕の胸を貫通した。

振り向けば、飛び込み台の辺りに奈乃沙先輩の姿。

少しギョツとしたが、まあ心配はいらないかと考え直した。先輩は何を考えているかもつかめないような、奥行のある無表情でソラ

の姿を見通している。

「奈乃沙先輩」

心臓を絞るつもりで、意志を決めた。だから彼女に声をかけた。先輩が僕に気持ちがあるだか、水着だかで全てが有耶無耶になっ
てしまったが元来、僕は先輩に聞きたいことがある。

「何？」

「妹さん、帰ってきてないですよね」

初葉の件だった。

「……そうね……やっぱり、知っているの？」

こんな話題でも、先輩の表情は一切変わることが無い。こんな話題だからこそなのかどうかは、分からない

初葉の存在は、学校でも有名だ。この前の選挙で『妹さんが出
した』などと、事実を基にした噂が立ちのぼったためで。

「帰ってこなくて、寂しいですか？」

初葉、本当は僕の家に住るんですよ、僕と一緒に住んでるんですよ。

なんて事実を言うほどに、僕は大胆な決断ができない人間だ。
初葉は、あれだけ家に帰ることを嫌がっていたんだ。

その理由が一体何なのか、知りたかった。

「……寂しくは無いから、大丈夫。すぐ戻って来る。家出した理由
が大したものじゃないってことは、分かってるから」

ふっと先輩が笑った気がした。

「あの子は帰ってくる。多分今は、知り合いの家にも転がり込んでいるだけ」

「そう……ですか」

「私は妹が大好き」

先輩は相変わらず遠い目で、僕を少しだけ見つめて。

「キミのことも大好き」

「!？」

「だから私と付き合いなさい」

何その理論!？

ソラの胴体を抱えてやった。バタ足の練習だ。

足で、ひたすらに控えめな水飛沫を上げる彼女。

どうやらこの姿勢が恥ずかしいらしく、ひっきりなしに顔を水中にうずめていた。

慣れと言うのは恐ろしいもので、僕は内心、既にこの水着に対して何の抵抗感も無い。

ぼーっとしながらプールの喧噪を聞きつけていると、ふと、通人の声が。奈乃沙先輩を追いかける形でプールサイドを歩いているようだった。

「……奈乃沙さん！ 水着姿も素敵です！」

「そう」

「はい！ アレルギーの件は矢琴から聞きました……。しかし、諦めません。僕は……この思いが貴女に届かなくても構わない！」

「じゃあせめて、もう少し離れてくれる？」

「それは……嫌だ！」

どっちだよ。

小さなくしゃみを交えながら歩く奈乃沙先輩。通人は思いを濁らせているのか、一步一步差し出す足に躊躇いが見られたが、それでも後に追いつがるしかないようだった。

青春……なのかこれは。随分特殊な青春だな。

小さく俯いていた通人が、意を決したように顔を振り上げる。

「奈乃沙さん」

再び通人が、呼びかける。

「……何？」

「僕が貴女のぐあああああ！！」

死んだ。突然通人死んだ。

噴水のような飛沫、水面に大きな波紋をたてながら、通人がプールに落とされる。

しばらくすると、ぷかりと背中から浮かんできた。全く、動く様子はない。

通人は何者かに襲われたのだ、背後から。言わずとも、有村以外にはありえない。

「俺が水着ギヤルを眺めていた隙に、まさか玉垣奈乃沙に近づいていたとはなあ……？ 雑魚メガネは大人しく雑魚みたいに振舞ってりゃいいんだよ」

明らかな悪役がそこに居た。通人を蔑み、上から見下ろす。有村が浮かべたのは気持ち悪いくらいのも、ぬるりとした笑み。そして、叫ぶ。

「今日こそ死ねえあメガネえ！！ ヒャッハー！」

雑魚は飛翔していた。通人目がけ、飛びだして。ひらり。飛びかかる。ざぱーん。

「……おい、矢琴おー」

近くに低く、明かな不機嫌を現した声があるのに気付いて、僕ははっと、意識を戻した。

ソラがこちらに首を向けて、細めた眼でじーっと、ただじーっと、見つめてくる。

「なっ……」

僕は何故、言葉に詰まったのか。

「何だよ」

「……もういいわよ。ありがとう。でも、私は絶対泳げないんだか

ら」

彼女は、胴を支え持つ僕の手を振り払って、立ちあがった。

「泳げないままで、いいのか？」

「逆に聞くけど、何で矢琴はそんなになっても私に泳ぎを教えようとしてるの？」

言われて少し、自分の内面を見つめ直してみた。だけど、何も分からなかった。

どれだけ答えを振り絞っても、理由は『ただ暇つぶしをしたいから』。

それだけだった。それだけじゃないはずなのに。

「……何だつていいだろ」

「よ、よくないわよ。別にもう、水着が恥ずかしいから泳げないわけじゃないんでしょう？ もう、よくくん達と遊んでくればいいのに」

彼女もまた、様子がおかしかった。よく分からないけれど、僕と同じで何かがつつかえたような気持ちになっているんじゃないかと思えた。

「じゃあ、逆に逆に聞かせろよ。何でお前は泳ぐ練習をやめようとしたんだ？」

「……それは……練習なんてしても、どうせ泳げないから」

本当にそうなのか？ 尋ねてみたい気持ちだった。

「でも……あの、ありがとう。練習に付き合ってくれて……」

なんか、ハッキリとしないな。僕も、ソラも。

二人とも俯き加減で、さっきまで泳ぐ練習までしてたはずなのに、もう彼女の体に触れるなんて無理だなあって思うようになって。

訳が分からない。

矢先だった。

僕を覆うようにして、壁のような水が押し寄せてきた。足が滑り、転んでしまう。

ソラの攻撃だと気付いたのは、僕がしかと足を立て直した瞬間のことだ。

「ぶはっ、……何すんだよ！」

「あ、あれ？ ……さあ。うあ、な、何やってるん、だろ、私」

「僕がそんなこと知るか！」

「……ごめん」

「ホントに、良い度胸してるよお前は……」

「……何よ」

「仲良くしてられるのも今日だけだからな、明日からは選挙でボツコボコにしてやる」

「な、何それ。……何それ！ ふんっ！ 私が矢琴なんかに負けるわけないでしょ！？」

「ああそうかよ」

「絶対、よーくんだけは生徒会長にさせてやらないから！」

腕を組んだソラが、いつも通り、僕に顔を近づけて……来なかった。

つんと顔を逸らして、背後に飛び出す。水をかきわけて、進み……。

溺れていた。

「……大丈夫かよ」

彼女はコメントの付けようがない人間だなあと、思っんだ。

【第九話】空から文房具が降ってくる学校（前書き）

プール後の話にしては、何とも急な展開かもしれません。
今後、選挙関連の話よりもラブコメベースで進んでいく予定です。

【第九話】空から文房具が降ってくる学校

一夜明ければ相も変わらずの選挙風景。

校舎そのものが「わーわー」、声を上げているようだった。

騒がしい風景の中、僕は身を低くして女子棟を忍び歩いている。

有村の発案で、僕は再び女子制服を身に付けることとなった。せめて少しでも、女子達に敵と悟られにくくなるよう、だそうだ。

スカートの感触は、僕にとっての悪夢だ。また穿かされるとは…

…。

初葉にこの姿を目撃された際に受けた、蔑んだ眼差しは……忘れるに忘れられない。

今日の僕は囃、兼、スパイの役柄だ。石は有村に預けたまま。敵として発見されにくいであろう鈴音子さんと初葉の二人を連れ、ひたすらに女子棟を練り歩く。

通りかかった角の死角からふと、女子達の話し声が聞こえてきた。身を潜める。

しゃがみつつ、角から敵の様子でも伺おうかと考えた矢先

「お兄ちゃん？」

背中に降りかかるのは初葉の声だった。

「何だ？」

「お兄ちゃんは、やっぱりお姉ちゃんと闘うの？」

「……そうだな」

否定はできない。僕はいつか、彼女の姉を攻め、石を強奪しなけ

ればならない。

全ては、男子の地位向上のため。女子連中に、男子の存在を見改めさせるため。

……負けるわけにはいかない。例えそれが、初葉に姉を討たせる結果になったとしても。

「頑張つて！ お姉ちゃんのこと、ぶつ潰しちゃってね！」

えっ。

初葉は、胸の前で拳を作り、荒く鼻息。なんだよ、そのやる気。いったい初葉は、何を考えているんだ。結局は敵のスパイなのか、僕の味方なのか。

「そうです！ 奈乃沙なんかぶつ潰しちゃってください！」

更に初葉の背後でやる気に満ち満ちた人がいるから困ってしまう。目標が一致したらしい鈴音子さんと初葉が、顔を見合せて「ね」と、綺麗な結託を見せるのだった。

『あ、ソラさん！ いよいよ行くんですね！』

角の向こうから声が。……ソラ？

耳に入った名前に、意識を持つて行かれた。

仲間二人の談笑を他所に、僕は一人、死角からほんの少しだけ顔を覗かせてみる。

……やはり、本当にソラがいる。

統率も適度に、女子を十数人引き連れ、神妙な面持ち。緊とした雰囲気andra和らげるようとしているのか、楽しくなさげなもの、柔らかに笑みを浮かべていた。昨日プールで泳ぐ泳がないと騒いでい

た彼女とは、同一人物のようであって、別人にも感じられる。

『うん、みんな協力してくれてありがとう。もう私も覚悟したから……今日で……有村要也率いる男子達全員を、私たち全員で一氣に終わらせてみせる』

その言葉に息を止められた。

僕に対する宣告でもある。黄色腕章全員が、一氣に終わらせてくる？

ショックを受け入れた瞬間に、僕の頭が計算するのは数字だった。支持者数は、有村率いる赤腕章が三十一名。ソラ率いる黄色腕章は百八十六名。

奈乃沙先輩とお互い警戒しあつて、ソラが僕たちだけにかまけてくることはほぼ無いだろうな、と、確信していたはずだった。

やはり息が、詰まる。

「何やってるんですかー？ 矢琴君」

「ぐっ……」

僕の背中にのしかかれた。鈴音子さんが僕の上で、角を覗き込んでいる。

元気旺盛だなおい……。この前まで責任感じて落ち込んでた奴はこのどいつだ。

「私も」

「ぐっ……!!」

更に初葉の来襲である。更に上乘ってきたようだ。辛い。

掛かる体重は二人分、恐ろしき重さ。床を突いて細かく震えた僕の腕。

こんなことをしている場合じゃない、早く有村に……ソラの目的を報告しなければ。

「ソラ……お姉ちゃん？」

声をあげたのは、初葉だった。

ふっと背中が軽くなる、何かと思う前には、初葉が廊下に飛び出していた。

「久しぶり！ ソラお姉ちゃん！」

何のつもりだ。あまりにも堂々とした姿勢で、ソラの前に姿を現している。

地の底から湧き立つような、ザワリ、が廊下に波打った。

初葉はひたすらに笑顔で、ソラに向けて駆け行く。

声に呼ばれたソラがこちらを見る。僕がマズイとを感じるのは、至極当然だ。

初葉を引きもどす余裕も無く、鈴音子さんごと、身を死角に引いた。

『えっ、あれ？ ……もしかして……初葉、ちゃん？』
『うん！』

戸惑うソラに、頷く初葉。姿は見えずとも、想像できた。

ソラは初葉のことを知っている？ 二人は知り合い？ 分からなかった。何も。

気にはしてはられない。僕はやれることをやるだけだ。……それだけ頭に叩き込む。

「鈴音子さん。伝達、頼まれてくれるか？ ソラが攻めてくること

を有村に教えるんだ」

「……え？ あ、は、はい」

ここから有村の居る男子棟を目指すには、ソラ達女子が屯する廊下を突き抜けなければならない。詳しい事情は分からないが、初葉がソラの注意を引いている今がチャンスだ。

「急ぐぞ。遠まわりはしてられない。ソラのいる廊下を突っ切る」

「ちょ、ちよっと！」

鈴音子さんに心の準備期間を与えている暇はない。

敵の本隊はどこで有村達を狙っているか、分からないんだ。

彼女が伸ばした手を振りきって、僕は身を起こし、ソラに向かって駆けだした。

鈴音子さんには否が応、自分で状況に適合してもらうしかない。

「ソラ！ そこだけよ！」

呼べば、廊下の誰もが僕を見た。

初葉だけは、ソラの目前で後ろ手に腕を組み、笑っているばかり。

「や、矢琴……！？ え？ え？」

ソラの混乱を、僕の思考は一直線に貫くばかり。

「鈴音子さん、行け！」

「は、はい！」

次いで飛び出た鈴音子さんと一緒に、僕は走った。

見渡せる廊下には点々と、僕の敵である女子達。混乱に乗じて駆

け抜けてみせる。

僕が道を切り開くから、せめて鈴音子さんだけでも、と。

ソラは取り巻きの女子にすぐかくまわれた。石をここで奪えるチャンスは消えた。

いや、元より、そんな贅沢は無理か。

僕は敵に迫って、ただ迫って。

「どいてくれ！」

駆け抜けるのは鈴音子さんに限らず、僕でもいい。

僕を捕まえようと伸ばされた手を、かわした。走る、右斜め前方に踏みだす、上半身をかがめる、それだけで、僕を狙う腕はすっと空を切った。

僕は走る、鈴音子さんも走る。敵の只中をだ。

「きゃっ！」

ちらりと振り向いた右隣では、鈴音子さんが足をとられ、転んでいた。

助けたい、助けなければ、激烈な思いを殺して、足を止めはしなかった。叫ぶ。

「初葉！！」

「えっ？」

「お前も走れ！ 有村に伝えるんだ！ 黄色腕章が攻めてくるんだってな！」

視界の端で、ソラが、きっと僕をもどかしそうに睨んでいるのは確認できた。

矢琴、と、苛立ちまぎれに声をあげていることも。

手を伸ばせば、初葉の左手を掴むことができた。手を引いて、走る。

僕は全部、突き抜けた。

僕に対する追っ手は数少なかった。振り切ることはそう難しくも無い。

これだけ大胆な行動を起こしているのだ、僕が石を持っていないくらい、ばれてる。

初葉とは別行動をとった。今頃、渡り廊下を伝って、有村のもとへ事実を伝達に向かっているはずだ。捕獲された鈴音子さんの安否は分からない。

初葉が有村の元に向かったのなら、僕はまた、別の事をすべきだと思い立った。

奈乃沙先輩に、助けを求めろんだ。奈乃沙先輩を、探すんだ。

その旨は初葉に伝えておいたから、奈乃沙先輩と遭遇したくないであろう彼女は、伝達の仕事さえ終えれば、先に僕の家へと帰っていることだろう。

「……矢琴？」

通りかかった階段の上層踊り場から、声が掛かってきた。男子の

声だ。

少なからず希望が生まれた。僕は笑顔になって振り向く

「通人か？」

説得はそう難航したわけでもなく、僕は奈乃沙先輩の元に連れられることとなった。

隠れ家に連れられるのに、目隠しの類は必要ないらしい。なんと威風堂々としたことか。

「……何？」

そして今。僕は、奈乃沙さんを目の前にしていた。

歩くが末に辿り着いた部屋、体育館倉庫。

親衛隊と思しき女子達が、僕に手厳しい視線をプレゼントしてくる。

どうやら通人も男子であるが故、女子連中にはよく思われていないようだ。

彼と女子達の間にある棘のような空気の壁は、見ているに耐えがたいものがあつた。棘は通人にのみ突き刺さっている。

「先輩」

僕は、部屋の奥に語りかけた。
先輩は倉庫一番奥の飛び箱に、しとやか、の一言が具現化したような座り方。

視界のピントをずらせば、細やかなホコリが空気中に流れるのを感じる。

彼女はホコリを越して、僕を見つめていた。
本当にただ、僕を見ていた。じっと見ていた。ほんの少し、赤くなつた。

「キミ……スカート、履いてきたんだ」
「!？」

しまったそうだった。

「私と付き合つて」

何だよその急な話の流れ!!

「僕は、スカート姿を見せに来たんじゃありません! ちゃんとした用件があつて……!」

「……言わなくていい。承諾するから」

なんだと……!?!? 僕はまだ事態の全容すら語っていないというのに、承諾された。

やはりこの人は侮れない……。これだけの支持者を集める人望の成り立ちについては、成績の良さと頭の回転も一助となっているの
だろうから

「確かにそろそろ、結婚しよう」

そんなことは無かったようだ。

「アイラブユー」

アイでもラブでもユーでも無いよ、人の話を聞けよ！

彼女の隣に立つ通人は、地に四肢をついて静かに絶望を吐きだしているようだった。

事情をかいつまんで説明した。

とにかく、助けてくれと。懇願する形で。

「……なるほど、用件は分かった。どうします奈乃沙さ

『お前は黙ってるメガネ』

『奈乃沙さんに喋りかけるなー！』

通人と親衛隊の騒がしげなやり取りを他所に、僕は一対一で奈乃沙さんと向き合う。

彼女は表情一つ変えず、ただ僕を見つめ、僕の語る話を見つめ、清楚に閉じた足を微塵も動かさない。

「……構わない」

「助けて、くれるんですか？」

「潤んだ目遣いで私を見ないで。キュンとするから」

……。

彼女たちにとっても悪い情報提供ではなかったはずだ。助けてくれるのは、その礼と言ってもいいだろう。黄色腕章の全戦力が僕たちに向いている、奈乃沙さんにとってこの状況は、黄色腕章を奇襲し、潰す

絶好の好機。

「ただ、条件が一つある」

ずっと彼女が立てた指に対して、僕は赤トンボのようだった。その指に視線を止めた。

通人を縛り上げた女子達もふいと、先輩を見つめる。

「大好きって言って」

駆け足で帰れば、決戦には間にあった。

初葉はきちんと有村への伝達を済ましていたらしい。到着したころにはもう、赤腕章の勇士たちは、中庭に立ち並んでいる。

と言っても、つまりは僕のクラスメイトなわけだが。

『任せろ、お前らは俺たちが守ってみせる』

『俺らの真の実力、見せてやろうぜ！』

取り決めもしていないのに、皆、妙な陣形に僕と有村を囲んで……勇ましきばかりは舐められたものではなかった。

僕は有村と、二人。立ちながら、収まらない動悸に手を添え、ひたすら思う。

死ぬかと思った。

本当に大好きと言ってみたら親衛隊は取り乱し僕を襲おうとするわ、奈乃沙先輩は妙な行動を起こすわで……。

「どうした、顔が赤いぞ？」

有村に言われたから、自分の顔を殴った。叩いた。つねった。地面に打ち付けた。

頭から離れない光景を、僕は必死に振り払おうと、何かしたかった。

まさか大好きって言うてみただけで、そんな嘘の言葉だけで、頬にキス……されるとは。

口でないのが幸いだ。初めてがあれほど唐突なものならば、僕は今すぐ首をつって死ぬ。

「本当にどうした？ ついに頭がおかしくなったのか矢琴。元から

かもしれないが」

「お、お前こそ何でこんな時に落ち着いてられるんだ！」

バサバサと、スカートの汚れを落しながら立ち上がった。ひどく滑稽だと思う。顔が赤いと思う。

こんな時に……何を考えているんだ僕は。宙に、ため息と、腐った思考を一つに吹き出した。

中庭の対極には、黄色腕章の女子達が、数人。動けずにこちらをただ、見つめている。

いつ本隊がやってくるとも知れない。せめて時間の稼げそうな中庭で、僕たちは時を待つばかりだ。

少し思う。

ここで勝ち残ったとしても、これ以上の戦力を誇る奈乃沙先輩に勝つことができるのか。

そもそも有村の独断が始まった、行き当たりばったりの、気持ちだけが先走った戦いだ。

「……矢琴！」

中庭に配置された、花壇。中央には大きめの池。その全てを見越して、一人、現れた。

ソラだった。中庭に降りる小さな階段で、苦しそうに僕の名前を呼んでいた。相当走ったらしい。

前髪を留めたピンはともかくとして、珍しく髪をぼさりと振り乱している。

「来たな……」

有村以外の男子全員が、一言も発さなかった。

「絶対、絶対男子には勝たせないんだから！ 決めたのよ！ 何をしても絶対！」

彼女が前のめりに声を張り上げた直後、空から、状況に見合わない異音。

中庭を包む校舎の上階、全ての窓が開かれていた。顔をのぞかせる女子、ざわり、騒ぐ男子。

「絶対駄目なんだから！！ 絶対絶対絶対！！」

顔を真っ赤にして、ソラが叫ぶ。感情の丈がキロメートル単位になりそうな、とても、必死な声。

何があったんだ、彼女は。

疑問に思う前に、「わあああ！！」一人の悲鳴と共に、仲間の全員がバラバラと動き出す。

カチリ、パチリ。

音を立てて、何かが地面にバウンドしていた。

上階の女子たちが、えっさはいさ、僕たちに向けて何かを投げつけてきていた。

また地面に何かが落ちる。カチリ、これは鉛筆。

パチリ、これは定規。

バサリ、これは教科書。

ドガン、これは勉強机。

『うわあああ！！ 死ぬううう！！』

『ありかよそんなの！ 助けて！ 誰かああああ！！』

まさに蜘蛛の子をく。僕と有村を囲み、強い決意に僕達を守り続けていた壁は、バラバラ。

「ちょ、ちよつと誰か！ 誰か助けて！」

身をかがめて走った、凶器の雨が怖かった。

大丈夫だ……ここは仲間を信用しよう……！ きつと皆、僕と有村を守ってくれるはずだ！

「誰か助けて！」

感情のまま声をあげる。

『知るかああああ！！』

駄目だコイツら！

僕は走り逃げ惑う。前方の地面に、突然コンパスが数本突き立ち、行く手を遮られた。

もう、しゃがんで目を瞑るしかなかった。

しかしここまで過激な攻撃、良心の範囲で許されると思っているのか。

憤りを長く心にとどめるだけの余裕もなく、僕はただ、時を待つ。次第に、降り注ぐものが少なく、少なく。

完全に落ち着いたのを見計らって、ちらりと、目を開けて見た。周囲を見回せば、全員、何とか無事であるようだ。良かった。

きつと有村だって無事

「う……あ……矢……こ……」

死にかけてる！！

地面にうつ伏せで這いつくばり、こちらに手を伸ばす有村はまるでゾンビ、その類。絶対その類。

思わずとも駆け寄って、奴の体を思いきり蹴り転がし、仰向けに寝かせた。

「有村！ 何で！ 大丈夫か、気をしっかり持って！」

「……無理……だ……死ぬ……だ」

有村の声はかすれ、所々に何と言っているかの判別もつかない。方言みたいになってた。

体を揺らしても、必死にすがっても、奴の状態が回復することはい向に有り得ない。

「俺は……おっばい」

肝心なところで何言ってるか分からない！ お前はおっばいじゃない！

「有村！ 有村！」

「この石を……もっ……もっ……はうんいええい……」

何言ってるか全然分からない！ 奴は力なく震えた手で胸元から何かを取り出すと、俺に手渡す。

石だ、琥珀色の丸い石。僕達が守りきるべき、それを託された。

『有村……力及ばず、守りきれなくてすまない』

集って来る男子諸君黙れ。帰れ、今すぐ帰れ。

「よ、よーくん……」

遠くで呟きが聞こえた気がした。ソラの声で。
ふと思ひ出す、顔を振り上げれば、彼女はまだそこに居た。
何て事をしてくれたんだ……！　なんか有村死にそうじゃないか！
幼馴染だからと、どうとも許せる問題じゃない。

「ソラ……！」

有村の亡骸を踏みつつ、叫んだ。感情のままに。

「ひっ……」

「お前、何て事してるんだよ！」

身をビクリと震わせた彼女なんて、初めて見た。僕は止まらなかった。

立ちあがって、手を握って、ただ、それだけ。対しソラは一度身を引きそうになったものの、すぐに平常の体勢で。

「ば、奈乃沙先輩、来るんでしょ？　先輩なら絶対、矢琴のピンチは救おうとするから」

「……何を」

「そうなたら私は絶対負けるから！　支持してくれる皆と一緒に決めたの！　生徒会長になることも諦めた。でもその代わり、絶対矢琴達だけは倒すって！」

腹の底からずっと疑問が全力で駆けのぼってきた。訳が分からない。

僕たちだけは絶対倒す？　彼女は何を

「覚悟しなさい！」

指さされた、ソラの方から、途端に聞きなれた地響き、足音、瞬時に分かった。

女子達が迫ってきている。

恐らくは、ソラと同色の腕章達が。僕の持つ石を奪い取るためにだ。

奪い取られれば待つのは、僕が望まぬ未来ばかり。男子が望まぬ未来ばかり。

『おいおい来るぞ』

『……よし、行くか』

ばらばらに各々の向くがままだった男子の仲間達が、足音の方へと歩み出す。

横一列に並び、一人はこちらを振り向き、ここは任せろと。

『これくらいは俺達にもやれるさ。奈乃沙先輩達が来るまで、粘るだけだしな』

さっきまでバカみたいだった癖に……妙に頼もしい、じゃないか。スカートの裾を、きゅっと掴む僕がいることに、今気づいた。

「矢琴、覚悟しなさい！」

ソラの言葉。同時、ついに来た。彼女の背後からぞろりと現れた女子、女子、女子。

中庭の男女における人口比率が続々と移り変わっていく。もう女子は僕たち男子と同じだけの数、そしてそれ以上に、時がたてば、僕達の二倍に。

ただ多くの人々が、僕に向けて一直線。

『みんな迎え撃つぞおおお!!』
『おお!!』

立ち向かう男子達。中庭中央の池を挟んで二手に別れ、威勢もばつちりにかけた。した。

対し、尚も迫り来る女子、壮観である。

どうにもならぬような物量が、視界で感じる感じさせられる。

呆然と、僕はただ見つめていた。それでも仲間が頼もすぎて、逃げるという選択肢が頭に思い浮かばなかった。

敵が来た。迎え撃つと、構える男子。縮まる距離、圧倒的な物量。

そして今、衝突。大地を震わすような突貫。衝撃、僕は戦いを見守って

『うあああ!!』

『くつもう駄目だ! おいお前ら! 俺は逃げるから頑張ってる!』

『何それお前!』

『無理だ死ぬううう!!』

一瞬で踏み倒された。

女子達は、ペースの一つも崩すことなく、僕に向かって駆け続ける。

踏みつぶされた仲間達は散り散りに逃げるか、女子に捕縛されているか。

「……………えっ?」

仲間弱い。ヤバい死ぬ。女子がこっちに。

その経過で、大軍が途中の花壇を大きく二手に分かれている様は、川の水が流動しているようにも思えた。

女子が、うん。

大量の女子が、これはハーレムじゃないか？　すごく幸せなことじゃないか？　思考が痺れる中にも、脳の芯で感じ取っていた。目の前の危機に、心臓が浮いたような感覚を。

「感謝しろ」

それは不意にだった。押し付けるような、なのに澄んだ男性の声が、上階から響く。

見上げれば、上階から僕たちに攻撃を仕掛けていた女子達は、一切の漏れもなく、青腕章の生徒達に、捕獲されている。

「これで上の女子は全員捕まえた。まあ僕にとってはこの程度、朝飯前だな」

声が聞こえた方向に目を向ければメガネがキラリ以下略。

「……っ、ついに来たわね。先輩の支持者たちが……！」

固い物を噛み潰すかのような顔で、遠くのソラが顔を歪めていた。しかし、その目から固い意志は消えたように思えない。

僕はおぼろげな勝利を得たのかもしれない。

背後の校舎内から、決して急がない足音が迫ってくる。きっと、助けた。

目前に迫り来る黄色腕章に背を向ける形で、僕は逃げ出した。中庭の出口に向け走り、勢い余る形で校舎に体をつっ込んだ。校舎内で視界を意識して張り巡らせる。その、広い広い廊下には

……。

「来た」

奈乃沙さんが先頭。

廊下を埋め尽くさんばかりに集まった、個性も豊かな女子の集まり。

例外も無くそれは二の腕に青色の腕章を飾り付けていた。

『負けないで矢琴君！』

『男子を助けるのは本意じゃないけど、奈乃沙さんが言うから仕方なく……』

口々に告げては、廊下を歩む女子の隊列は、徐々に進むべく速度を上昇させていった。

たくさんの人たちが、僕の隣を通り過ぎる。

「……これで約束は、守ったから。ここでソラちゃんを討ち取れば、次からはどう足掻いてもキミは敵」

奈乃沙先輩だけが通り過ぎざまに足を止め、顔をこちらに向けてくる。

「た、助かりました」

「可愛い」

「！？」

「そして……一つ、ずっと気になっていたのだけれど」

こちらを見つめる先輩の瞳は、僕が知るどの黒より、胸を突く黒。にわかには信じがたいほどの真摯さ、奥行。

直前まで人の事を可愛いなどと呟き告げていたとは思えないような、だ。

「初葉が、多分だけれど、キミの家に行ってると思う」

吸い込んだ空気を途中で止めた。彼女は変わらず、僕を見つめている。

どうということだよ。何故ばれている。初葉が家出した背景には一体何があるというのだ。

初葉は何を考えて、どうして僕の家に戻る。そして先輩は何故気付いている。

青腕章の工作員？ それともただの

「初葉が家出した原因は、ただの喧嘩。本当に仕方のない理由。気にしないで」

「……どういことですか？」

「私が話すには、それは恥ずかしい内容だから」

真摯な顔に赤みがさす。

「もしキミの家に妹が居るなら、帰って来るように伝えてほしいの。多分あの子、引っ込みがつかなくなってるだけなの」

僕は一体、姉妹のどちらを信じればいい。

僕達を圧倒的な捻り潰した黄色腕章が、更に圧倒的な物量で捻り潰されていく。

多少の危険を覚悟して、僕は自ら戦場に向かった。僕がやるべきことは、残っていた。

捕まった彼女を、助けださなければ。僕のせいで捕まったんだ、僕が助けるべきなんだ。

「　　鈴音子さん！」

「あ、や、矢琴君ですか？」

あちらこちらで怒号やら悲鳴やら、足音やらが飛び交うこの場で、僕は足を止めた。

縄に縛られ、ぺたりと中庭の隅にうずくまっていた彼女を、僕は見つけた。

ソラの支持者に、ここまで連れてこられたのだろう。予想通り、そして好都合だ。

「悪かったよ、本当に……ごめん。僕は鈴音子さんを置き去りにして……」

「大丈夫ですよ。しかし捕まっちゃうなんて、私としたことが不覚ですよ」

彼女の背に回って、縄を解きながらのやり取りだった。

縄が太い上に、結び目が固いせいでどうも手先の不器用な僕には難しい。

「ごめんなさい、こんな手間をかけさせちゃって……」

肩越しに振り返って僕を見る彼女は、遠慮がちに笑んでいた。哀愁があった。

「当然だろ。仲間だよ、僕達は」

「仲間……ですか？ ……ありがとうございます」

まるで音楽をのんびりと楽しむかのように、目を細めている。

「矢琴君は、どうして怒らないんですか？ 私、こんなドジなのに」「どうしたんだよ、らしくない。いつもみたいに私が一番すごいとか、言わないのか？」

「う、うん、私は最強ですけど」

縄が解けると同時に、軽快な声、軽快な跳躍、彼女は立ちあがった。

闘いに少しでも助力しようと言う気でもあるのか、鈴音子さんは戦場の只中に向けて、軽く走りだした。

途中、振りかえってくる。ものすごく心を温めるような表情を、満面に浮かべて。

「ありがとうございます」

これほど綺麗なお礼を言われるだけのことを、僕はしていたのだろうか。

黄色腕章の女子達は次々と捕縛され、中庭の勢力図はもはや決していた。

「追い詰めたぞソラ！」

僕が声を張り上げるまでもなく、状況は明らかだった。追い詰められたソラを助けに向かえる余裕は、もはや黄色腕章に残されていない。

中庭のいたるところで繰り広げられる捕り物劇、足止め合いを背景にして、僕は十数人の青腕章と共に彼女を追い詰める。

ソラは足を止めるしかなかった。池の周囲どの方向に逃げようとも、青い腕章、ところどころに赤い腕章。

「……そ、そんなあ！」

「覚悟しろよお前！」

「やだあ！」

「やだじゃないだろ覚悟しろ！」

「……やだ」

今にも泣きそうだった。女子らしい、本当に女の子らしい怯え方だった。

胸元に手を置き、今にも泣きそうになって、後ずさって。ソラじゃないみたいな。

休み時間が終了するまでの猶予は少ない、もう容赦なく、奪うだ

けだ。

「覚悟しろよソラ、卑怯な手を使いやがって。有村死にそうになつてんだぞ！」

「あ、あれは……ちよつとくらい怪我させるのも承知の上でやったことなの!」

「承知の上でやるなよ！ 尚更駄目だろ！」

「知らないわよばーか！　矢琴のばーか！　ばかばかばかばか

「！！」

途中に息継ぎを挟んでまで『ばか』の言葉を繰り返すソラ。聞く耳持たずらしい。

いい加減にしろ、少し苛立って追いつめれば、ばかの嵐は止まった。

「諦めろ。もうお前の負けだ」

「……うん」

恨みがましい感情を込めているらしい視線を僕に向けつつ、ソラは後ずさっていく。

後ずさっていく。

後ずさって……背後が池であることに、彼女は気付いているのだろつか。

鯉を飼育するための、お世辞にも綺麗とはいえない水たまり。藻の類で水面が緑色に染まっているように見える。

弱々しく、震えるように下がる彼女の足は次第に足場のない池にまで。

退き、退き、退き。宙に投げだされた足を置く地面は

「きゃあつ!？」

ふわりと、背中から落ちて行った。大きな音を立てて、噴水のよ
うな飛沫があがる。

池に全身を飛びこませた彼女は……。

「や、やだ！　ぶわあやだあ！　溺れ……っ。誰か助けっ……！」

時折水を口に含んだ不安定な口調で、手足をバシャリバシャリと
……誰も助けに行くことはない。僕もだ。

今までのイメージで言えば、目の前で溺れているソラという少女
は……運動も勉強も人並み以上にこなせた、リーダーシップのある
秀才であつた。

幼馴染である僕が思ふのだ、彼女はこんなにバカだった……
と。

人物像の衝撃的な崩壊である。

「そらー」

力を抜いた声で、呼びかけてみる。

「誰か助けてえ！」

「それぐらい足つくだろうがお前」

「……え？」

告げた瞬間、彼女がバタつかせていた手足を止めた。

少しだけ、水底に向けて彼女の体がストンと落ちた。本当にただ、
ストン、だ。

彼女の顔が浸かるまでもなく、落下は止まる。彼女の座高で顔に
浸かるまでの水深も、この池は持っていないのだ。ソラの奴、何気
に浮き上がっていたわけである。

きょとんと、パチクリ開いた目が、僕をじっと見ていた。ただただ呆けた表情で。

「…………え？」

こつち見るなよ。

続いて彼女が周囲を見回せば……。ああ、災難だな。

全方位に池を取り囲む大量の女子、ちよつと男子。

彼女はぐるりと、二回も低速で首をあちこちに回して、再び僕を見る。

沈黙。結んだ唇を、震わせながら、ソラはやはり僕を見る。

ソラの血流は例えるなら、上昇気流のようになっているのではないか。

次の瞬間には、顔がボン。と赤くなった。僕を見つめていた。そして、表情が緩ませる。

「うわはあ…………」

ソラは力なく、背中から池の中に倒れこ……。気絶しやがった！上半身が全部沈んだ！

「おい大丈夫か！」

水の中からぽつぽつと上がってくる彼女の気泡、辺りは一気に騒がしくなる。

皆が、一斉にソラの救出に動き出した。

【第十話】はびねすつつつつッ！（前書き）

分量的には、残り5分の1ほどです。

クライマックス前の日常！ やっぱり、自由なシーンは楽しいのです。

【第十話】はびねすつつつつッ！

もちろん、観念したソラから石を受け取った。

これで彼女に、勝利したんだ。

選挙を終えることでようやく足を通せた裾の感覚は、妙な落ち着きと、妙な自信の素。

ズボンを履いたのだ。

本当にこれで、ソラを倒すことができたんだ。

そうして未来に向けて湧く気持ちは……光るものか、黒いものか、よく分からないけれど。

その後休み時間は青腕章から逃げ惑う形で何とかやり過ごす。学校で過ごすべく時は全て過去となる。

幾多の人間が僕と同じ方向に歩んでいるのか。帰路を進むために、誰もが僕を追い越したり、追い越されたり。走りざまに背中を叩いてくる男子も居た、楽しそうだから、僕も笑って手を振った。

僕は、校門で足を止める。

一人の女子が面白くなさそうに、門柱に背中を寄り掛けているのが見えた。

「……約束通り、待ったけど」

やはり面白くなさそうに、目を伏せて。彼女は僕に、言葉を吐き付けてきた。

薄い唇を尖らせて、やたら白い肌に表情をいっぱい浮かべて。そんなソラをここに待たせたのは、僕だ。

「積もる話もあるだろ。今日のお前についてとか、今までの高校生活全部についてとか」

僕は、足を止めた。今ならソラと話せる。昔みたいに、男女の隔たりなど感じずに。

選挙というイベントは、我が校に通う男女同士の距離を縮めている気がした。

「だからたまには、一緒に帰らないか？ 僕の家、来いよ」

僕って結構格好いい、男子になれてるんじゃないか？

「へ、部屋に！？ ……部屋……って」

「何驚いてるんだよ、昔はよく実家にも遊びに来ただろ」

「私が矢琴と……二人きりで同じ部屋に……」

何を意識しているんだか。とにかくもって、二人きりではないことだけは確かなのだ。

僕がソラに勝利したことで、嬉しさに打ち震えた理由。

それは、ソラの公約、『僕を女子棟に組み込む』という件が、打ち消しになったこと。

「……私、負けちゃったあ」

夕刻の陽ざしありのままの色に、彼女の肌は染まっていた。そんな横顔。

「あんなに卑怯な手を使っても、結局駄目だった。こんなはずじゃなかったのに」

「努力は買ってやるよ、頑張ったさお前は」

「……なんか、気に喰わない言い方」

見なれた帰り道、彼女にとっても、昔、僕や有村と一緒によく遊んだ道だと思う。

さすがに負けという気持ちに押されてか、彼女の声音にいつものキツイ成分は含まれちゃいない。

しばらく見つめていると、彼女もこっちを見やってきて。ちょっと笑った。

「まあいいけど、どうせ矢琴は先輩たちにボッコボコの簀巻きにされて東京湾にでも沈められるんだし」

「……あんまり嘗めるなよ、僕たちだってやれるさ」

「はいはい」

恐らく勝負は一気に動き出すだろう。三つ巴が突然の一对一だ。数の少ない僕たちに対して、明日、先輩が総力戦をしかけてくることは必至である。

……そういえば。

何故ソラは、あれほど必死に僕達を攻撃してきたのだろう。

思えば僕を女子棟に組み込む、だなんて公約も不自然だ。疑問は膨れ上がって解消されることが無い。

ちよつと、尋ねてみ

「そついえば矢琴？」

彼女の方が、口を開くのは早かった。

「な、何だよ」

「初葉ちゃん、だよ。私に選挙中話しかけてきた子」

「え？」

「最近学校に出没してるのは聞いてたけど、もしかして矢琴の味方なの？」

初葉……。

初葉は選挙後、すぐに帰ったと聞いている、奈乃沙先輩と顔を合わせるのが嫌なのだろう。

そついえばそんなこともあったか、気にならないと言えばウソになる。

「知り合いだったのか？ お前ら」

「……知り合いだったかって……あれ。矢琴覚えてないの？ 私達が幼稚園くらいの頃かなあ」

で。

「おかえりお兄ちゃん」

相も変わらず、彼女は一日一日を欠かさず玄関で僕を出迎えてくれる。

「……ただ、いま」

ソラの話を書く限りには、だ。

僕、ソラ、有村の三馬鹿が幼き頃、よく一緒になって遊んだ年下の女の子が……この、ちびっ子らしい。

にわかには信じがたい。同時期の記憶は結構色濃く覚えているつもりだったがな、幼児のころから僕は女の子だったし、ソラは真面目だったし、有村は変態だった。

……自分の記憶力を疑うしかない。ソラが嘘をつく理由などないからだ。

僕はローファーを小さな動作で脱ぎすて、玄関を振りかえる。続くソラを迎えた。

「……本当だ、矢琴の家に初葉ちゃんがいる」

ひょこりと、開けたドアの影からソラが顔を見せた。

酸っぱそうに口を曲げて、何とも恥ずかしそうに。

「ソラお姉ちゃん？」

「うん、あの、学校でちょっと話して以来だね。初葉ちゃん」

ソラの口調が気持ち悪い。優しげなお姉ちゃんの口調だ、なんて似合わない。

彼女はせかせかと敷居をまたぐ。靴を丁寧に脱ぎ落とし、更に手で揃えてみせた。

「矢琴、これどういう事情なの？　なんで初葉ちゃんが……あ、鞆ここに置くけど」

「初葉に聞けよ。初葉が急におしかけて来ただけなんだから」

二人揃って初葉の顔を見つめてみるも、このちびっ子ときたら、もどかしい表情のまま硬直するばかり。

拳句の果てに、いっっをしてきた。うわぁ。

とてもじゃないが、答えてくれるようには思えない。

僕は制服を脱ぐこともなく、初葉と共に部屋中央の円卓を囲んで座った。

ソラー人だけが、立ち尽くしている。

人の家だからと遠慮しているのか、落ち着きなく部屋の角に立ち、手を組んでいた。

「座れよ」

円卓近くの床を叩いたら、そわそわと、何と正座で座り込んで見せやがった。

呆れた話だ。

「ソラお姉ちゃん、本当に、こうやって話すの、久しぶりだね」

「うん、そうね。初葉ちゃんが引越したのは、私たちが幼稚園卒園するよりも前だったから、相当昔」

女子達二人の会話は、満開で咲き誇っているらしい。ソラが僕を氣遣っているのか、ちらりちらりと僕を見るのだけれど、初葉の勢いが止まらないから……僕が入り込む隙は無い。

いろいろな話を、横から聞いた。そういえばと、初葉の事も色々思い出せた。

彼女と共に遊んだのは、ほんのひと時だ。

仲良くなつて間もなく、彼女は一度引越した。そして奈乃沙先輩と共に帰ってきたのが……ここ一年だが、二年前の話なのだろう。そして僕の家におしかけてきた。

「それにしても……」

ソラが僕に向けて正座のまま、若干前のめりに話しかけてくる。

「矢琴も、よく泊めたわね。こう言っちゃアレだけど……その、突然押し掛けてきた女の子を」

僕が答える間もなく、初葉が代理の答えを差し挟んでくれた。

「え？ あ、うん、お兄ちゃんならね」

初葉の奴、笑顔で。

「初葉のこと覚えてくれてると思ったんだ。だから、きっと泊めてくれるかなって」

会話の花が一瞬枯れる。

沈黙。

初葉は、僕が自分の事を覚えているのだと、ずっと思い込んでいたらしい。

時が止まる。

ソラだけが不思議そうに、ちょびりと首を傾げていた。

「……？ でも矢琴、昔に初葉ちゃんと遊んだ事、何も覚えてなかったんでしょ？」

「……へ？」

また止まった。

今度は僕だけが止まった空間の中、動きだした。

さて、そろそろ上着だけでも制服を脱がなければな。立ち上がって窓際に逃げた。

「お兄ちゃん……？ え？ 私の事、全然覚えて無かったの？ 有村もだよな」

初葉が、すくつ、立ちあがり、追いかけてくる！

トコトコトコトコ、小刻みの歩みで、僕の目の前に。
対する僕は、部屋の奥でブレザーを脱ごうと、ボタンにあくせく
苦戦しているばかり。

「死んじゃえ」

フン、その程度の攻撃。初葉と共に暮らして居れば、適応するの
も容易い事だ。

「死んじゃえー！」

語調を強く訴えてくるも、僕は動じずにブレザーを脱ぎ捨てる。
覚えて無かったのは確かに、悪く思うさ。本当に悪く思う。
ただどここまで一緒に暮らして来て覚えて無かったなんて、そん
な才ちに謝るのはどうも気恥かしくて。

「怒るよ！ 覚えてくれてると思ってたのに……！」

初葉が怒ってる。本気で怒ったほうが怖くないってどういうこと
だ。

静かにソラへ、視線で助けを求めてみても……冷たいアイコンタ
クトを返されるだけだった。
助けてくれる様子はない。

困った。……やっぱり、謝るしかないってのか。謝るしか……。

「もういいよ！ アレばらすから」
「？」

そう言っって初葉が手を掛けたのは、我が部屋唯一の、小さな……

クローゼット!?

背中に針がたくさん突き立ったような心地。焦り。駄目だ初葉、それを開けちゃ。

中には青春謳歌中の男子的な秘宝がざくりざくり。顔が熱くなる。このまま顔から火でも出て初葉を攻撃できないだろうか。

しかし何で? ほんと何で!? 初葉はアレに気付いていたのか? ちくしょう人が留守の間にクローゼット見やがったのか!

絶対、絶対だ。見られるのは恥ずかしい。見られるわけには……いらない。

「初葉ちゃん、それ何?」

ソラの奴興味深々だし! 帰れ!

「分かった! ごめん! ごめんなさい! 初葉、許して!」

「もう遅いからね」

「やめ」

初葉の両手が、クローゼットに大口を開かせた。

低く鳴るスライド音がスツとスマートになる度、露わになるクローゼット内部。

中に整列、安置されていたのは……小さな本棚だ。

「……や、矢琴?」

ソラの奴、顔をひきつらせている。恐る恐るクローゼットに歩み寄り、手を伸ばしていた。

「ダメだ! ダメだソラ! 見るな! 見ちゃダメ!」

「お兄ちゃんは黙ってて!」

「初葉邪魔するな！！ 離せ、離せええええ！！」

初葉に制されて、動けない。

「……どうしたの？ 矢琴」

ソラの動きは、僕の言う事などに足を引かれることもなかった。
むしろ僕の不審さが彼女の好奇心をくすぐったようで……。

「やめろ、ソラやめろって！ 見たら呪われるぞ！ 呪われるぞバ
ーカ！」

「の、呪われるの……？」

「ううん！ それよりお姉ちゃん早く……！ 暴れててこれ以上抑
えてられないの！」

「……うん」

「やめろ、ソラ、ソラあ！！」

僕は無力だ。

そつと、彼女は棚からひと際目立つ身長、本を取り上げた。
表紙を見つめている。

血の気が引くという言葉が、どれだけの射た言葉なのか、僕は
この時知った。

彼女が見つめているのは、妙に洒落の効いた題名の、十八禁雑誌。

「……え」

ソラの顔も、青ざめていた。

本を落としていた。

次いで赤くなって、顔を押さえて、ふああと声をあげて、僕を見
て。

「あ……ああ……！」

指さしている。プルプルと震えた指先は、確実に僕を向いていて……。

「や、やや矢琴……！？ 矢琴ってこういうあれ、あの」

言葉に詰まって。

「ば、ばか！」

それしか言えなくなっているようだった。力が抜ける、抜けて仕方が無い。

初葉の奴、僕の……コレクションを見つけていたとは……。

「ばかー！！！」

一度暴露された事実を消すなんて不可能な訳で、しかも慌てたソラは止まらない。

どうしたことやら、次々と露呈される僕の性癖。保管していた宝

は、二、三冊。

クローゼットの中身はエロ本の保管所以前に、単なる本棚としても利用しているから、異常に疾しい物を見られた、というわけでもない。

そうでも思わなければ、この部屋に居座ってられない。

「……矢琴、これは？」

ソラは新たな一冊を取り出して、パラパラとページをめくってみせる。

「ラノベも知らないのか？ 今どき」

エロ本が露見した時の気分は抜けていないが、できるだけ不機嫌に見えるよう努めた。

「へえー、なんか、絵が可愛い……」

興味深々と言った様子で、ソラは適当にページを流していた。

「！？ す、すごく絵が可愛いこれ！ ね、ねえ矢琴！」

「なに興奮してるんだお前は。読むよりも先に挿絵を見るなよ」

「だってこれ……可愛い」

「はいはい、分かった分かった」

拗ねたように円卓で、目をチラつかせるしかなかった。

ソラはともかく、初葉は勝ち誇った笑みでそんな僕を見つめてくるし。

何なんだよこの部屋は、地獄かよ。爆発してしまえばいいのに。

「ネ、ネコミミ?」

彼女が口にした通り、それはヒロインがネコミミのシリーズ。

「や、矢琴……こういうその、その！ ネコミミが好きなの!?!」
「バカ違う！ 僕は別にそんな趣向があるとかじゃなくて!」

とは一概に言い切れなくて、反論を述べる口が重くなった。

それは間接的にYESを返しているのと同じことで、事実を受け止めたソラは顔から体を硬直させているわけで。

きゅいと唇を縛る彼女の顔が、今日何度目だろう、真っ赤に染まる。

「や、やややっぱり、ネネネ、ネコミミが好きなの?」

「好きなものって……」

「好きなのですか!?!」

「なんだよその敬語」

「その……うん、知らない！ 何でもない！ この本貸して!」

「ソラお姉ちゃんの言うことならお安いご用だよ！ 全然持つてっ
「お前が言っなよ」

ソラの奴、選挙が終わってから本当にソラらしくない。静かで、これじゃ、ただのお姉さんだ。

ライトノベルの表紙を見つめたまま、心ここに非ずと言った様子でばかりと口を開けていた。

時折、ふわー、とか、うん、とか呟きながら。きつと疲れてるんだろう。

今日の彼女は、多分、我が校で一番の働き者だった。

「あ」

いきなりだ。僕が声をあげるほどに、脳裏を突く記憶があった。ふと思い出したのだ。

突然の事に、初葉の奴がびくりと身を震わせた。頭上にイクスクラメーションマークでも浮かべそうな勢いで。

「……宿題、学校に忘れてきた。どうすっかな」

「お兄ちゃんのドジ」

明日提出の課題だ、どうするもこうするもない。再び学校に戻るしか、それしか……。

面倒臭いなあの中に、別にいいか、と思う自分が居た。

ちよつとこの気まずい雰囲気収まるまで、逃げるために、一度学校に戻るんだ。

そうだよ、それがいい。

「……行つて来るかなあ」

それなりに日も沈んで、地平線の果てにまで走れば手が届くんじやないかってくらいの高さに日も沈んでる。

まだ部活に勤しんでる生徒は相当数いるから、女子棟内は未だ結

構な騒がしさ。

ただし、我が男子棟は話が別だ。環境が環境なだけあって、部活動に勤しむ真面目な男など殆ど居ないし、そもそも完成したてである男子棟内部の部屋は部活に使用されることが無い。

相変わらずガラガラな我が男子達の居城。僕はちらつく夕日に視線をくれないながら、廊下を歩いていた。

無駄にサラサラと垂れる前髪が、目にかかる。視界にボンヤリと映り込む。今まで短髪は似合わないからと伸ばしてきた髪だが、こんなだから女扱いされるんだよなあ。

奈乃沙さんもまた、僕が髪を切れば、妙な感情を抑えてくれるかもしれない。

切るつもりもないのに心の中でうそぶき、教室の前にまで辿り着いた。

出入り口越しに覗ける、連絡用の黒板。

落書きがたくさんだ。日直の名前に、矢琴結婚してくれたの。誰だ書いたのふざけんな。

「……？」

耳を澄ませばどうも、中にまだ誰かが残っているらしい。パチリパチリ、何の音だ。

ホコリすら床に沈殿した、時が止まったようなこの空間で。誰が残っている？

……。疑問のまま、出入り口の扉に手を掛け、迷いなく教室内に身を乗り出した。

「うーん……」

唸っているらしいその声は、女の子だった。

決して長すぎるわけじゃない、しんなりとした髪が見えた。

押せば壊れそうな背中。か弱い。椅子に座った、鈴音子さんの背中だった。

「あーれ？ 矢琴君ですか？」

ゆらりと上半身を捻り、振り返ってくる。疲れ切った表情に無理やり浮かべたような笑みで。

「どうしたんだ？ こんな時間ま……で」

彼女が座り構える机の上に置かれているソレを見て、声がすごく、すごく弱くなった。

分からなかった。

決して驚いたりはいしていないけれど、心の中で、錠前のある扉にぶつかった気がした。

不可解なんだ。この光景が。彼女が机の上に安置した、オセロ盤の存在が。

「何やってるんだよ、本当に」
「オセロです」

パチリ。パチリ。パチリ。白の一行を黒に染めながら、彼女は教えてくれた。

「私、相当強くなりましたよ？ 今なら、キミにも勝てるかもしれ
ません」

「……そ、そうか。頑張って」

「ちょうどいい機会です。一回だけ、オセロやっていきませんか？」
「へ？」

自分の机から、置き忘れた宿題を取り上げた。椅子を引く音が教室に雪崩れ、消える。

「勝負します？ 勝負します？」

どうも勝負……してほしいらしい。

今にも飛びついて来そうな具合で彼女は僕を見つめ、可愛らしく、顔を華やかに飾っている。

「……一回だけな」

家には一応、ソラや初葉を待たせてるしな。早めに終わらせようか。

軽く勝つてやろう、僕は彼女の笑顔にうんを返した。

白2 黒2

彼女の席より一つ前の椅子を取り出し、向かい合う形で座ってみた。

盤上は既に、開始の用意が整っている。

緑の盤面に、交差する形で並んだ白と黒。何で僕は、こんなことをしているんだ。

「矢琴君は、どっちの色にします？」

「じゃあ、黒」

「それなら私が白で、矢琴君が先攻です」

聞くが早くに、僕は石を取り出した。彼女の表情を見上げながら、

打ちだす。

これで、白1 黒3

「この前の件は……確かに負けを認めますけど、今回はそう簡単にいきませんよ?」

「なあ、その前に聞きたいんだけど」

彼女の番。

白3 黒3

「何で鈴音子さんはこんな時間まで、こんなことを?」

「決まってますよ。オセロの練習をしていたんです」

僕の番。

白2 黒5

石の表裏を返す間、妙に思考が冴えるのだった。

「まさか見られちゃうとは思いませんでした」

「練習をしているところをか?」

「はい。できるだけ、見られたくはなかったんです」

彼女の番。

白4 - 黒4

「それまた、何で。そういえば鈴音子さん、隙あらばずっと練習してたよな」

「ば、バレてたんですか!？」

「……まあ」

僕の番。少し考えた挙句……。

白2 - 黒7

「私は、負けず嫌いなんですよ」

「知ってる」

「できればですね、ずっとバレずに、隠れて練習しといて……」

「しといて？」

「いつか、わっと矢琴君を驚かせたかったんです」

「十分驚いてるよ」

「練習を全て隠すことで、『努力なんて一個もしてないのに、才能だけで矢琴君に勝ってみせたー』なんて、言ってみたいんです。それで凄いなあ、とか、流石鈴音子さんだなあとか、言われないなつて」

彼女の番。

白 4 - 黒 6

「この際だから白状します」

僕の番。

白 3 - 黒 8

「……私はすつごい、不得手の多い」

「……」

「言っちゃえば、落ちこぼれなんです」

そんなの、笑顔を浮かべながら、言うことじゃないだろう。

「いきなり何言い出すんだよ。鈴音子さんは……別に落ちこぼれなんかじゃないだろ？ 勉強だってこのクラスじゃ、見る限り成績上位の方に喰い込むと思うし」

「いいえ、駄目駄目なんです」

間接的に彼女が何を言っているのかは、何となく分かってしまった。

鈴音子さんが物凄い努力家らしいということに、僕は気付いてしまったんだ。

彼女の笑顔が急に薄っぺらくなった気がした。空っぽの笑い。

彼女の番。

白7 - 黒5

「本当は分かっているんですよ、自分が何も出来ないってこと」

一度事実を語った彼女の口は、急に尖ったような、寂しい言葉を作りだす。

「凄い人になりたかったんです。褒められたいんです」

感情のタガって奴も、外れるなら外れてしまえばいい。
僕は彼女を見つめた。

白5 - 黒8

「頑張ってるんです。すごく、すごく頑張ってるんです」

「ああ」

「だから、不得手ばかりの私でも、凄い人になれるって、思っていたんです」

自分が頑張っているんだと、言ってくれた。

「でも、無理でした」

彼女の番。

白9 - 黒5

「あ、あの。急にこんな話、しちゃっていいんでしょうか」

「ううん、話したかったら話してもいいんだぞ？」

「でも」

「いいから」

僕の番。

白7 - 黒8

「……奈乃沙の事が羨ましくて。彼女、すごく人気者で」

「憧れてるのか？」

「ライバルです。だから私、すごく頑張りました。彼女に追いつきたくて、本当に本当に、頑張ったんですよ？」

彼女の手は、いつの間にか止まっていた。

「こんなに頑張ってるんだから……だから、私はすごいんだ、すごいんだって、皆にも私自身にも、ずっと言い聞かせてきました」

何度目だろう、ほんのりと笑顔をふりかけられた。

僕は教室の止まった時に巻き込まれたかのように、表情の一つも動かさなかった。

ずっと彼女を見つめた。彼女は、彼女を見つめる僕を見つめた。

「……頑張ってるのに」

言葉を紡げば涙声だ。ほんのりとした笑顔なんて、無かつたんだ。

「こんなに頑張ってるのに……」

ひと粒、彼女は俯いて顔から光を落した。

「オセロの一つさえ勝てないなんて……嫌じゃないですか」

涙なんて、一回零れてしまえば、簡単に柔らかくなってしまうものらしい。

一粒落ちれば、次々に落ちていた。ほんの少し、震えていた。

「勝てるかもしれないだろ？」

声を掛けてみた。

ふわりと彼女が顔をあげた。髪も空気も、ふわり。

目に溜まつてる涙は、見て見えないふりをした。だから少し、笑いかけてやった。

「……え？」

「次、鈴音子さんの番だけど？」

「……え、は、は……はい」

手加減なんかしてみたら、僕は彼女に怒られる。

勝負は真剣に、ソラには悪いけど、帰るのは遅くなりそうだ。

すっかり陽は落ちた。

夜空は、全てが純度の高い水なんじゃないかって思えるくらい、綺麗だった。

まあそんなに星は出ちやいないけど、僕の心象が今、澄んでいる。だから空が美しく見えるのかも。

僕はアパートの寂れた階段を上りつつ、先ほどの勝負を想起する。笑ってしまうような。……なんて良い話なんだ。

まさか、本当に負けるとは思わなかった。負けて良かった。手加減なんて一つもした覚えはないし、彼女も自分の実力だけで勝負していた。そして圧倒された。

『やった……やりました！ 矢琴君！』

感極まった彼女の顔が、忘れられない。

『私……勝ちました！』

気取った様子など一つもなく、顔をぐにやりと歪めて、でもそれは彼女のプライドが許さないのか、こらえながら泣いていた。

泣き顔の中にハッキリと見てとれる笑顔を浮かべて、僕の手を取って、席を立てて。

伝える言葉なんかなくせに、ただ必死に、精いっぱい感情を表現していた。正直可愛かった。

負けたのに、勝ちなんかより百倍嬉しい。

彼女が泣きやむまで、傍に居てやろうと思って……。

黙って隣にいるのも気が引けるから、なんか気の利いた言葉でもないかなと考えを巡らせて……。

『……頑張った……な』

少しぎこちなかったかもしれないけど。

その一言と共に、彼女の頭をポンと叩いてやった。手を流す程度に撫でた。

それだけで、たったそれだけだ。僕はそれだけしかしていないのに。

彼女は再び泣きだしていた。

僕はその時、ただ、何にでも優しくなれる気がしていた。

「お兄ちゃん遅い！ 宿題取りに行くのにどれだけかかってるの？ そんなんじゃないやダメダメだよ！」

「ああ、悪かったよ」

手にはまだ、鈴音子さんの頭を撫でた感触。この感触を引きずって、俺は帰ってきた。

ドアを開けば飛び込んできた眩しさに、目の前が明滅する。そのまま部屋に上がり込んだ。

「ただいま、初葉」

「……え、え、あ、うん、おかえりなさい。何その笑顔、気持ち悪いよお兄ちゃん。女の子モードにでも入ったの？」

女の子モードって何。

とにかく、たまらなく嬉しくて。初葉の頭もぐわーと、撫でてや

った。

うーわーわー死ーねーなんて抵抗しながら、何だかんだ嬉しそうにする妹。可愛い。

「う、うにゃ。んとねお兄ちゃん。……ソラお姉ちゃんが……」

言われずとも分かる。この家は狭いから。

ドアを開いた瞬間、彼女の様子くらいは見渡せていた。

彼女、円卓に身を傾れ込ませる形で……寝ていやがる。

それも人の貸したライトノベルを大事そうに腕で抱えたまま。

初葉に毛布をかぶせられたのだらう。背中に布をかぶっている。

「一連の選挙が終わって、疲れてたんだろうな。しばらく寝かしてやれよ」

「お、お兄ちゃんが天使みたいになってる……！いつものお兄ちゃんなら孫の手なんかを拾ってソラお姉ちゃんを叩き起こすはずなのに……！何があったの!？」

「別に何も無いって。……静かにしろお前」

失礼な妹を叱りつつ、僕は部屋の中に座りこんだ。

ソラの奴、本当に気持ちよさそうに、寝てやがる。

「……」

這い這い、彼女の寝顔に近づいてみた。初葉の奴も一緒になって近づいてきた。

……久しぶりに見る寝顔だ。

耳を澄ませば、くすー、くすー、静かな寝息が心をくすぐってきた。

ああソラの奴、女の子だったんだな。しかもかなり美人の。彼氏

はいなさそうだけど。

初めて意識したかもしれない。

「……ふゝにやゝ……」

「!？」

寢言だ！ ソラの寢言だ！ コイツ面白い！

口を何やら、むにやりむにやりと動かして、何とも幸せそうに笑って。

「……にやあゝ、やことゝ」

僕の名前だと!？ 何だこいつ……。

僕の名前を呼ぶ+幸せそうな笑顔……。

なるほど……彼女の夢では、僕がランチに近い処遇を受けているに違いない。

「……しゅきゝ……」

スキー……？ ウィンタースポーツ……？

「にやあゝ……ねこみみゝ……」

何の夢だよ！

「はッ！」

唐突だった、目を覚ましやがった。僕と初葉はバク転でもかましそうな勢いで飛び退いた。

幸い寝ぼけていたソラは状況を認知できていないようで……目を

こすりつつ、首を傾げている。

「あれ、矢琴……？ おかえりー」

「た、タダイマ」

「なんか変な夢見てた。すごい、良い夢」

本当に良い夢なのかそれ……。

彼女はまだ寝ぼけている様子だが、ある程度の意識は確立できたようだ。

二段階目の起床と言ったところだろう、とたんにハッと声を上げて。

「や、矢琴……ごめん！ 私、矢琴の家で勝手に寝ちゃった！」

何かと思えば、そんな事だ。

「別にいいよ、それぐらい。なあ、初葉」

「う、うん！」

「……あ、ありがと。ねえあと、私、変な寝言言ってなかった？」

「えっ？」

「言ってなかった！？」

四足でととと、僕を追い、問い詰めてくるソラ。

血の気が引く。言えない、絶対言っただなんて、言えない。

きつと正直に話せば、僕の脳から記憶が消えるまで、殴り続けられる。

「い、言っただよね！？ 多分言っただ！」

「……」

「い、言っただんだ……」

予想外の反応だ。青ざめた顔で、身を引くソラ。
あてどなく首を振り回して、焦ったように自分の学生鞆をとりあげた。

「か、帰るー！」

迷いなく、信じられない速さで。

「急にごめんなさい！ お邪魔しましたー！」

ぴゅーなどと、擬音が付属しそうな逃げ足を見せて、彼女は部屋から立ち去って行った。

残された僕と初葉は呆然とお互いの顔を見合せてみる。お互いの空白が伝わってくるだけだった。

……なんだ、アイツ。

気を持ち直せ、僕。

ソラのことを考えている余裕は、ないんだ。

明日はきっと、最終決戦なんだから。

【第十一話前】走れいっ！！ 一応最終決戦なので！！（前書き）

読み返してみたら、結構ベタにベタの上塗りの展開で、ちょっとした恥ずかしさに悶え苦しんでおります作者です。

でも、このストーリーはこのクライマックスしかないんです！このクライマックスですが、完結しないのです。多分。

だから、読んでもらえると嬉しいです！

【第十一話前】走れいっ！！ 一応最終決戦なので！！

恐らく選挙の最終日と相成るであろう今日という日、僕が過ごす教室の空気は……。

授業中から、一触即発と言っても申し分ない。こんな時、通人が可哀そうになる。

授業の間、絶え間なく浴びせられる恨み事、視線、よく奴も耐えきれたものだ。

メガネもメガネなりに、覚悟って奴は、それなりなのかもしれない。

「フン、休み時間が始まったな。僕は行かせてもらおう」

チャイムが鳴ると同時に、通人は席を立ちあがる。悠々と、教室の中から姿を消した。

ここで通人を捕らえようと卑怯な発想を持つ人間は、さすがに男子棟の仲間内では存在しない。

勝負は正々堂々と。正々堂々で、僕たちの何倍と知れぬ戦力に、勝利してみせる。

教師が退室した部屋で、和気藹々の精神は高まって……時間に比例して騒がしくなる。

「有村、どうする？」

腕章の安全ピンに相変わらず苦戦しつつ、僕は奴に尋ねる。

「決まってる。全軍突撃だ」

珍しく、その顔は真剣だった。眼差しも厳しい。

「今日で決着を付ける」

有村の整った顔立ちが映えるようだった、なんだか心強い。無責任な安定感を感じる。

「俺と矢琴が半数ずつ人員を率いて二手に分かれ、個別に指揮をとる。石を守るなどと言っている余裕はない、俺も矢琴も先陣に立って囷として動こう。少数の利点は機動性にある、数だけ膨れ上がった有象無象の青腕章どもを一点突破して、玉垣奈乃沙にキツイ一撃を浴びせてやるとするさ。小細工は要らない。そもそも、小細工が通用するような物量じゃないだろう。とにかく一人でも突っ込んで一人でも先に進め。なりふり構わずだ。石さえ奪えば俺達の勝利に俺は足首フェチだそして最近はいよいよやく幼女を愛でる感情にも目覚めてきたんだこれがなかなか「最後まで集中力保てよ」

有村は長時間真面目な発言を続けると理性が飛ぶ仕組みになっているらしい。

ふと、耳に違和感。……小刻みな足音？

ああ、あいつだ。一人でも味方は欲しい、僕が頼んだんだ。違反の無い程度に手伝ってくれと。

「有村の……」

途端、教室にかけ込んできた影。僕を含む教室中の誰よりも小さな、軽そうな影が翔ぶ。

弁舌振るった挙句理性を飛ばした有村の後頭部に。中学生の、学生靴が。

「ばかーッ！」

それは蹴りだった。

奴の長身でさえ、吹き飛ばすには一撃で事足りた。一見軽やかに飛び行く有村の体。

僕の動体視力は研ぎ澄まされた。だから見えた。蹴り飛ばされる有村のアホな表情が。

「痛くないぞ！！」

机の群に体をつっ込ませ、めちやくちに音を立てる有村。痛そうだった。

彼の前に立ったのは、初葉だ。軽蔑を込めた視線に加え、死ね、とだけ吐き捨てる。

「玉垣奈乃沙妹か。ああ、よく来た。しかし突然何故俺を蹴った？ ああそうか、俺の幼女を愛でる発言が気になった訳だな？ フフ、可愛いところもあるもんぐふおつぐふおつぐふおつ」

初葉が、横たわった有村の腹を踏みしだく。異様な光景に慄く男子達。

恐らく、初葉がここまで怒りを露わにするのは、まあ、幼少の頃に過ごした彼女との記憶が無かった、という点においてだろう。

あとで有村にもゆっくり解説してやるとしよう。

「みんな」

ひと声。僕のそれで、ピン。教室の空気は張り詰めた糸の様と化する。

誰もが僕を見ていた、ああいよいよ始まるんだなと、闘志が見え

た。鈴音子さんにも。

ソラは倒した、後顧の憂いは無い。あとは男子の復権に向けて、ただの前進。気持ちに身を任せるだけだ。

「もう、ゆっくりしてる時間はない。休み時間は始まつてる」

これだけで、静かな空気に雄叫びが聞こえた気がした。改めて、僕は、自分で思える最上級の、清々しさを持って。

「じゃあ、気合い入れて行こう!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおッ!!』

始まった。

ただ、予想外に皆の勢いが凄過ぎて、ちょっと、体がビクビクした。涙目になった。

石は僕が持つこととなった。走るが早く男子棟を脱出し、目指すは正面突破。

女子は局地を受け持つ少数の班に分かれているようだ。

恐らく僕たちの発見を第一として、それから仲間を呼ぶ魂胆なの

だろう。

既にいくつかの女子達を抜いた。女子棟の正面玄関を踏み越え、一階の廊下を突き走る。

みんな、戦意は旺盛だ。僕が連れるのは十五名の仲間。中には、鈴音子さんも含まれている。

ほんと、ギャグにでもなりそうな勢いだ。ぐわーって敵を突破して。

「有村君の方、大丈夫でしょうか」

横に並んで話しかけてくるのは、鈴音子さんだった。息が弾んでいる。

僕は黙ってうなずいた。心配する要素があるとすれば、初葉とアイツが喧嘩しないかといった程度だ。

僕たちはやれる。僕達嘗めんな。

『いたー！ 男子発見！』

『氷川君ね、今日こそ決着付けてみせるわ！ 全員突撃！』

『マズい、女子に見つかったぞ！』

『お、俺が足止めしてやるよ！ ハッ！ 怖くなんかない！ 後で追い付くから待ってる矢琴！』

僕は、振り返らなかった。拳を強く握った。声の主は多分、園田の奴だ。

なんだよ、何だかんだ、みんなみんな、頼りになるじゃないか。残ってくれた彼の想いは無駄にしない。前を強く、見据えるばかりだった。

『掛かって来い女子どもオッ！！ お前らなんかより……お前らなんかより矢琴の方が十万倍可愛いんだよおおお！！』

闘いが終わったら園田に仕返しすることを、心の中で決めた。

『くそっ……まだ追いかけてくる！』

絶えぬ女子達の追撃は、底が知れない。各地点に配置された女子の数は、確実に均等だった。

守りの厚い地点を探し出せば、そこに彼女は隠れているだろうなという、僕の簡単な憶測は、見事に先読みされているようだ。

彼女はいつたどこに居る……。

以前に通人の案内では、奈乃沙先輩の隠れ家は体育館倉庫と判明したはずだ。

問題はその部屋を、まだ、彼女が隠れ家としているのかどうか。もし僕が先輩だったら、相手に知られた隠れ場所を継続して使うはずもない。

要は奈乃沙先輩が慢心しているかどうかだ。慢心しているなら彼女はまだ、体育館倉庫で僕を待っているはず。圧倒的有利から早期決戦を臨む先輩は、あえて自らを囷に僕達を体育館に呼び、持ち前の物量で叩き潰そうと画策しているだろう。

……隠れ場所を移している可能性の方を考えた方がいいか……。単純に、場所を推理するなら、僕たちからできるだけ距離をとれる

部屋。単純に……校舎最上階の三階部分。三階のどこかで、僕たちから身を隠している。問題は、体育館と三階のどちらへ向かうかだ。体育館か、三階か。間違えればとんだ二の足を踏む羽目になる。

「三階だと思います」

鈴音子さんの声だった。

「彼女は結構、用心深いんです。前の学校で私が何度も何度も勝負を挑んでいた時、彼女は全力で、一切手加減や油断をせずに、立ち会ってきました」

信じよう。それだけは、考える前にただ思った。彼女の、経験に基づく意見だ。

通人よりもずっと前から奈乃沙先輩のことを見ていた人の意見だ。間違ってるはずが無い。

「みんな三階に行くぞ！」

手近な階段を上る。当然女子は待ち受けているわけで、僕たちは掻い潜った。

次々と、仲間は減った。捕えられたり、敵の足止めをするために戦力を裂いた。

残りの人数は八名。階層は二階。

『矢琴行けえっ！！』

『狭い階段なら効果的な足止めができるはずだ。俺も残ろう。先日は格好の悪いところを見せてしまったし……汚名返上といくか』

また二人、減った。安田と玉置。玉置はすぐに捕獲された。

もちろん、僕だって無事では済まない、一直線に伸ばされる女子の手を屈んでかわし、逸れてかわし。

いつ石を奪われてもおかしくないんだ。緊張だけは、胸に込めるのを忘れなかった。

現地点は二階から更に階段を上った、踊り場。見上げれば三階の景色が……。

「フッ」

メガネ男子が、待ち受けていた。

それも背後に女子を複数名引き連れた、何人とも知れぬ大所帯で。先頭の僕と鈴音子さんが足を止めたせいで、後に続く連中も止まってしまう。

安田が止め切れなかった女子に対する為、また一人減った。

「矢琴、ここは通さない。そしてお前自身も終わりだ。諦めろ」

中指でくいとメガネの縁を持ち上げ、僕達を見下ろしてくる。

『本当にメガネの情報通り……ここに敵が来るなんて』

『す、すごいじゃん！ 通人君見直した！』

通人がここに居る理由は、彼の背後に集う女子達のざわめきで、大体把握できる。

残り、僕を除いて五名の仲間……対抗できる数か？ 通人が石を持っているかどうかを確認する余裕などあるわけもない。前線に出ている時点で、石を所持している可能性は薄いだろう。やはり奈乃沙先輩だ。

「残念だったな矢琴。こちらでも単純な作戦だけに、それに対するお

前たちの作戦も読みやすい。動きを読むことは容易いな」

「僕たちはまだ負けられないんだよ！」

『全くその通りだ!!』

僕の背後から飛び出した四名が、同時に、通人に向かって階段を駆け上がった。

「貴様ら……！ 往生際が悪い……！」

『バカが！ 往生しないんだよ俺たちは！』

男子達が通人を抑え、その背後から押し掛けてくる女子をも阻む。

「バカな……！」

明らかに押し返すなど無理と思われた相手にも、抗って。これが僕たちの力かと改めて思い知らされた。

一筋の道のりが完成したのだ。

僕は今、どうするべきか。

そんなことを冷静ぶって悩むような時間は残されていない。

仲間が女子達を足止めしている間に、進むしか。

「鈴音子さん！」

「はい！」

彼女の手をとって、仲間達が作りあげた、わずかな道をくぐる。

女子の一人に服の袖を掴まれた。僕はブレザーを脱ぎ捨てて、脱出した。

こんなこともあるのかと、ブレザーのボタンを外しといて正解だった。どんなにバカらしい準備でも、やっつくべきだ。僕ら元からバカだしな。

「敵は……?」

「み、見当たりません……!」

ようやく息をつけることには、肺が焼け消えそうなくらい、苦しかった。

とりあえず、座る。疲労にモザイクがかった視界の中で、鈴音子さんを見つめた。

以前にも同じような状況で彼女は余裕ぶっていたが……。

どうやら本当に、彼女はある程度、少なくとも僕よりは体力を持ち合わせているようだ。

男子は誰も追いついてくる様子がない、敵はあれだけの数だ。止めるのがやっとだろう。

ならば僕たちは……二人で……奈乃沙先輩から石を奪わねばならないのか。

有村と合流できる可能性も薄い。

「大丈夫ですか?」

「……あ、ああ。もういい、いつ敵が来るか分からない。行く

背後から、こちらにかけ込んで来る足音があった。

動悸のせいでこれ以上跳ねないはずの心臓が、それでも跳ねた。
振り返る。

「ソラ……！？」

澤田ソラその人だ。選挙に関係ないはずの彼女が、走っている。
僕と同じくらいか、それ以上に苦しそうに。僕たちの前で止まると、息を整えだした。

膝の上に腕を立てながら、僕の顔を上げてくる。

「……や、やこと……」

「どうしたんだよお前……！」

唐突に現れた彼女は唐突に。

「お願いだから！　お願い……だからっ！」

「何だ？」

「お願いだから負けて！」

は。と言いそうになった。心臓の奥で怒りじゃない、疑問に近い
何かが噴火した。

「やつぱり……駄目なの！　よくんを生徒会長にしちゃ……！」

いったい、どうして。そして彼女の苦しそうな顔。

僕を探して、そんなに息を切らしているのか。そこまでして僕達
を止める理由は、何か。

『負けて』っていったい、何なんだ。

「どういことですか……！？　何を言ってるんですか？　貴女、

確か黄色腕章の……！」

「そ、そう。澤田ソラ……です」

女子同士のやりとりが進む間、僕は考えた。考えに考えた。答えは出た。

ここまで来て、話を聞いてもらえない。

ソラが何を話すとしても、僕たちは負けられないんだ。

「鈴音子さんいくぞ！」

「……や、矢琴！ 話聞いて……！」

ただ、走るしかないんだ。

【第十一話後】皆にたまものマニフェスト（前書き）

同時投稿になります、後半部分です！
お楽しみいただければ幸いです。

【第十一話後】皆にたまものマニフェスト

ソラも振り切って、通人も振り切って。僕たちはどこに向かって
いる。

敵の姿がやたらと少ない。

遭遇するとしても、僕と鈴音子さんだけでも十分にやり過ごせる
レベルだ。

恐らくは、有村が付近にまで来ている。有村を打ち取るためにこ
の近辺の女子は駆り出されたんだ。

『男子の集団が向こうで暴れてるって……！ 早く行かなきゃここ
まで来ちゃう！』

進む廊下の突き当たり向こうから、そんな声が聞こえてきた。

ここまで、来ちゃう？ 『ここ』とやらの、守るべき何かがある
という事か。

それはつまり……。

疲れ切った体に、活力が。血のような何かが体中にみなぎりそう
だった。

突き当たり向こうに居るであろう声の主が去りゆく足音を聞き遂
げて、鈴音子さんと顔を見合わせる。

「行ってみましょう！」

「ああ！」

それは、わー、なんて叫びたくなるくらいの、抱きつきたくなる
くらいの、希望だった。

誰も居ないのを確認して、慎重に進む。角を曲がれば、見えたの
は三年の教室。恐らくここだ。

戸の覗きガラスから、恐る恐る、角度をつけて覗きこむ。

「……？」

中の光景に眉をひそめ、少し大胆に覗いて見た。

「あれ、鈴音子さん、これって……」

想定範囲外だ。目の前の光景は一枚絵か何か、夢幻想の類か。状況は簡素だった。窓辺で外を見つめながら、パイプ椅子に座る人が、一人。確かに奈乃沙先輩だ。

教室内の机という机は、一つの例外も無く部屋内の尻に下げられている。

部屋にあるのは、それだけ。

彼女を守る人間は誰も……。事情は分からない、だが敵の作戦とも思えない。

「行くぞ鈴音子さん！」

「や、矢琴君！」

それでも慎重を期そうとしているらしい鈴音子さんの声を振りきり、僕は教室の戸を開ききった。

部屋の中で、風が吹く。髪先がなびく。

「……来た」

先輩が気づいた。妙にシリアス気のある表情で、顔を振りかえらせて来る。表情の右半面だけが見えた。

僕が足を踏み入れても、彼女が焦った様子はない。畏がある様子も見受けられなかった。

唯一の例外があるとすれば……。まさか、と思いついた節がある。彼女は、ただ一人だけで石を守り切るつもりなのか。

「矢琴君油断しないでください！ 奈乃沙は……」

「鈴音子？ ……？」

この二人、挨拶もまだだったらしい。

奈乃沙先輩にとって、鈴音子さんの存在がこの学校にあること自体、予想外であつたはずだ。

珍しく、明らかな動揺が奈乃沙先輩に見て取れた。

勝機だ、今だ！

彼女が僕に背を向けたこの隙が……！

思う前に僕の体は駆け出し、飛びだし、頭から彼女に向かって滑空した。

「奈乃沙は本当に凄いです……！」

鈴音子さんの声。宙を滑り止まらぬ僕の体は、奈乃沙先輩の背中に向けて飛んで行く。

ぶつかった。

見苦しいガチャリとした音、僕の両腕そして顔に伝わるのはパイプ椅子の細く冷たい感触だけだった。

危うく壁に頭をぶつけるところだったと、ヒヤリ。先輩が消えた

？ どこへ。

右、いない。

左、いない。

「上です！」

上とかあるわけないだろ（笑）

でも、とつさに見上げれば、靴の足裏らしきものが視界にちらついていた。

降って……。

本当に上だ！

体を横に転がす。それでも僕に向かって伸びてくる足に、パイプ椅子を抱えて身構えた。顔面の前に突き出した座板がぐつと重くなり、軽くなる。僕はすぐに椅子を投げ出して、立ちあがった。椅子が立てた騒音に気を取られる。すぐに奈乃沙先輩を見た。

何なんだ彼女、ギャグみたいな動きだ。それでも清楚に整った制服、妙に惚けた無表情。

奈乃沙先輩は用心深いと、鈴音子は言っていた。その奈乃沙先輩は、たった一人で僕達を待っていた。

石を奪われない自信が、絶対の自信があるとでもいうのかこの人は。鈴音子さんが迂闊に手を出せない理由が、理解できた。場には与えられたのは一息分の沈黙。

「逆に、キミから奪えばいいのね」

「……」

「キミは石を、持っている？ それとも、持っていないの？」

じり、と詰め寄られた。彼女にとっては、全てが計算づくめであるような気がした。僕達が突撃を仕掛けてくることも、僕達がここまで辿り着くことも。ただ一つ彼女に誤算があるとすれば、初葉と鈴音子さんの存在程度では。

「容赦はできないから。覚悟しましょう？」
「くっ！」

バトル漫画のようなセリフを吐くにふさわしいだけの動きを、彼女はしてみせた。走ってくる。右に、左に、経過上の線に幾つもの角が浮かぶ走り、彼女は僕の視線で遊んでいるような気すらした。……何だよこの動きは……！ 目を瞑り、開けば彼女の姿は目前。

「うわっ!？」

僕に腕が伸ばされた。威圧館の塊みたいな手だった。辛うじて、反射のままに驚掴んだ。

「そう。先に謝っておくけれど」

彼女を捕えた僕の腕。あえて、更に、彼女はその腕を掴んできた。

「!？」

「少し痛いかも」

軸足ごと、彼女は体を宙に投げ出していた。僕の腕に彼女の全体重が、一瞬。投げ出された彼女の足は壁を踏み台に蹴り、飛びあがる。彼女の体も僕の腕を逃れ、飛翔し、蜻蛉返って。

視認来たのはそこまでだった。

遠慮を感じ取れる痛みだった。靴裏で、踏み飛ばされた。彼女の力、重さに抗いきれぬ僕の体が、前のめりに吹き飛んだ。

本当にあり得ないだろ。これは本当に現実世界かと。漫画家どこかの世界じゃないかと疑えてならない。体を起こして振り返れば、教室の尻に固められた勉強机の上に、彼女は慄然と立ち続けていた。ゆっくりとした動きで、机の上から降りてみせる。もう、破れかぶれだ。

「うああああ!!」

彼女に向けて、突っ込んだ。彼女も僕に向けて、再び走り出した。組み合う。彼女の手が延ばされる。僕の胸ポケットに向けてだ。まずい、奪われ……。

「奈乃沙！ 猫です！」

「え？」

鈴音子さんの声で、彼女の手が止まった。明らかに、鈴音子さんに気を取られていた。僕は隙を突く、彼女の体に体からぶつかり、引き、倒した。

「チッ……」

それでも動こうとする彼女に、覆いかぶさる。引き攣らせたように息を吸って、彼女が顔を赤らめた。動きを止めた。

「僕は女じゃない！ 男だ！ 僕は男なんだ！！」

叫んだ。

「え、や。ちよっ……っはつくち！」

彼女は石をどこに持っている、悩んでいる暇はない。無我夢中だった、腕を伸ばした。

石を奪ってやる。

そして、これで、勝てるんだ！

「……引き分け？」

先輩が一言。僕に馬乗られた状態だというのに、恥らった様子も無く、尋ねてくる。

お互いのお手はお互いのポケットに伸びて、触れる直前で止まっていた。

動いても、どちらが先に奪えるかの保証はない。

「あ、あ、あの！」

今さら実感した。これって凄く、あれだ。エッチな姿勢だ。思わずとも飛び退いた。

視線を逸らし、駆けよって来る鈴音子さんのいたわりを受けつつ、咳払いを一つ。

「決着、どうします？ もうあんまり暴力的な手段は嫌です」

「……そうね」

どちらかが、負けを認めるわけにはいかないだろう。勝負は明らかな引き分けだ。

勝負を最初から仕切り直すか、なにか対等な条件で別の勝負をしなければ……。

「大丈夫ですか？」

鈴音子さんの白い肌を見て、思いついた。

「先輩」

息をついて、一つ。問題は休み時間が終わるまでに勝負が終わるかどうか、という点。

まあいいだろう。先輩が承諾してくれるなら。そう思って、僕は尋ねた。

「この部屋に……」

「ええ」

「オセロは、置いてありますか？」

教室の真ん中に合わせた机二つ。更にその中央には見慣れた卓上ゲームが一つ。

ギャラリーには青腕章の女子が、たくさんだ。教室の内回りに取り囲んでいる。

その中で僕は、女子の一人に縛られている。違反を出来ないようにと、女子達の計らいだ。

僕も抵抗はしなかった。されるがままに縛られ、教壇に座らされている。口にテープまで、

「久しぶり、鈴音子」

教室の中央で奈乃沙先輩は、これまでに見たことが無いくらいの、笑顔で。

今の今まで抑揚の深さを感じられなかった声のトーンも、よく弾んでいる。

「そ、そんなこと言わずにちゃんとやってください！」

鈴音子さんは怒っていた。先輩は気にもしないで、ニコやかに笑うばかり。

そんな二人が、向かい合った机に座っていた。

二人が交互に石を盤面に差し出して、そして石を返している。二人のゲームに僕が介入する術は無い。僕はもう信じるだけの存在だ。

「鈴音子、すつごく、可愛いよ」

「が、がが柄にもないこと言わないでください！ 何で昔から私を可愛がるんですか！」

「えへへ」

「えへへじゃありません！」

会話しながらも、滞りなくゲームは進んでいく。まだ序盤だ、どちらの勝利も見えない。

ギャラリーの喧騒は大したものだった。奈乃沙先輩と鈴音子さんの関係について論議する女子、何故鈴音子さんが僕たちの仲間であ

るのか、などなど。時折、僕に優しげに語りかけてくる女子もいた。少しだけ思ふ事がある、女子と僕、こんなに親しかったつけ、と。

『でもあの……鈴音子ちゃん、だっけ？ 奈乃沙先輩に挑むなんて無謀だよ』

『そうね……。そもそもどうして男子の味方なんか……。あんな変態チックな公約が実現されるなんて絶対にイヤよ』

とある女子の会話を聞き拾った。

直感的に意味を理解するには、無理な言葉だ。どういうことだ。

そんな疑念も頭の中で、すなーっ、と流され、ただ僕は勝負を見つめることに注目した。

「鈴音子、強くなった？」

「アナタは私とオセロしたことなんてありませんよ！ イメージだけで前までは弱かっただなんて決めないでください！」

「違うの？」

「……違う訳じゃ、ないですけど」

語尾にパチリという音が加わる。

雑談を挟みながらも、両者の動きと、盤を見つめた時の眼差しは、真剣そのものだった。

勝負は見る限り、現在は先手後手を考えなければ互角と言ったところか。

チャイムが鳴り響いた。

学校中を支配するその響きも、ゲームの止め処には成り得なかった。

鳴り終わった。

ギャラリーの誰も、勝負をしてる張本人も、動きはしない。見れば、教室に入ろうとした教師を、女子達が押し返していた。その間に、新たなギャラリーがたくさん教室に流れてくる。

「……矢琴、何やってるの……？」

中には、ソラの姿も見えた。明らかに先ほどと変わらぬ疲労感を身に漂わせ、まさか、また僕を探して走っていたのか。明らかに、疲れ果てているはずなのに足取りだけは確かに。僕の元まで歩み寄って、崩れ込んで来る。

「……？」

口にテープが貼られているから、言葉を発することができない。何を言い出すのか、予想した。

確か、先ほど彼女が言っていた分には、どうしても負けて欲しい。と、それだけだ。

もちろんそんな言うことは、何があつたとしても聞けないが……この姿勢では、彼女の話の聞かざるを得ない。

「矢琴、話を聞いて」

負ける、という話をか。

「何でもするから……今年の選挙は諦めて！」

やはりだ。

眉をしかめて、クエスチョンだけでも彼女に伝えて見せた。それは何故だ、と。

「な、なんなんでって……！ 選挙がどうこう以前に、その……倫理的な意味で許せるわけないの、こんなの！」

分からない。

「確かに男子がそういう欲求を持つてるのは分かるけど……」

彼女が僕に語りかける間も、オセロは進んでいた。鈴音さんは、決して圧倒されてはいない。勝ちの可能性は十分に見える。周囲の女子達も、危機に煽られたざわめきを発していた。

「矢琴」

ぴしゃり、とソラに呼びとめられる。

「一つ聞きたいんだけど……本当に……よくんの公約、ちゃんと知ってるの？」

何を言い出すかと言えば、そんなこと。先ほどの女子からも、同じ点で気になる発言を聞いた。

冗談だろう。僕達は、男子の復権の為に、純粹にそれだけの思いで戦い続けてきたんだ。

有村は確かに、そう言っていた。ちゃんと僕の前で、語っていたんだ。

「あいつ、よくん、肝心なところだけ語って無いなんてこと……」

ないよね？」

仮説程度に心の中で留めていた点を、突かれた。グサリと、不信という穴を広げられた。

公約なんてものは、学校公式な物じゃない。公約の発表はあくまで生徒達が勝手に作った規則であり、掲示板にでかかと貼り出されるわけでも、選挙演説等でしっかりと表明しなければ、などという学校からの決まりことは無い。

まさか、まさかとは思うが。僕が悪夢を頭に浮かべる間にも、オセロは進行していた。

「矢琴まさか、本当に知らないの？ やっぱり……！ 分かった！
？ 今教えるから、よく聞いて！」
「……！」

ソラが、僕に真実を告げようとしている。

「ようくんは……私に、言ったの。選挙に勝ったら、創るものがあるって」

「……？」

「その名も、変態王国」

！？

「へ、変態王国を創るんだって、言ってたの！」

それは本当なのか。本当なのか。信じ切ることができない自分に

「全部、本当の話」

とどめをさされる。

両肩にアフリカ象でも降ってきたような衝撃に、心が突かれた。折られた。

え？ 何？ 変態王国？ 変態キングダム？

何だよそれは！！ 僕たちは、そんな意味の分からない王国を作るために今まで！！

「これ！ その時によーくんが渡してきた紙！」

彼女が提示してきたそれを、目をで流す程度に読みあげる。

【棟に隔たれない、真の男女共学を目指すこと】

【女子のスカート丈を引き上げさせる。辛うじて常時パンチラにならない程度が好ましい】

この時点で既におかしい。

【体育祭の競技に、女子大水泳大会を加えること。競技名は必ず『ドキッ！ 女だらけの』から始まること】

【予算を分割して保険教育推進委員会を発足する】

その他、読むに堪えない項目がズラズラと、並ぶ。力が抜けた。最後まで読み飛ばすと、こんな項目が。

【男子復権とかも狙ってみる】

オマケ程度だ。

「~~~~！！」

テープを貼られた口で、とにかく喚く。こんな事実があつてたまるか、負けてたまるかと。

声にならない声に、誰もが僕を振り向いた。誰か、このテープを外して、鈴音子さんを止めてくれ。

『騒がないでください!!』

しかし、抑えつけられる。転がされて、縛られたままの体では何もうしようが無かった。

「矢琴！」

声を張り上げたソラもまた、ギャラリィに組み伏せられた。数の暴力だ。

頬を床につけて、齒を食いしばった顔で僕を見つめてくる。

「誰かこの勝負を止めてください！」

一所懸命に叫ぶソラの声は、誰の耳にも一切届かなかった。

盤面は確認できないが、二人の様子を見る限り……奈乃沙先輩が優勢か。

このまま、鈴音子さん負けてくれることを祈るしか……！

「奈乃沙、これで……私の勝ちです！」

「ッしまった……!?!」

なんか鈴音子さん逆転してる……！

このままでは、勝負が決する。僕たちの勝利で、変態王国の創設が確定する。

「鈴音子さん！ 勝たないでください！ もし勝っちゃったら」

ソラの口が、一人に塞がれた。動けない。

僕も彼女も、どう足掻いてたところで動けるような状況じゃない。

……これで終わりか。

二人のゲームは進む、鈴音子さん有利のまま。

二人の会話を聞く限り、恐らく回順はこれで……最後。鈴音子さんの一手で終わる。

「奈乃沙……」

鈴音子さんは止まらない。もちろん僕とソラが引き起こした騒ぎには当然気付いているだろうが、その事情には気付けるはずもない。彼女は石を、指でつまんでみせた。

勝負を終わらせようと、ただひたすらに頑張るその手は……止まらない。

「これで終わ　「ぐあおおおおあつ！！」

外の廊下に通人が転がってきた。

辺りが騒然とする。女子達は僕の拘束を緩め、全員が廊下側に走って行く。

何だ、何が起こったんだ。通人が転がってきた、それはつまり、通人が何者かに攻撃されたということか。

……有村だ！ 男子の連中が攻めてきた！ 有村が来たんだ！

「矢琴っ！」

ソラも動けるようになったが早く、僕の口からテープを剥がす。鈴音子さんは多少の戸惑いを見せたが、何よりもゲームの終了を

優先しているらしい。ついに最後の石を、盤面に置

「止まってくれ!!」

ありったけの叫びだった。全てが静かになった。

キンと、残響が最後に寂しく鳴って、後に残るのは攻め上がって来る男子の怒号のみ。

鈴音子さんは目をパチリと見開いて、僕を見ていた。

「……良かった間に合った、鈴音子さん、この勝負は負けにする!」

「ど、どうしたんですか矢琴さん!」

「事情が……変わったんだ」

迷わずに懷から石を取り出した。奈乃沙さんはこんな状況でもうるたえることなく、ただ無言。

一つ、頷く。こんな終わり方でいいのかな、とは思った。

まあこんなもんか。とも思った。結果は残せた、色々と。だから僕は。

「先輩、受け取ってください」

琥珀色の球体を、彼女に向けて下投げで優しく渡して見せたのだ。

「……これって」

両手で胸に抑え込むようにして、先輩が受け取る。しばらく、彼女でも事情が把握できないようだった。

しばらく石を見つめて、僕と石を交互に見つめて、首をほんの少し横に傾けた。

「僕たちの、負けです」

「……そう」

更に騒然とする教室内。

混乱が混乱を呼び、ギャラリーの女子達も驚いたり、廊下に攻め寄ってくる男子を対処しようと動きまわったり。忙しい。

「矢琴おお！！ いるんだろ！ 助けに来た！！」

廊下の女子達を力任せにかき分けかき分け、何も事情を知らぬ彼、有村の姿が見えた。

女子達が制するも、力と身のこなしだけは相変わらず圧倒的。と
いうか女子は彼に触れたがらない。危険だから。

「……矢琴！ 助けに来たぞ！」

あつという間に、教室の中にまで踏み入ってきた。誰も有村を止める人間はいない。

訝しげに表情をゆがめつつも、彼は僕の縄を解いて、立ちあがらせてくれた。

「ありがとう、有村」

「ああ、たまには俺も役に立つものだろう？」

心境が和やか、とは言い難かった。穏やかを気取って、有村の顔を見上げてみる。

何コイツの澄まし顔。

一度彼には、反省してもらわないといけない。仲間として、幼馴染として。

「しかしあれだな、縛られてるお前に、初めてそそられるものを感じ

じ」

「黙れ！！」

「え？」

思い切り有村を殴り飛ばすのであった。追いつちを仕掛けるのであった。

皆、僕に協力してくれるのであった。

こうして、今年の生徒会総選挙は終わるのだろう。奈乃沙先輩の一人勝ちだ。

明日からは学校も、普通の日常生活という姿を見せてくれるだろう。

【第十一話後】皆にたまものマニフェスト（後書き）

次は最後に、エピソードです！

【エピソード】僕から、皆から、皆へ、僕へ！（前書き）

ようやく完結を迎えるこのラブコメ。

馬鹿らしい選挙を通じて、皆が仲良くなっしまいました。

最終部分にして、作者が一番気に入っていますエピソードです！

「エピソード」僕から、皆から、皆へ、僕へ！

僕の降参をもってして、今年度の選挙は終了した。
締めには、男子全員で有村を懲らしめた。

この判断が間違っていたとは思わない、有村の野望を叶えるよりは、降参して何も変わらない日々を送る方が、幾分も幾分も幾分もマシだ。それに、まあ。選挙の中で培った仲間意識やら、関係やら、そういうものは確かに僕たちの中に残っているんじゃないか。

「お兄ちゃん、寝ぐせ酷過ぎだよ、髪ボサボサ」

早朝午前六時。朝は全てが淡かった。

僕は牛乳の注がれたコップを片手に、玄関で佇む初葉を、見やる。

ついに初葉の奴、帰ってしまうそうだ。

半ば喧嘩状態だった奈乃沙先輩とも、仲直りする決心がついたとか。

ああ帰っちゃうんだなあ。何だか、心が萎むような気がするの、気のせいかな。

「結構寂しいよ。今まで、たくさんありがとね？ お兄ちゃん」

「……まあ、うん。意味の分からん妹を抱えることになって、本当に大変だった」

初葉は宿泊用の荷物を全て詰め込んだらしいカバンを背中に抱えている。

僕より小さな体のどこに、そんな力があるのか。僕にはまず持ち

上げられないと思うが。

「お兄ちゃん、初葉が家に帰って決めた理由、知ってる？」

「ん？先輩と仲直りするからじゃ……？」

「うん、それもあるけど、何よりもの理由は、初葉がお兄ちゃんを認めたからなんだから」

「は、はあ？」

「初葉とお姉ちゃんが喧嘩した理由はね、お姉ちゃんがお兄ちゃんの事を好きになったのが始まりなの」

「……」

「お姉ちゃんは私に恋の相談をしてくれて……妹の私としてはさ、それが何となく気に喰わなくて。姉を取られる気分だったから」

「……だったから……？」

「なんか反発して出てっちゃった」

ここに来て頭の中を更新しなければならぬ事実を語られてしまふとは、思ってたなかった。初葉は何だか恥ずかしげに、靴を玄関の床になじりながら、ちよつと俯き気味に話を進めてくる。

「お兄ちゃんに近づいて、今のお兄ちゃんがお姉ちゃんにふさわしい人間なのかどうか、確かめようと思ったんだ」

「近づくにしても手段が強引すぎるだろ……」

「でもお兄ちゃんは初葉を泊めてくれたでしょ？」

それが全てか。妙に張り詰めた力が、抜けて、世界が広くなったようなどうでもよくなったような。これが馬鹿馬鹿しい気持ちなのか、それとも真剣な気持ちなのかは分からないけれど、いいんじゃないか、とは思った。

「最初は死ねって思ってたけどね。お姉ちゃんのこと、お兄ちゃん

んのことも、許す気になれなかったんだけど。……なんか頑張り屋さんだよお兄ちゃんって。選挙でも一生懸命勝とうとしててさ。じゃあそれならって、お兄ちゃんが選挙でお姉ちゃんに勝てるような人間だったら、私も認めようと思ったんだ。気づいたら、お兄ちゃんに勝てるように自分から手伝うようになってちゃった」

「……僕、負けたけど？」

「でも特別に認めてあげる！」

一際光る笑みに顔を輝かせて、初葉は僕の両肩を掴んだ。引きよせて来た。

顔が近くなると、とたんに、ぞっとした。彼女の笑顔が消えて、硬くなる。

「だから絶対に、お姉ちゃんと付き合って」

「え？」

「付き合わなかったら、絶対に許さないから」

「絶対に許さないって……具体的には何なんだよ」

「最悪殺す」

「!？」

投げ出されるように、解放された。初葉は、舌をチロツと出して、僕に背を向ける。

最後に悪戯っぽく笑ったまま、顔だけこっちに。

「じゃあね、大好きだよお兄ちゃん」

彼女が家に帰るためのドアが、開かれた。

差し込む朝日は、牛乳みたいに白かった。気持ち悪いくらい白い朝。

妹は白さの中に、去って行ったんだ。

ダメだろ絶対。と、僕は思った。締まろうとするドアにすがりついて、外を覗きこんだ。

初葉が歩んで、このアパートを去ろうとしている。僕に見えるのは、初葉の後ろ姿。

「ま、また会おうな！」

振り返って、後ろ歩きのまま、初葉は手を振ってくれた。小さな体をぐっと伸ばすように振ってくれた。

安穩とした日々だろうが選挙の日々だろうが、学校に向かわなければならぬという事実は変わらない訳だ。校門を超え、道行く数々の生徒達。誰にも、選挙による交友の広がりには少なからず経験したようだ。時には、仲睦まじく登校する男女の姿すら見受けられた。全く恨やましい。

……誰がどんな働きかけをするわけでもなく、誰もが、仲良く、楽しく、なっている。悪い気持には決してならなかった。

死ぬほど爽やかな視線が、二度寝の寝ぼけ眼を刺しやがる。生徒玄関に足を踏み入れ、下駄箱を開いた。

「……？」

日常にひょっこり姿を現した違和感に、目を疑った。非日常だ。閉塞されていた空間の中で、内履きの上に可愛らしくその身を乗せていた、純白の便箋。

「こ、こここれ！　これって！？」

目にした途端、心は短絡的な驚きと喜びに心臓が跳ねあがった。だって、ラブレターだ。純白の便箋だ。これでもかっくらいの、ピュアな色だ。神秘的な光景。僕は音をたてて生唾を飲みこんだ。迷わずに、尚且つ、恐る恐る便箋を取り上げ、両手に持った。喉と手が震える。静まらない胸に手を置きつつ、一先ず便箋を裏に返した。どうも差出人の名前が記されている

「……無い」

返しても、くまなく探しても、名前と思しき文字列は一切見当たらなかった。炙り出しで文字が浮かび上がるのか？　いやまさか。周囲の視線から隠すようにして、僕は便箋に封された手紙を取り出した。

至って可愛らしい、花の模様が洩に描かれた手紙。

『放課後、女子棟の屋上に来てください』

これだけだ。差出人の名は無い。……これが男子からの手紙だったら……僕はどうするべきだろうな。花模様の手紙を使うような男だぞ……。

期待を感じるように自分を強制しつつも、半ば諦めている気持ちがあった。

自分を更に諦めさせるため、今まで経験した全く同じシチュエーションを頭の中で数えてみる。……十二回だ。その十二回中、十二回が男子の告白だった。

「……行くだけ行ってみるか」

期待せずに、時を待つとしよう。ポケットに便箋をねじ込みつつ、僕は非日常からの帰還を遂げた。

授業が始まる直前、つまりは休み時間も終了に近づいた頃。真面目に鐘が鳴るのを待つ生徒なんているはずもなく、男子棟は今日も騒がしい。

中でただ一人の女子、鈴音子さんは最近手芸と速読に凝りだしたらしい。彼女にベタベタと寄り集まってくる男子は、やかましいです邪魔です！ と追っ払われてはまた寄って行く。

僕は窓辺で、有村と二人。転落防止用の手すりに背を寄り掛けて、ただ時間が流れるまま、話しこむ。

突如。

「矢琴。脱げ」

「え？」

隣に立つ、有村が言った。

「はああああ！？」

「この世に絶対は無い。何物の事実も、観測するまでは不確定なものだ」

「だから何だよ！」

「お前はもしかしたら女かもしれないし、女ではないかもしれないふと考えたんだ、実は矢琴、お前は自身が女であることを隠して男を貫き通しているのではないかと」

「絶対あり得ない！ 昔風呂入った時に僕が男だってことは確認しただろ！？」

「俺と風呂に入った以後にお前の体で何らかの変異が起こったかもしれない。女体化している可能性とて、無きにしも非ず。未だ科学でも解明されていない神秘がお前の体内で引き起こされているかもしれないだろう。だから脱げ。何を恥ずかしがることがあるんだ。お前は常にブレザーとシャツの下では裸丸出なんだぞ。既に裸のようなものじゃないか」

「何だよその無駄な説得力は！」

有村は変わらずこんな調子だ。まあこんな彼も、流石に選挙終了後は『反省する、もう懲り懲りだ』と、僕達を安心させる発言を残していたが……。

翌日からはまるで何事も無かったかのような顔であるから、良かったような悪かったような。選挙に敗北したショックを受けた様子すら見当たらない。

昨日だか一昨日だか、例の最低な公約について問い詰めてみたが……奴は何ら悪びれた様子も見せずに『伝え忘れた』と一言。

実際、あの妙な公約を直に話を聞かされていた人間は、選挙立候

補時に際して立ち会ったソラと奈乃沙さんのみ、らしい。ソラに熱烈な反対を受けたそうだが、その場では逆に言いくるめてやったそうだ。少しくらい気楽にやれ、生徒会長自身とて、生徒会が尊重すべき一生徒には変わりないだろう、だから、少しくらい私欲に走った公約をお前も考えてみたらどうだ。と。

……何故その結果として、ソラが僕を女子棟に引っこ抜こうと思いつたのかは甚だ疑問だが。まさか僕の事を好きだからとか？と考える敏感な思春期少年らしい僕も心の中には居たけれど、すぐに有り得ないと思いなおした。彼女は、幼馴染だ。ずっと友達だったんだ。異性として意識するなんて、あっちゃいけない。

「矢琴、俺は最近お前が、可愛らしく見えてきた」

なんか危ない事を口走った有村から音も無く遠ざかった。

駄目だ、奴と目を合わしちやいけない。気が狂う。

大人しく自分の席に腰かけようと、椅子を引きずり出したその時だった。

「矢琴君」

鈴音子さんだった。トコトコ。

紙袋に入った何かを抱えたまま、駆け寄ってきた。その何かを、両腕で突き出してくる。

「これを進呈します！」

「え？」

恐る恐る受け取ってみたが、ドッキリの類ではないらしい。さりげなく、袋の中身に目を通してみた。

毛系の、何やら不格好な、ピンク色の手袋が、一對。

「作りました！ 矢琴君には選挙中、色々お世話になったから……手袋は矢琴君につて」

彼女の遠く背後で、鈴音子さん派の男子達が僕を睨んでくるのだ
がどうしよう殺される。

しかしまあ、素直にプレゼントは嬉しいことだ。嬉しい。
ただ一つ、問題点として、今の季節は、夏の手前ということがあ
つて。

「あ、ありがとうな」

「凄く良い出来だと思えます！ 凄いです私！ こんな良い手袋な
んですよ？ ね、ね！ 是非今度、着けてきてくださいね！」

ええええええ……。

これはどう応すればよいのか……。明日学校に着けて……。く？
なんかそれじゃあ僕が可哀そうな人じゃないか。

「そついえば鈴音子さんつて、女子棟に転入はしないのか？」

もう逃げたかったから、話を逸らした。

「しませんよ絶対。今でさえ、女子棟に足を踏み入れた瞬間に奈乃
沙からつけまわされてるんですから」

「……大変だな、お互い」

「それに男子の皆さん、ちょっと意地汚いところはあるけど、何だ
かんだで良い人ですから。私はここが気に入ったんです！」

後ろ手を組み、彼女は楽しそうだ。嘘偽りはないと確信できた。

嫌じゃない。むしろ嬉しい。なんか意識して初めて、自分が笑っていたことに気づいた。

「というわけで、これから色々一緒に、頑張っていきましょう。迷惑掛けますよ」

「……ああ」

「そうそう。後でクラスの皆さんにも手袋を編んでこようと思うんです！ 全員分！」

皆で可哀そうな人にされてしまらしい。

まあ悪くないんじゃないか。てか、良いんじゃないか。

胸の中で凄く滑らかな、桃色のハートが形作られたような気がした。良い意味でドキドキした。嬉しくて。嬉しくて。

「うん」

凄く綺麗に笑っちゃった、かもしれない。ハズい。

いっぱい普通だった。授業中有村は寝ていたし、鈴音子さんはずっと何かしらの練習を続けていたし、通人はメガネをしていたし、休み時間は騒がしい。ただそこに、選挙という争いは無かった。全

てが時間と共に過ぎ去って、全てが一瞬になることを哀愁と感じる。時刻は放課後。僕は下駄箱に書かれていた手紙に従い、女子棟の屋上を目指している。

鈴音子さんがどこ行くんですかー、なんか怪しいです、としつこく付き纏ってきたわけだが、僕が女子棟に入ると知ってそそくさと退散してくれた。

女子棟は以前よりかは幾分も幾分も増して、入り易い環境だ。僕の姿を見るや否や、手を振ってくれる人さえいる。

「……あ」

廊下でバタリ、奈乃沙先輩に遭遇してしまったのはどういう偶然だ。鈴音子さんは逃げて正解だったな。

相変わらず綺麗な人だ。欠点を探すことの方が難しいような、彼女を見ると、人って不平等だなあとしみじみ思われる。

ただし、その美貌に媚びる様子の無い彼女は、無表情のまま、僕の前で立ち止まって。

「初葉が、帰って来たの。今まで面倒掛けて……ごめんなさい」

よかった、ちゃんと帰ったのか。

「構いませんよ。本棚は漁られちゃったけど、全然楽しかったです」

「あの子私に……絶対私とキミには付き合ってほしいって」

「そう言っていました？」

「言ってた」

彼女は、息をつけると、何とも言えぬ笑みに、口を緩めた。普段の表情にはまるで似合わない顔。

今に、にゃあ、とでも口走っちゃいそうな。蕩けたような。

「私と、仲良くしてくれる?」

「……それは、はい」

「付き合ってくれる?」

「……それは、駄目です」

じつと、前のめりに見つめられた。整った目尻が、眉が、瞳が、僕を圧していた。

「キミの事を、男の子だと見れるように頑張るから」

「えっ?」

「男の子を好きになれるようにだって、頑張るから」

まだ、じつと見つめられた。直後に、先輩は控え目のくしゃみを飛ばす。

「アレルギーなんか克服するもん……」

少しおかしくなって笑って見たら、くしゃみ直後の、瞼を薄く開いた目で睨まれた。

『奈乃沙さんの影は何処へ……』

遠くから、彼女の名前を呼ぶ男子の声が微かに。聞きなれた声の色、恐らく通人だ。

「!?!」

先輩の動きが、人知のソレを超えた機敏さを。様になるようなキレの良い足音を立てて、僕の隣を横切り、走り去る。

「逃げるから、それじゃ」

「ちょ、えっ」

まともに体が反応できる前に、逃げられた。別れの挨拶すら告げられなかった。

彼女が階段を降りていく様子だけは、耳で把握できる。

通人に少し、憐れみを持たないでもない。

『……まあ、いいか。よしこれで、奈乃沙さんの気持ちもずいぶん僕に傾いたはずだ』

通人の独り言に、少し、納得した。全て察することができた。

奈乃沙先輩も、通人に対して、男子に対して、頑張ってくれているらしい。

『男の子を好きになれるようにだって、頑張るから』

彼女は確かにそう言っていた。

今日の奈乃沙先輩は、通人のことを少しでも受け入れようと、努力してみたいらしい。それだけは分かった。

彼女が男の子を好きになれる可能性だって、ゼロじゃないだろう。

屋上への扉を開く前に、今一度、手紙を読み返してみた。

文面によれば、『女子棟』の屋上に来てくれ。とのことだ。

黙考する。男子が、わざわざ同じ棟の生徒を女子棟に呼び出すとも考えにくい。

……改めて考えなおせばやはり、相手は女子なんじゃないか。いや、油断はできない。

今までも女子を装って同じような手口を使った輩を、僕は経験しているんだ。

軽い、とても軽い、屋上に続くこのドアを開くか。

僕は悩んだ。ここを開けば待つのは……何だ。

元より、見極めるしか残された道はないんじゃないか。

「よしっ！」

覚悟を決めて扉を開けば、爽快な風が体に吹き付けた。屋上のアスファルトを、僕は踏んだ。限りあるマス目の大地。マス目の大地を超えた向こうには、遠く小さく見える町。空を飛んでいるのかと一瞬思わされるような景色。

「……！」

僕を待っていたその人の、背中が見えた。明らかに女子だ。今までの悩みは何だったんだ。心臓がボンといった。本当に、本当に女子だ……！ ついに……念願が！

「あ、あれ？」

小さな鏡をしきりに見つめているらしい女子が、違和感に気づい

たらしい。

振りかえってきた。見える横顔、キョトンと、丸めた目。

「え……？」

間違いなく、彼女は澤田ソラであると、僕には見えた。

目を凝らしても、こすつても、やはりソラだ。嘘だ、信じたくない。

「ソラ？」

「！？」

状況を理解したらしいソラが、手に持っていた手提げ袋らしき物を僕から隠す。

何をしていたのか、何を持っているのか、それはさしたる問題ではなかった。

僕の胸は高鳴るといつか、いや高鳴っているけれど、どこか落ちて着く。

「何やってんだソラ」

「……な、なな、何でも無いよ！？」

必死だ。

歩み寄れば後退られたが、軽く追いついてみせる。

正面のすぐ目前で向き合った、僕たち。

会話は、切り出しにくくありながら、重くありながら、ボールが弾むようだった。

「手紙、書いたのか？」

「さ、さあ、知らない」

「お前が書いたのか？」
「うん」

ああ決まった。このまま屋上から身を投げたい。
何こいつ、何だよこいつ。何が屋上まで来てくださいだよ、ありえないだろ。

「僕に告白、するのか？」
「し、しない！」
「しないのか？」
「する……」

どっちだよ。

引き攣った顔で、彼女は後ずさるばかりだった。
だから、彼女に追いつこうと、僕が歩む。

次第に彼女の顔が赤くなっているのは見えたけど、それでも歩む。
フェンスに彼女の背中がぶつかって、いよいよ逃げ場は無くなった。

「僕のことを……その……あれなのか？　そういう風に思ってるのか？」

流石に言い出しにくかった。

「……」
「……」

彼女は無言のまま、素早く二度うなずいて意志を伝えてくる。

「何で手紙のこと、バレてるの……？ 私、書くだけ書いて、出さなかったよ？」

「この期に及んどとぼけるな。手紙は確かに俺の下駄箱に入れられてたんだ。事実だろ」

「……う、うう」

彼女は目じりに涙をためつつ、フェンスに頼りきりだった体を、直立させた。

俯いて、気弱に。常に体の一部をせわしなく動かして、ずっと風を受けるだけ。

時間は経つ。経って、覚悟の為に止めていた呼吸が、苦しくなるくらい。

「好き」

ぽつり。

ソラが俯いたまま、言っていた。

「え？」

聞き返し

「好きです!!」

叫ばれた。

一つの空白。僕の心も、頭も。

「……好きなの」

そして、胸の辺りを刺激する気持ちが、凄い勢いで流れ込んできた。

濁流のようになる。本当にこいつは僕のことを好きなんだ、この声他の奴に聞こえてないよな、俺も好きだ、無理だ、俺とソラがそういう関係になるのはあり得ない。

慣れないことだった。情けないことに、終いには「……あ……うん」覚悟もついていたのに、状況を認める声が漏れた。

相手がソラだと分かった瞬間、心に余裕を保ったまま告白を受けることができるだろうと考えていたんだ、そんな馬鹿すぎる自分を殺した。

「……いつからだよ」

「……さあ。昔から」

信じられなかった。昔っていつだ、縁日に行った時か、中学校の入学式か、僕と有村と三人で遊園地に行った時か、カラオケ行った時か、家で間違えてお酒を飲んだ時か。そうか、女の子だったんだ。彼女は。

「好きなのか」

自然と、口走っていた。

「真剣なの、本当に好きなの。矢琴は可愛くて……真面目で、頭もよくて！ 一生懸命で！ 優しくて！ 友達思いなの！！」

言葉を発するたび、彼女の声が強まり、そして俯いた顔も、上がっていく。手提げの袋を両手で腰元に提げ、目を強く瞑りながら「だから好きなの！！」叫んでいた。

泣きそうだったけど、泣いてなかった。動作も言葉も一つ一つが、僕を刺した。

「……本当に、大好きです!!」

何かを振り切ったらしいソラの勢いは、止まりそうにない。

彼女の方から僕に近づいてきた。僕が後ずさって、ただ圧されていた。

彼女は、立てた人差し指を僕の胸に突き付けながら、勢いも新たに。

「真剣に好きで、伝えてみたの!」

「……あ、ああ、うん」

「わ、悪い!？」

「悪いって……何でそうなるんだよ」

「だって……! 矢琴がバカなんだもん!」

「は、はあ!？」

「昔から好きなのに全然気付いてくれないじゃん矢琴!!」

「は、し、仕方ないだろ! ずっと昔から友達だったから、そういう関係は無いだろうって思いこんでたんだよ!」

「そこが駄目なの! 私ずっと頑張ってきたんだよ!? 矢琴の趣味とか、好きな物とか、ずっと一生懸命知ろうとして、なんか色々

……そのっ……!!」

止まらない言い合い。

「これだって!」

ソラは急いだ様子で、手提げの袋から見慣れぬ何かを取り出した。僕に突きつけてきた。

カチューシャ……である前に、何やら目を引く装飾が。ふさふさと、柔らかそうだった。

ネコミミ？ 驚いた、彼女がこんなものを持っているなんて……。

「買ったの！」

あ、ああ、そうかよ。

「……」

「……」

「……」

「……」

空気を気まぐすく染め上げるに十分な沈黙が流れる。僕には到底理解できなかった。

これが、彼女なりに調べ上げた、僕好みなのか。

何なんだ。

交錯する考えに答えは出しくなかつた。

黙って、黙る。時間に比例して、彼女の顔が赤くなっていく。

ずっと僕にネコミミカチューシャを突き出した姿勢で、ひたすら赤く。

「ソラ」

「……え、え？」

「ばか」

「……うん」

ようやく手を引っ込めて、口を真一文字に結んだまま、僕と瞳同士で通じあった。

「着けてみるよ」

「やだ」

「着けたらその瞬間から、お前を女の子として見ることにする」

「そんなぁ……！」

早くしろと急かせば、彼女はおどおどとした、まるでオバケに触りに行くような手つきで、カチューシャを頭の部分にまで持ち上げる。

本当にゆっくりだった、どれだけ待ったかも分からない。

彼女は意を決したように僕の顔を見つめ直すと、ネコミミを……装着した。

「どう……かなぁ……」

泣きそつになりながら、僕に返事をせがんでくるネコミミ少女。

正直、彼女の事を可愛らしく感じる僕がいた。視界を通じて、彼女に胸を突かれていた。可愛過ぎて、強く触りたかった。少し声が漏れて、表情にも出ていたかもしれない。

でも、正直になれるだけの度胸は無いから

「悪くないな」

そんな言葉でお茶を濁す。

「……知らないもう絶対着けない矢琴のが絶対可愛い、うん、今度は矢琴が着けて」

「絶対に嫌だ」

会話に余裕が生まれれば、嘖き出すような笑いがあつた。
告白か、どうしようかな。笑いに揺れた顔が、空を見上げる。ちよつと考えてみた。

今まで女とも思わなかつた人間と付き合つて、そりゃあ時間がかかると思う。

ちよつと伝えたいことが何なのか分からないけれど、即興で彼女に、何か言ってみよう。

笑顔で、ソラを見つめてみた。ソラもただ、僕を見つめていた。
意は……決したんだ。

「僕は」

「ん？ ソラか？ ほお、ネコミミなんぞ付けやがつて」
「！？」

唐突に言葉を指し挟まれて、何も言えなくなつた。それ以上に、この場に誰か、僕たち以外の第三者がいるのだ。気付いて、喋りかけの喉がひくついた。

雷のような速さで振りかえる。一体誰が……！

「よつ」

居たのは、長身。

有村だ。

「しかしソラ、こんなところでお前……何をやっていた？」

奴はニヒルに笑うと、ポケットに手を差し込んだまま、空を眺める。

やはり有村だ。……有村に、ソラのネコミミを……見られた。

「よーくん……?」

「似合ってるぞソラ。正直、信じがたいほどに可愛らしい」

「え? あ、や、やだ! だめ! 見ないで!」

「にやあつて言ってみろ」

「にや、にやあ!」

言うなよ。

紅潮するソラの顔は、ああ恥ずかしすぎて冷静になるなんて不可能なんだろうな、と、傍から見ていて理解出来るような……凜の一字からは正反対を爆進している。

「恥ず……や、やだ……やだ!」

僕が感じたのは、突き飛ばされた衝撃と、遠ざかっていくソラの声。

「やだあああああああ!」

……瞬く間に、ソラは去って行った。ネコミミを付けたまま、再び校舎内の中へ。

彼女の叫びが校舎内で反響しているらしく、ぐわんと、聞こえてきた

次第にそれも無くなっていく。

「矢琴……ソラの奴、こんな場所で何をしていたんだ?」

「お前が何だよ!」

取り残された僕と有村の、安らかとは言えない会話。

「そりやお前……」

有村は両脇に軽く手を差し出して訴えてきたが、疑問は自己解決したらしく、やめた。

「ああそうか、差出人の名前を書くのを忘れていたかもしれない」

「……？」

「俺だ」

「嘘だ」

「いや俺だ」

「だから、今日も言っただろう？ 最近お前が、可愛く見えてきたと。ここはそろそろ、俺も正当な求め方を学ぶいうことで……手紙を」

じわりと視界が歪む。

「ふざけんなあああああああ！！」

有村の声を遮って、僕は走った。逃げた。大地のマス目、目前の景色が、速く走るだけ速く、流れていく。逃げるんだ、こんな屋上飛び発ってやる、と叫べそうなくらい、速く。

こみ上げる涙が消え去るくらい速く、走った。

何がどうしてこうなった。僕のこれからはどうなるんだ。何も見えなかった。

「逃がさん」

「！？」

腕を掴まれた。

「ようやくお前を捕まえる事が出来た」

「ひいつ!？」

「……フ、一生大事にしてやろう。墓まで連れて帰る覚悟で可愛がつてやる」

「や、やめて有村! ちょっと、本当に!！」

「大人しくしろ……さあ楽しもうぜ」

「やだ、やだやだ!！ た、助けて! 誰かああ!！ ソラああ!！」

僕は、男なんだ。女じゃないんだ。いくら叫んでも、声は無駄に虚空へ通るだけで、騒がしい学園の空気に吸収されるだけで、全く意味を成さなかった。

振り切つて逃げた。

走りながら顔を振りかえらせれば、有村が追いかけてくる。

すごい追いかけてくる。

やばい怖い捕まるっ!？ てか殺される!

手刀の如く固めた手を、目を見開きながら猛然と、足と共に突き出してくる。

「待てああああ!！」

「こ、怖いよ! やだ、やだあ!！ 来るなあ!！」

平和な日常つて、何だっけ。

今が楽しいか楽しくないかと言われれば、そりゃ、楽しいけど。

走りながら、心の端とか奥底で、ぼんやり想う。

どうにでもな―れ、なんて自分を見失った暁こそ、負けなんだろうな、と。

「助けてえー!!」

こんな日常も、面白いかもしれない。

でも、あれだ。

絶対に、負けは許されないだろうな。

【エピローグ】僕から、皆から、皆へ、僕へ！（後書き）

オンナオトコの乱、完結です。

いかがだったでしょうか、お楽しみいただいたなら、幸いです。少しでも笑ってくれたなら、この場でお礼を申し上げます。

さてこの作品。

オマーージュ先であるライトノベル、『バカとテストと召喚獣』から様々な物を頂きました。そんな中でも、少しばかりは僕なりのオリジナリティ的なものにじみ出ていれば、と画策しています。もっとも、そんな大層なものでもありませんが……。

今回の作品は、僕自身元々、バカテスにあつたような『試召戦争』のようなギミックは、一切抜くことと決めていました。

ギミックを抜いたバカテスから、紋切り型にしたシナリオ、純粹なラブコメ、キャラクターのみの要素で、どこまで行くことが出来たでしょうか。

萌えというものを、感じて頂けたでしょうか。

何はともあれ、言葉を伝えさせていただきます。

読了していただき、本当に、本当にありがとうございました！

それにしても。

ここまでラブコメらしいラブコメを描いたのは初めてですね……。僕は元々、明るい作品を書くとしてもどこかしら必ず、陰の要素を

持たせる癖があるのですが……。この作品に関しては、完全に明るいものだけで書き上げることができました。少し雑な作品であるとしても、書いていて、僕自身が凄く楽しむことが出来ました。少しでも読者の方に幸せを届けることが出来れば、と思います。

この先も、本文の外で物語が続いていきます。

選挙以外を題材にすれば、まだまだまだ、話ができあがります。果たして次は、この学校で何が起ころうか。遠足編……なんても考えたことはありますが、お届けできる日はいつか来るのかな……。

一つでも続きを妄想していただけるなら、作者としてそれほど嬉しいことも無いです。本当に本当に、読んでくださってありがとうございます。ございました。

ちなみに、作者が好きなキャラは鈴音子さんと奈乃沙先輩です！ちょっと恥ずかしい告白ではあるけれど、そんな暴露で、このあとがきを締めさせていただきますね。

よろしければ、僕が書いた他の作品にも目を通して頂ければ、と思います。

頑張って、面白いもの書いてみせます！

では、ここまでお付き合い頂き、ありがとうございました！

それではー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4747m/>

オンナオトコの乱

2010年10月9日22時54分発行